

---

# とある学生の時間操作

8 8 マン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある学生の時間操作

### 【Zコード】

Z1460Z

### 【作者名】

88マン

### 【あらすじ】

気付いたらエクトプラズムになっていた主人公、それは第一の人生の始まりだった。

学生に戻った彼はどんな生活を送るのか…

初投稿作品です

突然だが、運命というものを信じるか？信じてもいいし信じなくてもいい。運命なんて信じてない僕から言わせてもうひとつ、この状況は理不尽だということだ。

僕は、平凡的な会社員だった、それがつい10分前の状況、今は、普通？のエクトプラズムだ。どうしてこうなった。

まあ、直接的な原因としてはわかりやすい。バスに轢かれたのだ、バス停でバスを待つていて漸く来たと思ったら何故か僕に向かってきて、何故かそのまま轢かれ、そのまま死んだ。何故だ。

そして死を体験しているという今日この頃。フワフワと浮いている自分。ふむ、よくみれば僕以外にも結構見える。何がとは言わないが…

でも死んじゃったか。心残りは特に…ああ、昨日必死になつて考えた企画が、死に切れねえ、せめて没喰らつてから死にたかった。

僕がくあああ、と悶々していると辺りから変な気配がするのが感じ取れた。何だろうと見渡せば辺りにいた同類さんが皆さんに消え去つている。何が起きるんだ？僕は乗り遅れた？

そして目の前に突如として現れた矢。矢？や？ＹＡ！などなどパニクっている間に頭をうち貫かれていた。痛みは無かったけど精神的に辛い。

うち貫かれた瞬間僕は引っ張られるように上に昇つていった。はは

あん？これが昇天だなあ？という思考を持つてぐんぐん引っ張られて氣づけば眼前には立派な男が浮いていた。なにこの人、ダンディズムに溢れすぎて憧れる。

「ふむ、何と説明したらしいのか…すまなかつた」

「何が？」と口にだそうとしても声は出ない」のHクトプラズム。不便だ、どれくらい不便かつていうと一千円札くらい。

「ああ、思考さえしてもらえば」ちらで読み取れるのでな。でだ、謝つていた理由についてだが。私はお前を殺してしまったのだ」

え？僕が死んだのはバスに轢かれたからでは？ああ、運転手？ならわかるよ。これから大変になっちゃうね。ご愁傷様。

「あのバスだがな。本来なら横倒しになつて客が2～3人怪我するだけだつたんだが私が介入して倒れないようにしたのだが…角度を間違えてな、お前の方にバスがいつてしまつたんだ、すまなかつた。

」

え？さらに、へ？何？別に死んだのは企画書以外別に悔いないからいいけど。何？あなた神様だとでも言つの？

「ああ、GODだ。比較級で表すならGod est位は神をやつている。因みに企画だが、あのまま提出していたら後悔するくらい怒られているはずだ」

のおおおおー僕の苦労を返せ！？ていつか死んでよかつたかも！いや、死んでよかつたのか？

「そ、うか、そ、うい、つて、も、ら、え、る、と、私、も、助、か、る。因、み、に、聞、く、が、も、う、一、度、人、生、を、や、り、直、さ、な、い、か？」も、う、一、度、？でも、の、ん、の、樂、し、み、も、な、い、現、実、よ、り、今、の、方、が、樂、し、い、か、も。

「ふむ、こ、の、ま、浮、遊、靈、と、して、存、在、しつ、づ、け、る、とい、ず、れ、精、神、だ、け、残、さ、れ、永、遠、に、意、識、を、囚、わ、れ、て、地、獄、よ、り、つ、ら、い、事、が、待、ち、受、け、て、い、る、の、だ、が…考、え、直、さ、ぬ、か？」

そ、れ、は、ち、よ、つ、と、嫌、だ、な、あ。じ、や、あ、異、世、界、と、か、な、い、の、？何、だ、つ、た、ら、こ、こ、と、は、違、う、方、面、に、發、達、し、た、平、行、世、界、と、か、？

「ふ、む、そ、う、だ、な、ど、う、せ、だ、か、ら、望、み、道、理、に、し、て、や、ろ、う。お、前、は、と、あ、る、～、を、知、つ、て、い、た、な。学、園、都、市、に、で、も、行、つ、て、み、る、か、？」

い、け、る、の、？つ、て、い、う、か、妄、想、の、世、界、じ、や、な、い、の、？

「妄、想、だ、ら、う、が、世、界、は、世、界、だ、G o d e s t の、私、に、不、可、能、は、あ、ん、ま、り、無、い、」

あ、あ、最、上、級、で、も、無、い、と、は、言、い、切、れ、ない、ん、だ、ね。何、だ、か、親、近、感、が、沸、いて、来、た、よ。

「そ、う、か、私、も、お、前、の、評、価、は、な、か、な、か、高、い、ぞ、しゃ、べ、つ、て、い、て、樂、し、い、つ、て、の、も、有、る、が、な、」

有、り、難、づ、い、つ、で、い。

「む、そ、の、呼、ば、れ、方、は、初、め、て、だ、な。新、鮮、で、い、い。と、話、が、脱、線、した、な。ど、う、だ、行、く、の、か？」

そうだね、せつかくだし行くよ。あんまり覚えてないんだけどね。

「わかった、それでは」の扉に入るといい

言つが早いか真後ろに扉が現れ開く。そそくせと入らせてもらひつと扉はゆっくりと閉まつていつた。

「ああ、言い忘れていたがその世界は私の管轄外というか無法地帯だ。お前の体に何かしらの変調が見られるかもしけんがあまり気にするな。」

え？

3月×日

これが転生か…

そう実感したのが僕が生まれ変わったとき、扉に入つてすぐだつた。赤子になつており喋れず、立てず、泣きわめく。本当に自分の体かと疑つてしまふ位だつた。あ、おもらしさもう勘弁してください、何が悲しくて精神年齢的に成人がおむつを変えられなければならないんだよ…つらい。

それだけじゃなかつた、あぶぶーと多少は感情表現もしやすくなつてきた頃、自分は物凄くよだれを垂らすのだと気付いた、あらあら何で口を拭う母親。もうね、心でマジ泣きですよ、情けなさ過ぎて。そんな辱めもある程度成長してくれば問題はなくなつた。むしろいい子だと言われることがおおい、まあ当たり前なのだが…とにかく幼少期は黒歴史ということだ。

そして小学校に入るくらいに気付いたのだが…僕はとてつもなく童顔だろう。いやまあまだ小学生だからしようがないと思う勿れ。女顔だつた。見た瞬間鏡を疑い鏡に異常が無いと見れば6年ほど付き添つた息子、もとい相棒は！と疑いトイレに駆け込んでしまうくらい女顔だつた。パツチリオメメにボブヘアー、うん小学生だからと信じたい。信じて良いんだよね？お父さん、お母さん。

まあ、ただ女顔なだけならしょうがないとして。女顔に気付いて小学校に通いはじめると今まで特に気にすることもなかつた服に違和感を覚えた。これ…文物…と夜中に泣いたことはけして忘れない。

だが何も言えずそのまま親を野放しにしたのがいけなかつたのか、中学に上る頃、制服を買って来た母親に絶望してしまつた。それは明らかにスカートブレザーの制服だつた、刺繡をみれば霧ヶ丘文学院とかかれていた。

お分かりいただけただろうか、僕は何故か学園都市の霧ヶ丘女学院中等部に通わされているのだ！もう二年で卒業間近だが。何で二年間誰も気づかない…

ちなみに今の髪型はボーテール、理由は腰近くまであつて長くて邪魔だから。何が悲しくて髪の毛を伸ばさなきやならなかつたのか…。お母さんのせいなんだけどね、髪切つて来るつていうと包丁持ち出して「貴女をそんな子に育てた覚えはない、貴女を殺して私も死ぬ！」なんて脅して来るからだ。まあジョークなのか本気なのかわかんない目をしてたから髪が伸びなんだけ。

そんなことを色々と返していたが今は学校。まあ学校はもう終わるんだけど、まあ帰らつかつて思い鞄を持つ。

「かなちゃん今帰るの？一緒に何か食べに行かない？」

「うんいっよ」

かなちゃんとは悲しいが僕のことであり、僕の名前は神城かなめといつ。かなめがまだ漢字だつたら男らしかつたのことに常々思つ。そんな僕を誘ってくれたのは鈴木さん、どこにでもいそつた名前だが容姿もどこにでもいそうな感じだ。素朴つていよいよね。下の名前覚えてないけど…ほら、男つてあまり下の名前使わないじゃん？

「かなちゃん、どこに行く？」

「ん~ケーキでも食べに行こうか?」

「あーじゃあ新しく見つけたお店が有るの、そこに行つてみない?」

うんと頷き肩を並べて歩きはじめる、鈴木さんの身長は152位。くせうこんなはずでは。不意に気付いたことがたりによつてヘコムがそれを表さず喋りながら歩く。まだまだ、成長期はこれから!

「いー?」

「うん、可愛いよね?」

そうだね~。なんて答えながら外観を見るとなるほどなと思わされた、見た目は落ち着いたカフェで所々に配置された花が強弱を作つており見ているだけで楽しませてくれる、そんな店。

店内に入ると結構しる人ぞ知る店りしく下校ラッシュのこの時間帯でも座るスペースはちらほら見えている。隠れた名店なのかな?通りから一本入った場所にあるからロコモミーじゃないと入りづらい、と言つよりわかりづらい。なんて考えているとウェイトレスさんがメモ帳のようなものをもつて来ていた、オーダーでもとつてくれるんだろう。

「(ノ)注文はお決まりでしょうか?」

「ん~と、紅茶とモンブランで」

「私も紅茶と…ザツハトルテで」

「かしこまりました、少々お待ちください」

僕はモンブラン、鈴木さんはザツハトルテを頼んだ、オーダーを取り終わったウエイトレスさんはキッチンに消えて行った。

「前から思つてたんだけど…かなちゃんつて甘いもの得意じゃないの？」

「しつこい甘いのは好きよつと…でもモンブラン見たいな残らないのは好きだよ?」

ふーん、とジト目で見られても。得意じゃないんだからしようがない。僕は辛党だ、辛ければ辛いほど良い。稀に辛い物好きはマゾヒストなんていう頭のおかしいのがいるけどそれは嘘だから気にしない方がいい。カプサイシンは…辛いものは正義だ。

「するい…」

「え?」

脳内辛いもの談義で集中を欠いたのか鈴木さんの話しひを聞いてなかつた。

「だつてかなちゃんいつもいろいろんな子と食べに行くのに…全然太つてない…」

「あはは…甘さ控えめのばかりだからじやないかな?後は適度な運動?」

その怖い止めない?…ほんとに怖いから。人の負の感情で人が死

ぬなら僕は今生きていないだろつ、そんな目。

「まあ、かなちゃんには今度陰湿な嫌がらせが行くと思つけど私じゃないからね？」

「いや、そういうのはやめよ? 僕きっと泣くよ?」

「なら私が慰めてあげる」

「犯人じゃん…」

あははと他愛のない話で盛り上がりつつそろそろ帰ろうかという時間、店の前で別れると暗くなりつつ有るが近道として路地裏に入つた。勿論鈴木さんは人通りの多い通りから帰つた。

まあ選択ミスだと誰でもわかるだろつ。僕がこんな格好でこんな顔じゃなければそんなことはなかつたんだけどね!

「はーい? ケ丘のお嬢さんがどうしたのかな?」

「いえ下校しているだけです」

「じゃあさじやあさ俺らと遊ばない?」

「帰つてやらないといけないことが有るので…」

あつという間に前後2人に囲まれた、まだ路地入つて10メートルもしていないので、大通りを通る人は見て見ぬ振りをしている。それはそうだろう僕だってこんな場面見たら素通りする自信が有る。

とこりかする。

「あの…急いでるんで…」

前の男の横を通りうつするが腕を捕まれてしまつ、振りほどくだけの力は僕ではない。貧弱なこの身体が今は憎い。まあ前世も貧弱だったんだけれども。

「おつと、つれないね。でも捕まえたことだしどつに行こうか?」

意味がわからない。頭沸いてるんじゃないの?だからモテないんだ!って言えるだけ強ければどれだけ楽か。と言つよりこういうのに絡まれない容姿がよかつた、それなら今霧ヶ丘女学院の制服着ていなしね。

「あの、離してください、人呼びますよ!」

「その前に黙らせる」とも出来るんだけどな~

腕を掴んでいるほうの男が片腕で口をふさいで来る、本当に気持ち悪い。とこりようじ本当にパンチだ尊厳とか貞操とか色々。

「ジャッジメントですの、その方を離しなさい」

声がする方を見ると一人路地の入口に立つていた。いまどき珍しい正義感に溢れた人だ。と思つたけどジャッジメントだつた。というよりこの喋り方、白井黒子だけが、原作に関わつて来ちゃつたのかな?

「つけ、これが見えないかな~?君は何にも出来ないわけ、わかる

?常盤台のお嬢さん「

捕られた僕を人質にしているからか焦りはないようだ。ただ超能力を使えないからか使わないのか、手の内は隠しておきたいのか、能力については何も話さない。それが正解なんだけれど、僕的には白井さんに有利に事を進めてほしい。

「そうだ俺とお前で一人づつにしようぜ？お前はそっちのヶ丘の奴で俺はこっちの常盤台の奴、どうだ？」

僕を拘束していないうほうの男が切り出した、強引過ぎて白井さん呆れてるけど。

「そうだね、そうしようか？ダブルデートもありだよね？」

僕に聞くな、男とデートするつもりは全くない。そんな性癖はしていない、女装している僕が言うのもなんだがな！

「てなわけでお前はこっちだ！」

僕の手を掴んでいない方の男が強引に掴みにかかる、まあテレポーターだし大丈夫でしょ。何て思っていると僕の背後、つまり腕を掴んでいた男が脳天を蹴られたらしく地に伏した、まあ僕も巻き込まれたといつておこう。

「てめえ！ふ！」おー？」

相方をやられていきり立つたもう一人が白井黒子に殴り掛かるが同じく脳天を蹴られて叩き伏せられていた。

「ふうこれで片付きましたわね、あなた怪我はありませんの?」

「はい、大丈夫です助けていただき有り難うございました」

「いいんですよ、これも私の仕事ですし」

不意に白井さんの後ろの奴が立ち上がって手を振り下ろしていた。  
「危ない！」

普通なら当たつているだろうタイミング、でも当たらなかつた。僕  
が白井さんを押し倒したからだ。だが、振り下ろされた腕は僕の頭  
に当たり僕の意識は薄れていつた。

うすれいく意識の中で白井さんが男一人を拘束しているらしいのは  
わかつた。

6月×日

白井黒子に助けられてから三ヶ月くらい経つた、案の定性別を間違われていたが…諦めるべきなんだろうか？いやいやそんなことはないはず、男らしい服装をすればみんな男と認めてくれるはずだ！こんなことを思つている時点で負けているのかもしれないけど。え？なにかつて？聞かないでもらいたい。

それに僕ももう高校生だ、阿保みたいな格好なんにしていられない…何て思つていた時代が僕にもありました。何で僕はまだ霧ヶ丘にいるんだ？どうせ僕は無能力者判定しか出されていないのに。これは僕が自分から行動しないといけないのか？なら僕はこの学校を転校するぞー！

「ダメだ」というわけではまず担任に話すのがいいと思い話したのだけど、正直ひどい。僕の話を頷いたり同意しながら聞いていたわりにどうですか？と聞けば両断、話すのが阿保らしく感じる。けれどここには諦めたらダメだ、どうにか言い聞かせないと。

「なんですか？無能力者の僕がここにいれば霧ヶ丘の校名に泥を塗るだけじゃないですか」

「機械的には無能力者判定だろう。神城、お前には時間操作があるだろう？」

「まさか、なに言つてるんですか？僕がそんなすごい能力持つてる訳無いじゃないですか」

「嘘をつくな、これは極秘情報なんだが…ツリーダイアグラムの演

算結果から答えが出てる。それにいくら能力測定しても結果は出ないだろ？、眞面目に取り組まないんだからな」

全部知られていたのか…ある意味これで納得できたよなんで僕…男がこの学院に入学出来たのか。というかツリーダイアグラムってそんな個人情報まで…それってどうなの？

「そこまで知つていろんならなんでここをやめたいのかわかるんじやないですか？」

「ああ、だから学院長はお前が自ら辞めたいと言つてきた時は認めてやれといつていた」

「じゃあなんで…」

「お前がやめると給料が減るからだ」

「失礼しました」

言い終わる前には歩きだしていただが退室前に一声をかけた…のが間違えだつた。

「まあまて、先生はお前がやめると給料が10%もカットされてしまうんだ、どうだ可哀相だと思わないか？さらに先生には妻と一児の子供がいるんだ、生活が大変だろ？先生を助けると思つて霧ヶ丘に残りなさい」

肩を掴み熱弁する担任、正直どつかと思つんだけど…

「離してください、僕は転校するんです」

「ええいーーお前の血は何色だ！」

「どう考へても赤です」

全く、何なんだこの担任は、そつちの血は色が違うんじゃないかな？

「くそ、覚えておけ、うちが家庭崩壊起こしたらお前のせいだ」

「先生の家庭のために自分を殺したくないの？」

「なら今は死んでいいんだな？」

「うわーー！先生何か家庭崩壊のあげく多大な慰謝料で首が回らなくなればいいんだ！」

振り切り退室する、後ろからちょー！おまー！何て声がするけど僕は知らない、僕は早く学院長のところに行くんだ！といつても学院長室は今話していた職員室の隣だから何分もかからない。

「失礼します」

ノックをし、声をかけるとどうぞ、と声が帰ってくる。ドアを開け中に入ると机の上に何か書類が有るのが見えた、気にはなるけど僕には関係ないだろう。取り敢えず本題に入ろう。

「学院長先生、転校したいのですが」

もう高齢の女性、おばあちゃんといった方がいいくらいの学院長先生に单刀直入にいう。予測していたのかふわりと笑いかけてきた。

「どうしてですか？」

「はい、これ以上霧ヶ丘の校名に泥を塗ることは出来ないので」

「そんなことはないのですが…分かりました、この書類に記入しておいてください、取り敢えずそれで転校手続きは出来ますからね」

「有り難うござります学院長先生、お世話になつました」

ペコリとお辞儀をし退室する、とにかくこれで僕の男らしさ倍増計画は軌道に乗ったと思つていい…のかな?

7月1日

七月、夏だ。

だからなんだと思つけど僕にとつてはやつと解放された夏だ。

そう、僕は見事転校し終えたのだ！――

服装も今は私服で制服はまだ無いけど…買つの一苦労だったけど、とにかく僕は男物の制服を手に入れたのだ！

そうそう、転校先は、僕が無能力者だからもちろんランクの低い学校、えと…何て校名だっけか？まあ忘れちゃったけど無名校だ。制服がまだ無いから学校には行つてないけど学校が変わったから勿論住む場所も代わる。

まあこいつ言つては何だけど…前の方がいい寮だつたかな？広いし、綺麗だし。

…そんなことより隣に挨拶しに行かない。

チャイムを押し待つ、ピンポンボーンといつも有るやつなチャイムだ。

「はいはーい、今出ますよつと

「ここにひま～今日から隣でお世話になる神城かなめです。ようしくお願ひします」

とりあえず、挨拶はすませたものの…隣が上条さんでどうなの？僕にリア充生活でも見て血涙を流せと？変なところで巻き込まれなくて良いんだけど…まあ過ぎたことを気にしていられない。そう、過

『あたしとなんだ。』

「あ、ああよろしく。俺は上条当麻だ。お隣りさんつてことは転入生なんですか？」

「あはは、面白いね。この時代に古語を使つての何か上条君ぐらいいじやない？」

「む、上条さん以外にも古語マスターはこなはず、いやこなべや」

「どうちなの？まあいいや、これ引越ししづば、食べてよ」

昨日買つてきた1パック98円の蕎麦を渡す、「こんなのは貯持の問題だから安くていいんだよ、いいん…だよね？」

「じゃあこれで、明日から同じ学校だから見かけたらよろしくね？」

「ああ、よろしくな」

扉を閉めて別れる、まさか上条当麻の学校とはね。それに隣の部屋とか…原作に食い込めてことなのかな?どうなんだろう教えてごつでい（笑）

なんて考えながら挨拶周りを続ける、かなめが知ることはない。上条当麻があの蕎麦に救われていることは。なんてね、流石に貧乏学生でも不幸体質どうしてもそこまで切羽詰まつた生活を送つている訳無い。よね？

「取り敢えず挨拶周りは終わりかな?上条家の隣に住んでいる筈のつづかーは居なかつたし…」

明日から男物の制服と思うとついこの日が来たかと年甲斐もなく（精神年齢的に）ワクワクする。

今日はべつすり寝よう。

寝すごした

「初日から遅刻とか、もつだめだせーの」

『不幸だあああああー!』

「お隣りさんもか…といつか僕の台詞となるなよ」

なんて余裕をかましていられなくなつたので取り敢えず学校に電話、言い訳？迷つたとか言つておいたから大丈夫。といつよりはやく出よー！

バン！と扉を開け最速のスピードで鍵を閉める、約2秒。重い衝撃が隣の住人をKOしてしまつたらしい、急ぐのをやめ急いで起こす

「うるさい、ごめん。大丈夫？」

「いっつ、大丈夫大丈夫…つてああああああー学校ー・時間はー！」

急ぎ携帯の時計を出し見せる。途端絶望一色の顔に。というより転ぼうが転ぶまいが時間はそんなに変わらないはず、あれかな？責任

転嫁？まあ僕ももともと間に合つとは思つてなかつたし助け合いつて大切だよね？」

「終わった、絶対終わった…もう間にあわねえ不幸だ…」

「だ、大丈夫僕にいい考えがあるよ…」

え？といつた顔でこちらを向く。藁を掴む想いで僕の考えに耳を向けているのだろう。

「実は僕、さつき学校に遅刻するつて電話したんだ、理由は迷つたつてね？そこをたまたま上条君が見つけてくれたのはどう？何なら絡まれていたところを助けてくれたとかでもいいよ？」

「おお…女神が見える…今日は不幸じゃなかつた」

何を崇めてるのさ？取り敢えず大丈夫だとしても急がないと…遅刻は遅刻なんだから。当麻を引き起こし走り出す、夏の朝からダッシュは精神的にも肉体的にも辛いものがある。朝とはいえ暑いしね。後女神言つな。

そんな訳で学校についた訳だが…取り敢えず当麻は軽い注意だけで済んだ、まあ絡まれていたところを助けた何て言われたら教師としては強く出れないだろう。僕？僕は勿論怒られたさ、まあ慣れない地域ということでそこまでいわれなかつたけど。

「じゃあ神城ちゃん教室に行きますよー」

担任の月詠小萌先生についていく。「うん、どうみても小学生です本当に有り難うござりました。永遠に子供料金で生活できますね。

なんて考えているうちに教室につく、よく考えたら当麻と同じクラスか…つっかーとか青髪ピアスとかいるのか…面白くなりそうだなあ、ほっちはえならなければ。そんなことを考えると教室に着いたらしい、外で待つてくれと言われたので待つ。なんだか緊張してきた。

「えー本来なら朝のH.Rで紹介するはずだったんですがー、少々立て込んでおりまして紹介するのが今になってしまいましてー。皆さん遅刻なんてするもんじゃないですよー?じゃあ神城ちゃん入ってきてくださいー!」

な、なんて入りにくい空気を作るんだ…あれか?嫌がらせか?嫌がらせなのか?そんなに遅刻がいけないことだったのか?…うん、いけないことだったね。でもこの仕打ちは酷いんじゃないのか?もう登校拒否したいくらいだ。

怖ず怖ずと扉に手を掛けた瞬間、開いた。田線が集中する。

「神城ちひやーん!ー?」

小萌先生の声が後ろから聞こえるかまつものかといつ感じに僕は逃げ出そうとした、しかし手を捕まってしまった。

「何で逃げるんですかー?早くしないと授業を始められないのですかー」

笑顔だけど笑つてない、笑つてないよ先生。

「「」「」めんなさい」

素直に謝り仕方なく教室に入る、田を見つやいけない、見ちやいけない。

「えつと…神城かなめですこれからよろしくお願ひします」

ペコリとお辞儀をし怖ず怖ずと反応を待つ、反応無し…なにこれ？もうイジメ？イジメなの？そんな田をしながら小萌先生を見る、田を反らされた…なんですよ…？

「神城ちゃんに何か質問ある人は居ますかー？」

小萌先生の声が教室に響く、それに反応して身長180cmはもうかという青髪の男子が手を挙げ聞いてきた。

「えつと、何で男子の制服着てるんやー？おかしない？」

「えつと「お兄さんのお下がり」ですよ」

《ウラオオオオー！？》

ちよ、何で遮るの？といつ田を向ければ田をまた反らされ口笛を吹きはじめる…ちくせう。あ、僕にも古語マスターとしての資質が垣間見えた。そして男子、五月蠅い。架空の兄貴の妄想でもしているの？ガチムチだらけかこの学校は。特にニヤーニヤー言つてる土御門と青ピ。

「彼氏はこののか一ヤー？土御門さんの隣はいつでも空こじますで  
すよ」

「この訳無いじゃないです僕お《ウヲオオオオ！？》ですし」

「五月蠅い！人に質問するのか叫ぶのかはつきりしてくれ！」

「ほかにありますかー？ないですね？じゃあ神城ちゃんの席は…上  
条ちゃんの隣が空いてますねー？そこを使つてください」

よく聞くけど隣が空いてるって表現おかしいよね？もし風邪かなん  
かで休んでて次の日違う人で全く知らない奴が座つてたらかなり焦  
ると思う。

「なあ、かみやん席かわらへん？」

「黙れエセ関西人。神城、朝はサンキューな、助かつた」

隣に座るとしていた僕に見上げるよつに感謝して来る。青ピも僕  
の顔を見ていた。

「気にしないでよ上条君、後僕のことはかなめでいいよ？」

「じゃあ俺のことは当麻でいいぜ、よひしづな」

「わかったよ当麻、」  
「へひひひひひひひへ

隣に座り前を向く、後ろから青ピの声が聞こえ振り向く。

「僕のことは「青ピ君小萌先生が…」

教壇には笑顔の小萌先生が。ああ、今日もかわえなあとかおもつているのだろうか？キモい。

「今日は生卵が立つまで帰っちゃダメですよー？先生は忙しいのでビデオに撮つておきますからねー？」

怒つてる怒つてる、やつぱ真面目が一番だつて。のあおこれが放置プレイやんなーかみやん羨ましいやるーなんて声は聞こえない。聞こえないけどこれだけは言つておこう。

「最低…」

「かなめ、エセ関西人はほつとけ時間の無駄だ」

「うん」「むむむ、無駄つて何やー！それに僕はエセ関西人じや「青ピ君」

チヨイチヨイと前を示すと青ピは黙つた。まあ庇護欲を誘う小萌先生が泣きやうなのだが、フュニーストの青ピが黙らない訳がない。

そんなこんなで僕の男としての初日が終わつた。

本当に何も無かつた、拍子抜けしたけどよく考えたら前世では普通の平凡人生だったから慣れていたんだろう。

7月6日

今日は休日、のんびりまったり過ごしても、町を「ラララララ」といっても何も言われない日。

まあ、平日歩いていても特に何言われるでも無いみたいだけど…スキルアウトシリーズ見てたら…ねえ?え?スキルアウトシリーズって何かつて?僕がつけたんだよ言わせんな恥ずかしい。まあそんな事言っていても僕は部屋でゆっくりしてるんだけどね。

「かなめちやーん、どっかいかへん?」

「ひまだぜいひまだぜい、どっかいくせよ。」のひと夏の青春を満たすために街に繰り出すべきこー

「…なんでいるの?」

僕は僕の家に招き入れた記憶が無いんだけど…何故かつちーと青ピが入ってきていた、確かに「!!」捨てにこいつて戻つてきて鍵をかけては無かつたけど、入つてへるつてどうなの?

「いやーかみやんに聞いたら隣りじこやん?」じゅ行くしか無いって話になつててん

「いや、不法侵入つて言葉知つてる?」

「固いことまじで行けぜー」

法律を気にしなくてこのせびつかと思ひなさ。

「まあいつか…で？つちー、近麻は？ビリ行つたの？話しを聞く限り一緒にだつたみたいだけビ」

二人は見えるけど当麻だけいない、トドレかな？キヨロキヨロしていふと不意に玄関が開いた

「てめえら一人の家で家主を簀巻きにしてHACON切つてくなんて悪魔か！？」

「しぐじつたゼ…もつと本格的に縛るべきだつたこやー」

「僕も暖房を入れてもべあやつた」

「鬼かー。」

鬼だよここつら、間違いなく。僕の部屋はエアコン効いてるからいいけどこれ止まつたら自害か衰弱死を選ばないといけなくなる…割と本氣で。

「じゃあ僕ちよつと出掛け来るから、ソリソリなうHACON掛けとく、どうする？」

「やひひひひひひひー」

もちろん…僕がデーターだつたらどうするつもりだよ…まあそんなことはないんだけどね！なんだか泣きたくなつてきた。

「いや。つづちー、残つてかなめむやんのあれやこれを…」

「当麻」

「おひ

当麻に一声かけてアイコンタクトでやることの分配をする。僕は押し入れから布団（冬仕様）を取り出し広げる、当麻は座っていた青ピを蹴り布団の上に転がし巻きはじめる。その間に僕はビニールテープを取り出した。

「何するんやーー…やめてやーー…みんなマジでー…あ、でもこれかなめちやんの布団やんな？なんだか興奮してきたでー…」

「！」の布団新品だけだと捨てなくちや…もつたといない

「なんでやねんー！」

「つうこそなんでやねんなんだけど。まあいやとりあえず青ピを簾巻きにして、暖房を入れた当麻の部屋に3人掛かりで投げ入れた。さりげなく運ぶのを手伝っていたつっちーの世渡り上手さが伺える。ぎゃふんとかは聞こえない。リモコンで暖房を効かせ放置。完全に良い子は真似しないでねつていうテロップが出るような光景だろう。

それも終わり僕の部屋に戻つて来ると再度確認をとった。

「ホントについて来るの？あんまり楽しくないかもよ？」

「俺は暇だし付合つべ？」

「取り敢えず外に出ればラブコメるかもしれないぜよ、チャンスは

「…」

当麻は本当にヒマなんだろ？、つづちーは愛に餓えすぎている。舞夏とイチャイチャしてれば良い。何たってシスコン軍曹なんだから。まあ一人ともついて来るつてことはわかった。

「わかった、えーと… 着替え着替え」

クローゼットを開き物色。何を着て行こうか。

「わ、わりい！俺も準備して来る！土御門行くぞ！」

「かみやん俺はべつにこのままで」

うん、いいフードアウトだ、ていうか何でみんなに焦つてたんだろ？。何か忙しいのかな？って

「つあああああ！服があ！服がない！」

クローゼットをどれだけ見渡しても服がない。そうだ…朝洗濯しちゃつたんだ…出掛けないと思つて…全く連絡は前田までにほしいよ…私服がダメとなると…

「制服か…パジャマか…」

しかも制服にいたつては高校の制服は一昨日汚れちゃつたから霧ヶ丘のしかない…でもパジャマなんか着て行けないし…くそ…せーの

「不幸だ…」

怨むぞ……今朝の僕……

「いめんおまたせ」

「あり？ 制服？ つてかなめつて霧ヶ丘だつたのか！」

「そんなことよりかみやん、やっぱり神城かわいいぜよ」

「つづちー、巻いてあげようか？」

「え、遠慮しとくぜ……」

全く、冗談でもムカツとする。僕は男としての生き方に沿つて生きているのこ……今の恰好？ 夢だよ……

「で？ 何で霧ヶ丘のなんだ？」

「実は私服は洗っちゃつて……高校のは昨日クリーニングに出しちゃつたし……これがパジャマしかなかつたから……やっぱダメだよね？」

「こ、いやあんまり気にしなくていいんじゃねーか？ 常盤丘だつていつも制服だしな」

「取り敢えず早く行け」つぜい、ラブコメが俺を待つてゐるぜよ

「そうだね、じゃあ行こうか

暑い…太陽が喧嘩を売つてきてる…誰か買つてやれよ。僕は遠慮しておきます。

「で？どこに行くんだ？」

「ちょっと風紀委員の知り合いで呼ばれてね、僕もよくわかんないんだけど」

「大丈夫なのかにゃー？」

「そんなこと言われて僕にはわかりません！だって相当地に急な話しだつたし。

「そここの喫茶店こいつるまく何だけど」

「かなめさん！」ですわ、ってあらっ・どひひちまですの？」

「急に押しかけてきた無礼者つて所かな？」

「ちょー！それはひどいぜよ！」

「おれもかよー！」

「そこは…一蓮托生つてやつだよ当麻。

「わかりましたの、それではかなめさんこりますわよ

「え？」

「気づいたときには僕はデパートにいた、何を言つてゐるかわからねえ」と「Y

ふう、落ち着け僕、落ち着くんだ。ポルナレフに成り切つてゐる場合じゃない、現実逃避するな。

「かなめさんどう思ひますの?どの下着ならお姉様を陥落できますの?」

そう、ランジHコレーショップにいるのは紛れも無い現実なんだ。

「どれつて言われても……」こんなこと聞くのはあれかもしねないんだけど……いつもはどんなのなの?」

落ち着け、落ち着くんだ。早く的確なアドバイスして早く解放されればいい……それで全部解決だ。

「やうですわね……この黒のレースとかですか」

「なら逆にかわいい系はどう?白井さんが言つには幼いのとかかわいいのが好きなんでしょう?普段とのギャップから気になつて仕方なくなつちゃうんじやないかな?」

「それですわ!何という策士!何という知略。私貴女のお友達として誇りに思つますわ!」

手を掴みブンブン振る、取り敢えず手に持つた下着を置こうか。

「ならこのゲン太とか言うよくわからぬのと…後はどれが良この  
でしょうか…選んでくださいね~」

何でもいいって……取り敢えず何でもいいって。

「これでいいんじやない？」

「クマ、ネコ、カエル…いろんなのが描いてありますのに…わかりましたすぐに買つてきますのでちょっと待つてくださいな」

ふつ……せりとおわった……そう思ひながら取り敢えず下着マーナーか  
ら出る。

「お待たせしましたの、これでお姉様は私にメロメロですわー」

「はは、頑張つてね？」

「もし成功したあかつきには私のすべてを掛けたおもてなしをお見舞いして差し上げますわよ」

何だらう… 恩返しをねばずなのに向かわれるんじやないかつて思つたがつゝせ。

「楽しみにしてるよ?」

今日は晴れ、やつて邊りへひ

## おまけ1

「お姉様？今日の私は一味違いますわよ？」ふふふ、と笑う黒子。御琴ははいはいと言つたように軽く目を向けた。御琴としてはすぐにお元の本に目を向ける筈だった。

「黒子…それ…」

黒子は今日買つたゲン太パンツをはいていた。

「これですか？今日お友達に奨められて買つたのですが…お姉様にはこのなお子様のはおきに似合わないですわよね」

しょんぼりとうなだれ、ベッドに倒れ込み御琴に背を向けた。御琴はそれを凝視しながら。

「あ、当たり前じゃない。そんな子供向けの…まだ前のレースの方がいいわよ」

「本当にあの…じゃあこれビリしたらいいんですね？」

「あ、アタシが処分してあげてもいいわよ？」

背中を向けてはいるが御琴がソワソワしているのが気配でわかる。黒子は確信した。

(ついに私のはいたパンツをお姉様にはいてもらひますのね)

おまけ2

「どーすんだよこれ……俺が処理するのか？不幸だー……」

当麻の目の前には干からびた青ピカが…

7月11日

夕方、学校が終わって僕、当麻、つっちーの3人で帰路につく。え？青ピース？生卵でも立ててるんじゃないかな？

「そういうばかなの能力って何だ？霧ヶ丘にいたくらいだからレベル3位か？」

「ああ～っと伸びをしながら聞いてくる、普通に考えたらもつと早く聞くようなものじゃ無いかな？まあ仕方ないかな、ここに转入するくらいだから落ちこぼれとでも思われてたのかな？」

「僕？僕は無能力者だよ？」

「でもかなめは霧ヶ丘ぜよ、何で入ってたんだ？普通は無理だぜい？」

うーんつっかーって確か学園の暗部に関わってるんだよね？僕としては全然教えても問題は無いけど。というか知ってるんじゃないの？それが広まり研究対象になるのは嫌だなあ……でも霧ヶ丘の一部には知られてるみたいなんだよねえ

「話したくないなんならいいんだぜい？人間誰しも言いたくないことはあるもんだからにゃー」

「ううん、別にいいんだけど……言つても信じてくれるかビックり」

「超能力なんてわけのわかんねえもんが実在すんだ、今更些細なことで驚くような上条さんではございませんよ？」

フラグ？驚くよってフラグを建てたの？

「僕の能力が一応あるんだけど……開発の賜物じゃなくともともとあつたみたいで原石つて言うらしいんだ。その能力の名前が時間操作タイムマニエラっていう大層なものなんだよね」

「…………」「

「へ？」と言ったように見事に驚いてるね、まあ僕ももし何も知らないでこんなこと言われたら驚くと思うけど……いや、先に冗談だと思うかな？

「じゃああれか？かなめは時間を止めた中で動けるのか？」

「いや、僕はまだそんなこと出来ないよ、出来るのは自分の感じる時間を遅くするだけだね。だから僕の能力は他の人から見ると身体能力が良い位にしか見えないんだ。だから判定は無能力者」

「まだってことはいつかは時間を止めることが出来るのかにゃー？」

「括りとしては僕はレベル3位かな？4で相手の時間に干渉できる位で5で世界に干渉できる位かな？だから世界に干渉できる位になれば時は止められるかもね？」

「いや、スゲー能力だよなそれ。霧ヶ丘にいたつていうのも納得出来るな」

うんうん、と頷きながら歩いている、前方不注意当麻は電信柱に突っ込んだ。痛そ。

「まったくだぜい、でもかみやんも負けず劣らざるものん持つてるぜ  
よ」

華麗にスルーしながら当麻の幻想殺しの事をいう。幻想殺しかあ当  
麻の最弱にして最強だっけ？まあ今の僕は何も知らないから聞いて  
おかないと。

「当麻も僕みたいに計測できないものなの？」

「いっつ…心配が全くないことに上条さんのガラスのハートはボロ  
ボロですよ？ふう…俺の右手は異能の力なら何でも焼き消せんだ。」

鼻を抑えながら右手を構える、全く絵にならない。

「じゃあ僕の時間操作意味ないね」

「かみやんの前にはなにも残らないにゃー」

「スキルアウトに弱そうだけどね」

「それを言つなよ…」

あははと笑つていると田の前に噂のスキルアウト達とそれに絡まれ  
ている…誰かよくわからない人。知らない人だなあ

「かみやん出番ぜよ」

「今その話してただろ！土御門、おまえも手伝え」

「俺はここでかなめと見守ってるぜい」

「つちー…まあそんなことはどうでもいいんだけどね？僕はすたすた歩き寄るとスキルアウト達との距離が1メートルをきった所で能力を発動させた。数人振り返ろうが関係ない。自分の出来る時間操作最低速：感覚で言うなら他人の1秒は僕にとって10秒、常人の10倍で動ける。だから僕の移動は見えないだろ？し女子もいつ助けられたのかわからない筈だ。

女子を包囲から出しちょと離れた所に立たせる。僕は何事もなかつたかのように当麻達のところに戻る。この間約5秒。僕にとつては50秒だ。

「つてありや？あの子いつの間にかいなくなってるぞ？」

「かなめが時間操作したんだぜい？ちらりと見えたにやー」

「男として当然のことをしただけぞー！」

ふふんと胸を張つてると僕に影がかかる。振り返るとスキルアウトの皆さんが。チョーク極まつてますが…息ができな

「おうじら、話しを聞くかぎりテメエが邪魔したみてえじゃねえか。ちゅうどいいテメエが責任もつて俺らの相手しろよ。」

「かなめ！土御門！」

「合点承知だぜい！」

それから一人は僕のために戦ってくれた。僕を捕まえていた奴は人

質といつ言葉を知らないのか一人にのせていた。馬鹿だね、まあそんなのに捕まつた僕もなんだけど…まあそこは気にしない方向でいいや。

「いめん、助かつたよ」

「不意打ちじやあしじうがねえつて」

「それに姫さんを助けるのは騎士のやくめなんだぜい?ふふふ、俺に惚れちや黙目だぜい?」

「五月蠅い、でも…ありがと」

僕が素直にお礼を言いつと何故か一人で作戦タイムをしていた。くわう僕がお礼を言つちやいけないっていうのか!

「今はちよつと破壊力が強すざるぜよ…」

「管理人さんタイプな上条さんもちよつと陥落しそうでしたよ」

ちよつと作戦タイムが気になる…なにその楽しそうな言葉の切れ端。

「それよつ早く行かない?ボサツとしてると風紀委員が来ちゃうよ?  
?」

「わづだこやー。すたこりわづだぜい」

7月11日（後書き）

後書きでは始めまして♪♪マンです は愚痴（笑）

この話しなんですが…難産ですね。常にいきあたりばつたりで。読み返してもおもしろくないし…

ぶつけやけ読まなくとも大丈夫です。なぜならこの話しさかなのの能力説明がメインで後はいらないです。説明用の話を作ってそれを投稿してもいいくらいです。もうね、頭が回らない。  
取り敢えず次話からは超電磁砲に入つて行きます。それでもメインは禁書です！

7月16日

今日も学校が終わった、ようやく慣れてきたつて所かな?とにかく補習にはならなそうで何よりかな?小萌先生もなにもいつてこなかつたし大丈夫でしょう多分。

ダン!

「早く鞄に金詰めろってんだろ!!早くしねえどこにつ殺すぞ!??」

「はつ、はいいい!」

現実逃避している場合じゃなかつたね、何でこうなつちゃつたんだろ。僕はただ銀行にお金を降ろしに来ただけなのに。そして何で僕みたいな男を人質にするんだろうね、普通は力とかあまりない女人じやないのかな?と言うより何で銀行強盗なんかしてるの?迷惑だよ?

「取り敢えず僕を帰してもらえませんか?」

「つるせえーおらー早く詰めろよー!」

聞く耳持たず、まあそれが普通なんだろうナビ。

「その娘をはなせ!」

強盗は三人、デブと金髪と黒髪。どうやら黒髪がリーダー格の様だ。三人の不意をついて明らかに影の薄い会社員のような男が僕を捕らえてる金髪に体当たりをかまそうとしていた。

「ヒーローにでもなりたかつたか？オッサン、残念だつたな」

金髪がそういうと会社員の横からデブがタックルし、会社員は吹き飛ばされた。びたーんて擬音が似合いそくなくらい綺麗に倒れた。ちよ、もつちよい頑張つてよ。下手な抵抗は僕を危機に陥れるだけなんですけど！？

「くシロモジにもねえな」

「お前なにもしてねえじゃねえかー」

デブと金髪が仲良くしている、なに？この僕の疎外感、しかも金髪は僕を捕まえたままだから逃げれ無いといつ…といつかまづい、何だ僕の体は！今日茶苦茶トイレに行きたい！

「あの…トイレに…行かせてください」

「あ～ん？ダメに決まつてんだろ？そんなにしたきや漏らしちまいな！」

鬼か！と言つより普通はこんな状況になつたら緊張して尿意なんか無くしそうなもんだけど…

仕方ないあまり使いたくないんだけど…トイレに行くためだ能力使おづ。あまり使いたくないんだけど…老けるのはやくなるらしいじ。

「いみんなさい…もづ」

限界！とばかりに能力を発動し遅くなつた世界でどうにかして腕を

解かせる、方法？無理矢理体を回して肩に噛み付いてやつたら一発だつたよ。全然男らしくなかつたけどね！そのまま能力維持しトイレに駆け込み用を足す。手を洗い戻ってきた僕に他の人質は落胆していた。通報しろよ！僕の馬鹿！

「何をしたか知らねえが…戻ってきたのは失敗だつたな！」

黒髪が右手から火の玉を放つてきた、それを横つ飛びでかわす。絨毯に火が燃え移りスプリンクラーが作動した。

「これでアンチスキルもジャッジメントも来てしまいますよ？」

「くそつーあんま調子にのんじやねえ！」

黒髪がまたも火を放つ、それを避ける。直線的な攻撃だから手の正面から外れるだけで当たらない。そんな感じにチョロチョロと避けていた。

「いらっしゃいお嬢ちゃん」

避けた先にデブがあり捕まつてしまつた、デブに抱き着かれるように力を込められれば僕の体は悲鳴をあげた。抵抗しようにも僕では筋力差があり意味がない。

「あつぐ」

肺の中の酸素が奪われた、それを確認してかデブは僕を金髪に担がせた。そして黒髪がパイロキネシスの力でシャッターを吹き飛ばした。

「よつしゃー引き上げんぞ！」

「うすー。」

「取り敢えず僕をはなせー！」

すらかるひつとしているので離せと叫ぶ、田立ちもすこからすぐ駆け付けられるようだ。自分で脱出できないとか情けない…ま、まあ相手は複数だししょうがないよね？

「うせー耳元で云ふんじゃねえよー。」

「うー、いめんなさい…つい…いいから離せー。」

「暴れんじゃねえー落ちたら歴我すんだー。」

「あ、ありがとウ。」

な、何だこの金髪の優しさは…僕困惑するしか出来ないんだけど…  
つはーまさかこれが狙いか、だとしたらなんて策士なんだ。

「ジャッジメントですのーー！器物破損及び強盗の現行犯で貴方がたを拘束しますー！」

僕が変なことに困惑しているジャッジメントが到着したよつだ、  
とこつかの声は田井さん？

「うー…さっきのスペコンクラーのせいか！？でもこんなに早ええのか？って」

「おーおー、最近のジャッジメントってすいぶんかわいらしくいんだ

なー。」

金髪と黒髪が笑い合ひ、それに同意するよつてテブが一步前に出た。

「ほんとこなーお嬢ちやんそーをどかなこと離我しちやうせーー。」

「うへへ、と氣色の悪い笑いを浮かべながらトブが白井さん抱き着きに行つた。

「セーフティードロップは死亡」フラグですわよ~。」

さすが白井さんかっこいいぜーなんか白井さん女の子なのに捕まつてる僕を助けるって…いやいや男女差別ダメ、絶対。でもわけわかんないシチュエーションだ、これが逆なら白井さんは間違いなく僕に惚れただろ?。僕に惚れると…火傷しちゃうぜ?…………「めんなさい。」

「つづけ、やるじゃねえか。おいーお前は金もつて先に行けー。」  
「俺が食い止めるー。」

「黒髪さんーそれ死亡フラグだつてー。」

つはーつこつこツツコミを入れてしまつた、なんて考えていくと黒髪の指示どおりに車に走り込まれた。

「やつてられるかー俺は先にアジトに戻つてゐぜーお前らも早く来いよー。」

「君ら死亡フラグ大好きだなー。」

「ミミは忘れなかつた。

車が出される、が白井さんの力だろうか、タイヤがパンクしスリップ、壁に衝突し止まつた。頭が痛い、強打すれば当然といえば当然何だけど、なんだか世界の理不尽に泣けてきた。僕が半ベソをかいているうちに金髪は車を乗り捨て走り出した。僕を置いて。

「邪魔だ！」

金髪は常盤台の制服の子の前を通り、うん死亡ふらぐ。と言うより世界の強制力すごいな…僕が絡んで多少流れは変わつていいけど大まかな流れは変わつていない。変えようと思えばかえれるのかな？別段どうしようとかは無いけども。今はこの学生生活を楽しみたいだけだし。そんなことを考えていると田の前には綺麗なレールガングが飛んでいた。

「怪我はございませんの？」

車に乗つたままの僕のところに白井さんがやつってきた。

「大丈夫…なのかな？取り敢えず車止めてくれてありがとね？」

「あら？氣づいてましたの？」

「テレビでタイヤパンクさせる位しかスリップする原因、考えられなかつたから」

まあ他に人がいれば別なんだろうけどさ、特にいなさそうだし、周りはいかにもモブですつて感じに動いてるし。

「で？ わつきのレールガンが噂のお姉様？ 陥落は出来たのかな？」

「ふふ、聞いて驚かないで下さいな、何と黒子が履いた物をお姉様が履くくらいには陥落出来ていますわ」

それは何ともまあ…

「お幸せに？」

「黒子？ あんた何やつてるのよ？ って知り合いで？」

話しをしていると白井さんの後ろから顔が出てきた、御坂御琴、みんな大好き超電磁砲。本人は当麻大好きシンビリっ子。通称ビリビリ。

「ええ、お友達ですわよ」

「始めて超電磁砲、神城かなめです」

「あたしの事は知ってるのね。一応、御坂御琴よ、よひじへ

そしてよひじく車から出るとちょうど黒髪、金髪、デブが連行されている所だった。ここで白井さんが立ち直らせん一言を吐くはずだ！

「もし…まだ悔しいと思える心が残っているなひば  
キタ————！」

「死亡フラグの勉強をして出直してらっしゃいな

あれ  
?

7月17日

銀行強盗にあつてから次の日、特に変わらない日常を謳歌していた。といつても学園都市では強盗も日常の一つなのかも知れない。良くニコースでスキルアウトシリーズが何かをやらかしたとか聞くし。

今田も学校が終わり、僕と青ピの一人で帰路へ、当麻とつづちーは小萌先生に捕まつてた。南無～

「しかしながらもかみやんに負けず劣らずの不幸体質やなー、普通銀行強盗にあつて直々に人質にされるなんてないで？」

そんなこといわれても現にされたんだから仕方ないじや無いか。といつりますは銀行強盗つて言つシチユエーシヨンがない。

「いい経験だと割り切つて思い出に仕舞つておくれよ

「じゃー僕との甘い思い出、つべらへんか？」

「耳元で囁くくな気持ち悪い」

かなめちゃん酷いでーーと言つてゐるが無視だ無視。それにしても何なんだろつこの体質は、当麻張りの巻き込まれかたしてゐよ。当麻みたく不幸で物が破損とかは無いから不幸じや無いんだろうけど…巻き込まれ体質？

「そついえばかなめちゃんは夏休み補習やないんやつて？」

「僕は真面目だからね」

「何いつてこのや、小萌センセの補習受けないなんて勿体ないでー?  
?」

「そんなこといつて小萌先生と僕を絡ませたいだけじゃ無いの? 僕  
が怒られてるの見てるときニヤニヤしてるもんね? 量のいいスケー  
プゴートになるつもりはないよ」

「こつは酷い奴だ、助けようともせず、ずっと小萌先生見てるん  
だ。」

「かなめちゃんならいい羊さんになれるんやろうナビなー? 勿論僕  
がおおかみさんやでー?」

「じやあせこの口でも食べてなよ、赤頭巾ちゃんがお腹切り裂いて  
くれるから」

鬼やー! なんて言つてるけど青ピは基本無視が正解。 し、テス  
トに出るよ

ふと喫茶店に目を向けると白井さんが中に入つていふのが見えた。

後ろを見ると何故か青ピは泣いていたので氣づかれなによつこそつ  
と喫茶店に入った。

「あれ? かなめちゃん? あれ? 僕をおいてかないでやー! ?」

「うん、走り去つていふの確認できたしいいかな?」

中に入り見渡す、白井さんを見つけることが出来た。

「「」なんにちば」

「かなめさん…どうかしましたの？」

「ちょっと見かけたから…えつと初めまして…かな?神城かなめです、よろしく」

「確か初春…何だつけ?もう覚えてないな、主要人物…と書つより当麻Sハーレムとかしか。くそう当麻めえ…なんて羨ましい奴なんだ。

「初春飾利です。神城さんですか?白井さんが言つてた…」

「白井さんが?なんて?」

「勿論最高の策士としてですの」

「策士?何でよ?」

御坂さんがわからないといった顔で見ている。うんわかつたら僕と白井さんが消えるかもしれないね。

「結構頭の回転が速いんです、それこそ私とお姉様との強固な絆をさらに強固に確かなものに策をもつしてくれたんですねよ」

それちょっとダウト、あともう少し進んでくとダウトがアウトになるくらいにダウト。

「で?何やつてたの?御坂さんもいることは今日は一人とも非番のかな?」

「つてそうでした！ほら初春、早く行きますわよ

「あつう～まだ食べてない～」

なるほど、パフェを頼んでたのはサボりだつたのか。と言つよりさすがジャッジメントなのかな？右手一本で人間一人引きずれるなんて…腕相撲は止めておこう、プライドがね？

「御坂さんは、買い食いかな？」

「当たり、しかしジャッジメントも大変よね～」

「そうだね、でもいないと大変じゃない？現に僕は昨日助けられたわけだし」

「それでも、そんな仕事する気にならないわね」

「それは困るな、警邏中にそんな話しをされでは示しがつかん

どちりさま～何なの？

「早く腕章つけて！」

「え？」

「君もだ！」

「え？」

「僕が何か？」

「早く警邏に行くぞ」

『え?』

まあいつものことだが言わしてもいいおつ。

「どうしてこうなった」

「そんなの私が聞きたいわよ」

「警邏中だ氣を引きしめないか?... 全く、腕章付けないわジャッジメントのエロ忘れるわ... 困ったもんだ」

僕らが困つてこむと思つただけど、氣のせいかな?

「HDD何で初めから持つてないし」

「ありや? 新人さん?だから待機してたの? じゃあ今日は私が指導してあげよつ」

「私達は」なら今回は私と捜索活動かな

「御坂さん、諦めよ?」

「やうやく...」

手を額に当てダメだ』つやになつてる御坂さんに声をかける。ひょ

「アーリーはおじいちゃんの孫だ。

「何を捜すんですか？」

「これくらいのピンク色で花柄の子供用の鞄なんだ」

「何でそんなものを…あ！」

「わかりました」

御坂さんはどうしたんだ?何か考えはじめたと思つたら急に氣合いを入れはじめた。

「おお、そのいきだ新人さん」

あれからビルの隙間とか川とか捜し回った。

「ねえ、もう少し情報収集したほうがよくないうちにさつきから変なところにじか捜してないよ」

「ん――よしぬはあつちだ！」

「ちよつといいでですか？」

「なんだ？」

「遺失物ならなくした本人にどの程度の場所か聞いた方がいいんじ  
や…」

「それじゃあここのを探そう」

と僕の意見を華麗にスルーし自動公園にやつてきた、一番まともな  
場所がやつときた。

3人で別々に捜す、御坂さんのほうを見ると子供に群がられていた。  
さすがお嬢様学校。

「あれ？お姉ちゃん何で男の人の服着てるのー？」

「わけわかんねー」

「男装つてやつだよ、姉ちゃんがそんなことってたぜ」

君のお姉ちゃんは君に何を教えるんだ。と言つより…

「僕は男だー！」

「お姉ちゃん、うかついたー」

「嘘つきだー」

酷い、純粋な田で嘘つきとかやめてよ。

「なにやってんだー？」

「うん、これくらいのピンクで花柄の鞄搜してるんだけど」

「あれじゃねーの?」

ふと見ると御坂さんが犬を追い掛けっていた。鞄をくわえていた。それもつかの間、鞄が上に飛んでいた。

「だあああああ！」

あれ？ 御坂さんびしょ濡れになっちゃわない？

「僕がとるよ！」

肩にかけていた鞄を投げ捨て全力で走り噴水に飛び込む、能力を使わないのは老けるのがいやだから。

「君大丈夫か！」

まあ制服には財布とか携帯は入れてないから水は大丈夫。

「はい、それより確保しました。」

「あーーー！ お姉様！ ジヤッジメントだつたんですの！ ってかなんかさんもですの！ それに濡れ濡れのすけすけ… って早くこれで隠してください！」

何だかテンパつているようだ、と言つより隠すつて… なにかでてる？ 取り敢えず渡されたカーディガンを羽織ることに。

「何だかなあ 夏風邪だけはひきたくないな…」

ぽつりと「ほし御坂さん達を見ると鞄は本人のところに戻ったようだ。

「『』めんなさい私がバッグなくしちゃったから」

「いや……」

「せひ、 いつにかわせ」めんなれこじやなくって」

初春さんが「」と促す、一押しで聞いたのか少し笑顔になり。

「ありがとうお姉ちゃん達」

「かつこよかつたぜー」

肩をバンと叩いて来る子供。うん、今日は散々かと思つたけど人助けって気持ちがいいね。

「お一人ともこれを機会にジャッジメントにならねては？」

「絶対にいやー」

「僕もバスかな。でもいつに手伝いなさいよ~」

取り敢えずジャッジメントじゃなって誤解も解けたらしい時間だから「ンビニでも行こうかな

「御坂さん「ンビニ」よって帰るけど一緒にいく?」

つて、これは、デート？ デートじゃ無いのか？ 僕中学生なんて……ああ僕もまだ高校生だから大丈夫か。

「そうね……門限は過ぎてるし行くわ」

あれ？ 何か普通の対応だ……僕の考えすぎなのか？ それとも相手にされてないだけなのか？

「じゃあいこつけよ」

「暗証番号がチガイマス」

「いや、そんなはずは……」

「暗証番号がチガイマス」

「なんでだー！」

あれ？ 何だか聞き覚えのある声が……当麻？

「はー……でも今日は何だか疲れた……」

「ジャッジメントって大変だよね。」

「あれはあの人気が勝手に大変にしてるのよ、絶対」

「コンビニの自動ドアが開く。見慣れたつんつんヘアーが入口で不幸

を呟んでいた。「コンビニの店員もひりひりと様子を伺つてゐる、や  
りやこれだけ騒いでればねえ…

「カードが飲み込まれて出てこない……？不幸だ……」

「…久しぶりね」

「つづー…ビロビリーとかなめか…どうしたんだ?こんな時間に

「ビロビリ言つくなー」

御坂さんがATMを叩く、放電をともなつたそれは口にした物を吐  
き出せせる程だ。まあカードだけじね。

「で、出たあーサンキュービロビリー出合つたときは向でこんな  
と知り合になつちまつたのか考えたけど今初めてこの出合つて感  
謝…」

会話において行かれた僕がATMを見ているとふしゅーとこつち音と  
ともにアラートが鳴り響いた。

「ふつ、不幸だーー?」

「ちよー・当麻!ー?」

「ちよつと待ちなさいよー」

当麻が僕と御坂さんを引つつかんで走り出す。すごい力だ。

場所は変わって河川敷

何故か僕の目の前で戦が行われていた。

「で？ 何で僕も逃げなきゃいけないの？』

今僕と当麻は肩を並べて走っている。

「俺達友達だろー。」

ぴーんとサムズアップ。ムカつく。

「友達の命をむやみに巻き込まないでくれるー。？」

「あんたらすいぶん余裕じゃないー！？」

そんなことはない。

「不幸だーー？」

「それは僕の台詞だあー？ 御坂さん、白井さんにこられ返しここでー。」

カーディガンを投げて渡す、何故か田へりましになつたらしく立ち止まっていた。

「かなめナイス！ 今のうちはだー！」

「御坂さんー、ゴメンー。」

といいながら逃げる僕。明日は筋肉痛かも…

7月20日

ついてない、朝からホントにつけてないよ。」二二三日、久しづりに何も起きていない基本的に学校に行つて帰る、そんな日常を送っていたのに、文明の利器を生かした快適な暮らしが約束されたはずなのに、何で片つ端から壊滅させられているのだろうか。

「不幸だああああ！」

「だからそれは…僕の台詞だあああ！」

ちゅうど開いていた冷蔵庫から間違いなくダメな感じの豆腐を装備しダッシュで玄関を飛び出す。五指すは隣の部屋、当麻のところだ。バコンとこう音とともに玄関を蹴り開ける。弁償なんかしないし直す気も無い。何よりもやるべき事があるので。

「いつ死んでもけえええ！」

僕の手から放たれるのは『腐食強化された豆腐』全力で顔に投げつける、僕が蹴り入ってきたのに驚いていたのか口がちょうど開いていたがやることが理解されたのか口が閉じられた。

べしゃつとう音とともに顔が豆腐まみれになり倒れた。足元には無傷のキャッシュカードがおちていた。

「なにすんだー！アとか壊してどうすんだよー！」

「じゃあに？僕の家の家電製品全部弁償してくれるの？僕の家の

買い置き弁償してくれるの？僕のこの快適な生活スペースを返してくれるの？全部出来ないんでしょう？だから豆腐を食らえええ！」

もつ一つ装備していた豆腐を構える、顔を青くさせながら必死に止めてきた。小癪なクリンチだ。暑苦しい。

「ま、まてよ。上條さんが家電製品を壊したって証拠は？何でもかんでも上條さんのせいにされたらまたまたもんじゃないですよ？」

「……ふーん。じゃあ昨日リビングを挑発して雷雲まで使わせたのはほどいの馬鹿なのかなあ？」

豆腐を持つていないので手でキャッシュカードを軽く折り曲げる。

「お前！それを亡き物にされたら俺は死ぬぞーいいのか！？」

「だから最初に死ねって行つたんだああああー！」

「豆腐を顔面にふりぬき多少すつきりした。部屋に戻るとじょっ。

「うう…不幸だ…」

臭い豆腐で溺死しろ。

一応裁きは降せたので部屋に戻った、先ずはこの生ガリとスクランプをどうにかするとしよう。

生ガリを袋いっぱいに詰め、家電達を玄関に運ぶ。正直一人でやるのはきつい汗もすごいからし、油断すると熱中症になってしまつ。いつもこうとこうこそ友情の使い所だらう。

とこりわけで再度当麻の部屋に向かつ。やつを友情を叩き割つたつて?あれくらいじゃ僕たちの絆(笑)は壊れたりしない。なんか変なのが入つたような気もするけど気にしない。

「当麻ー!つけのスクラップ片付けるの手伝つてー!つてー!」

中に入ると当麻の畳の前に先程はいなかつた少女がいた、全裸でおそらくあれがインデックスだろう、全裸だが。で、当麻が歩く教會をぶち殺したのだろう、だからインデックスは全裸。

「失礼しましたー!」

すつと部屋を後にする。

「変態…変態だああああー!」

「ちづーよーちがくねえけどーいややつぱ違つー!」

どひひだよ。

「当麻が女の子を拉致監禁して挙げ句の果てにはコスプレを強要する人間だつたなんてー!」

「やめてーー上條さんの評判をありもしないことで下げるでーー!」

僕と当麻がグダグダやつてこると面も無く忍び寄る気配が…

「二やああああー!」

ちなみに僕の叫び声。何故叫んだかというとインテックスが噛み付いてきたからだ。取り敢えず引きはがそうと走り回る。当麻の部屋に入ってしまったのは御愛敬。

「何で……どうして……」

インテックスは何とか離れた。僕はインテックスのすわる対角線の部屋の隅に逃げ込んだ。

「いじめられた猫みたいだな……」

当麻が呟いたがそんなことを気にしているられない。奴、インテックスは玄関に繋がる場所に陣取つてるので自室に帰ることも出来ない。ちなみに部屋を出てきたときは当麻の布団を巻いて出てきたのに今は僕が羽織つていた4Lのネルシャツを使つていて。何でそんな大きいの買ったのかつて?通販でM頼んだら何故かこれが来ただよ、仕方ないからこれは部屋着として無理矢理使つていて。勿体ないし?まあ着ると膝くらいまで来るからこれにパンツだけで過ごすことも可能。まあ流石に短パンくらい履くけどね。と、変な方向に思考がズレた。僕は今歩く教会の裁縫をさせられている。まあミシンだけだ。

「何で僕が……」

「何か文句あるのかな?早く治してほしいのかも」

ガチンガチンと最早ギロチンみたいな音が聞こえる。気にならなければ文句を言つても負けだ。

取り敢えず早く縫わないと噛み切られかねないので。能力を使う。

設定を最速にして縫うが600秒かかった、実際に塗つていれば100分…1時間と40分掛かっている計算。だがこれだけ時間をかけたのだ、文句は無いくらいの出来栄えのはずだ。

「お、驚きの早さだつたんだよ…それに凄く綺麗でうれしいな

よかつた、上機嫌だ。噛み切られる心配はしなくても良いだらつ。

「うわー！そーだ補修だ補修！えつと…あーそつだ俺これから学校出なきやなんないんだけど、おまえどーすんの？」「こじるか？」

「出へへ

すっくと立ち上がり玄関を出て行く。「さあ。

「あ、あー…」

「うん？違うんだよ、いつまでもここにいると連中こじるまで来そうだし。君だって部屋を爆破されたくないよね？」

当麻絶句、僕も絶句。「冗談じゃない当麻の不幸を隣の僕にまでなすりつけるのはやめてほしい」。ノロノロと出していくインデックスの後ろ姿に財布を開きながら追い掛ける当麻、お札が見えないんだけど。仕方なく僕も追い掛ける。すると田と鼻の先でガツという変な音が聞こえるとともに当麻が奇声を上げながらのたうちまわるうとしていた。その時携帯がするりとポケットから落ちたが僕が能力を使い取る。当麻に貸し出す。

「あ、あぶねええ…助かつたぜかなめ」

といいながら手を向ける当麻、帰すときに貸し壱と伝えると不幸だーーと言っていた。

「不幸といつよりドジなだけかも。幻想殺しなんてものがホントにあるなら、仕方ないのかもしねー」

「…ビリーハーとでせり~」

「君の右手は本当に神の奇跡を消してしまってるんだとおもうよ? この歩く教会も神の恵み(ラッキー)だからね」

といつてヒラヒラ、うん結構ご機嫌らしい。当麻が常日頃の不幸が実は君の右手にあるといわれて不幸だああああーと叫んでいるけど気にしない。その隣で学園の掃除口ボにビビリードを持って行かれたと思い込み走り去っていくインデックスの姿があつた。

大丈夫かな…確かにこのあと切られるんだよね?でもヒロインだし丈夫だよね?

インデックスが去り当麻も補修に行ってしまって部屋で必死にスクラップと戦う。残りは大物、冷蔵庫を残すのみとなつた。時間はもう夕方だが。

時間も時間で多少はお金もある、いつことで久しぶりにピザでも食べようと思い注文したのが1時間前。いつこうに来る気配が無く携帯で再度確認の電話をかけたがもう出たの一点張り、真面目な答えが帰ってきてきそうないので仕方なく早めに持つてきてくれという事を伝えて電話をきつた。

そんな理由でイライラしているところにひょいと田の前でじょんじゃん騒ぎをしているようだ。無駄だ！とか邪魔だ！とかつるさい…うるさいんだよ！

自室だが苛々に勝てなかつたからか気付いたらドアを蹴り開けていた。ふごあー…という聞き慣れない声がしたがきにしない。

「もうひとつありましたね、術者を戦闘不能に追い込むことが」  
「これは聞き覚えのある声、インテックスだ。首輪が発動しているのだろう。

おそらくだが… イノケンティウスが出るよりも早く鎮圧して閉まつたのか。とも思つたが廊下は水浸し、火災報知器が作動したのどう…言えることはただひとつ。

「不幸だ…」

僕と当麻はインテックスを担いですぐに逃げ出した。

路地裏に逃げ込んだ僕たちは方針を決めた、取り敢えずインテックスを治すことだ。だが学生では、脳を作り替えた人間では出来ないらしい。

「なら…僕は？僕は学生だけど原石だ、開発は受けてないよ

「大丈夫かも…しない。でも道具が揃わないと…」

「仕方ねえなあの人人に頼るか…あの先生この時間でもう眠つてるなんていわねーだろうな」

すぐさま青髪。ピアスに電話し小萌先生の住所を聞く、何で知つていたかは知らないけど今は助かる。ストーカーはやめときなよという言葉を一方的に残し直ぐに小萌先生の家に向かつた。

事情を話しあては電話して来るといつて部屋からでていった。僕は小萌先生の看病（という名の魔術）を身ながら気付いたら眠つてしまっていた。自分で気づかなかつたが疲れていたということだろう。

本格的に非日常（科学）と非日常（魔術）の日常（異常）が始まつたのかもしれない。

7月24日

僕の目の前ではイラつきながら電話を切った当麻がいる。そう、もう制限時間だというのに解決策が湧かない当麻のハツ当たりだ。そろそろ、僕も動こう。

僕は21日には田を覚まし普通に行動していた。当麻の代わりに守るように動くのをスタイル達魔術師にアピールしコンタクトを取り情報を集めている対面を見せた、じゃないと何故知っているのかを追求されそうだし後々大変なことになりそうならば今多少の苦労をした方がマシといつもの。

「当麻、本当に救えないと思つてる?」

「そんなわけねえだろ!でも俺は脳生理学専門でもねえ!下手な知識じゃ駄目なんだよ!」

身振り手振りで体が痛んでも冷静にはなれないようだ。

「当麻、冷静になつて考えてほしい。完全記憶能力者なんて世界でも珍しい能力かもしれない。でもね?一年で15%もの容量を使つたとして、何年生きられる?」

「何年つて6~7年だろ?」

「さう、じゃあ何でそういう結果が出てるの?」コーナスにならない?

当麻はハツと氣づく、ちょっと考えればおかしことひだらけなの

だから。

「ナリナリ」とかーでも、85%もの容量使つちまつてるんだろ?」

「うん、当麻は勉強し直した方がいいね。いい、よくきて? 記憶には色々な入れ物があると考えて、それが運動記憶をしまつ手続記憶、知識などを仕舞つておく意味記憶、日常生活を記憶するHピソード記憶とかね? まあいろいろあるんだけど、脳医学上記憶容量が違う記憶容量を埋めることは無いんだよ。つまり、そこから導き出される陰謀は?」

当麻が青い顔で何かに気づく、それはそうじゃままだされたら答えに辿り着けないわけがない。

「あ…さか」

当麻が呆然自失としていると玄関の扉が開いた。

入るなり魔術の準備を始めた。僕らの事などまるで見えていないようだ、そうふるまつっていた。

「じめんね魔術師のお二人さん、僕と当麻が君らの隣にインデックスがいるときに出来無くて。」

「黙れ…邪魔をするな…」

「おお、怖い怖い。無知で弱虫の子供は助けられるものも助けずには自分の都合だけで助けられる子の記憶を奪うの?」

「それ以上は侮辱と見なします。次はありませんよ」

七天七刀を突き付けて来る。挑発しているとは言え話しても聞いていないようだ。

「当麻、やううか。多分脳に一番近い場所。口の中にあると思つから」

「おう、まかせとけよ。」

僕と当麻が立ち上がりインデックスに近付く。目の前をスタイルが塞ぐ。

「君等は……」こんな死人一步手前の病人にわけのわからないことをするつもりか！やれるのか化け物共が！」

激昂し叫ぶスタイル。それすらも見えていない横をすり抜ける僕等。

「なつ！？」

スタイルが振り返るが気にしてなんかいられない。それよりもやらなければならないことがあるから。インデックスのそばに近付くと当麻も右腕の包帯を外す。それを見た神裂が七天七刀を握るのが見えた。僕は最大で能力を発動し手を弾きたき落とした。流石に常人でも10倍の速度でなら神裂から叩き落せるらしい。本気の場合は知らないけど。

「邪魔をするなといったはず。それすらも理解出来ないのかな？」これだからお子様は

やれやれといったように首を振った後当麻の様子を見る。

「あつた？」

「ああ、バッヂリだ。」

当麻がインテックスの喉に手を突っ込んだ。途端、当麻の右手が弾かれるように反れる。どうやら成功したようだ。腕から血が出てるけどね。

「――警告、第三章第二節。Index-librum-prohibitorum――禁書目録の首輪、第一から第三まで全結界の貫通を確認。」

インテックスが迎撃体制を整える、当麻も右手を構えていた。魔術師達は呆然としていた。その中、魔術が放たれる。

「竜王の殺息つて……びりしてあの子が魔術を！」

「おい！こいつがなんだか知つてんのか！名前は！？正体は！？弱点は！？一つ残らず教えやがれ！！」

「けど……そんな」

「じれつてえ野郎だな！んなのみりやわかんだろ！？」

当麻が叫ぶ。それを聞いて歯を食いしばりながらスタイルが呟いた。

「Footnotes1」

「曖昧な可能性なんていらない。あの子の記憶を消せばとりあえず命を助けることが出来る。僕はそのためなら誰でも殺す！…そうきめたんだ、ずっと前に」

「とりあえずだあ！？ふざけやがつて、そんなつまんねえ事はどうでもいい！理屈も理論もいらねえ！たつた一つだけ答える魔術師！…………テメエは、インデックスを助けたくねえのかよ？テメエらずつと待つてたんだろ？インデックスの記憶を奪わ無くてすむ、インデックスの敵に回らなくて済む、そんな誰もが笑つて誰もが望む最つ高なハッピーエンドつてやつを！ずっと待ち焦がれてたんだろ、こんな展開を！英雄がやつて来るまでの場つなぎじゃねえ！主人公が登場するまでの時間稼ぎじゃねえ！他の何者でもなく他の何物でもなく！テメエのその手でたつた一人の女の子を助けて見せるつて誓つたんじやねえのかよ！？ずっとずっと主人公になりたかったんだろ！絵本みてえに映画みてえに！命をかけてたつた一人の女の子を守る、そんな魔術師になりたかったんだろ！だつたらそれは全然終わってねえ！！始まってすらいねえ！ちつとぐらい長いプロローグで絶望してんじやねえよ…………手を伸ばせば届くんだ。いい加減始めようぜ、魔術師！」

長い台詞を有難う。完全にノーマークだった僕はインデックスの後ろに回り込んで膝を落とし羽交い締めにし竜王の殺息を上空に反らした。といえばかつてのいじれ简单に言えば一緒に倒れこんだ。

「当麻！」

「かなめ！ナイスだ！」

呪縛から逃れた当麻が走り込み右手を宛てがつた。

「駄目です！上！」

上を見ていた僕は、当麻を助けようとしたがインデックスと絡み合つて動けなかつた。当麻はそのまま僕とインデックスを庇うように倒れ込み、その体に何枚もの光の羽を浴びた。

その日当麻は死んだ。僕とインデックスと魔術師を助け、上条当麻は死んだ。

7月24日（後書き）

流石上條さん、説教が長い。およそ350文字。本文の1／7ほどになりました（笑）

7月27日

何の変哲も無い病室そこに当麻はいた。おそらくこれから何度もお世話になる部屋だろう、ぜひ頑張って。

「あなたは…? 部屋、間違えてませんか?」

「間違えてないよ、上条君。僕は神城かなめ、君の隣人で親友…だったのかな? すぐなくとも僕はそう思つてゐるよ?」

「そつか…あらためてようしきくな。かなめ!」

「うん…当麻」

それから、他愛ない話しを続ける。

「そういえば…インデックスには記憶ないって教えないほうがいいのかな? さつき先生から嘘付いたつて聞いたんだけど

「あー…うん黙つてくれ。今更記憶ありませんでしたじゃ頭がただじやすまねえからな」

かまれたらしい頭を指差して言ひ。気持ちはわかるあれ超痛い。

「あはは、わかったよ。じゃあ僕はそろそろこいくね?」

「ああ、またな」

そういうつて別れる。後ろから「隣人は僕つ娘か?」なんて言つてい

るのは気がつかなかった。

久し振りに開放感に溢れているが、今の僕の服装も開放感に溢れていた。

あの学生寮での戦いの日、僕はちょうど私服を外に干し忘れたまま逃げたようだ。まあ、あの状況で洗濯物なんか気にしていられないが…

まあ簡潔に言えばスタイルの馬鹿ガキに燃やし尽くされたといつことだ。私服とその学期の戦いを終えた僕の男子制服のふたつが、そして残つたのは前に封印していた霧ヶ丘の制服とインテックス事件？の時に来ていたせいで当麻の血やら埃やらで駄目になつた私服と唯一無事だった邪魔にならないように小萌先生の部屋に脱ぎ捨てていた馬鹿みたいにでかいネルシャツ一枚。

まあどうこうことがとつと、今は霧ヶ丘の制服でスカートのせいで嫌な開放感が満ちてこるとことだ。

「早速だけど…不幸だ…」

今更どうしようもないことなので街をプラプラ歩く。

「お？かなめだにゃー。どうしたんだ？やつと自分の性別に気づいたぜよっ！」

「…………どしたの？つちかー？一人？ロシロー？どうどう妹さんに

も見限られちやつた？残念だねー？」

「色々違つにやああー！？ちょっと忙しいつていいつてただけだぜよ！今日だつて朝飯用意してくれたし、見限るなんてありえないぜい！」

「ちょ、声大きすぎ、目立つちゃうるじやん。誰か助けて…

「あれ？つづちーにかなめやん？どないしたん？つはーまさかつちー僕を差し置いてかなめどーテーーー！？それは許せん！？」

「こいつは助けにならないでしょー。チョンジを希望したいです。

「「「Hセ関西人、メッキが剥がれてるよ（ゼイ）」」

「つはー！？えええエセちやうねんて！僕はれつきとした関西人やねんで？決して米所出身じゃああらへんよ？」

「青ピの家では何の品種扱つてるの？」

「僕？…えーとたしか……つて！？ちやうゆうつてんでしょー。僕はけしてツツコミ/ミ/じやあないねんで？ボケをきますのが僕の仕事やねんで？」

「一回もボケてない米所の卒が何言つてるぜよ、ドンメンメッキはがれてるぜい？」

「「「ひひひひ、ひひひひ！」僕もう帰るー！」

走り去る「ひひひひ」数歩走ると振り返った。

「じゃあね？」

「エリは元気上めると、いつもうるさいから、もう少し帰してええん？」

「鬱陶しいからもう帰れにゃー振り向かず涙を流さないことを向いて帰るんだぜい？」

うわあああ、と本当に泣きたいうのか止を向いて走っていった。

「ねえつづかー？」

「なんだぜい？」

「青ピ、スキルアウトの集団がいるの見えてないよね？あつ、ぶつかつた

「俺には何も見えてないな」

僕の目にも何も残ってないな。ってわけにもいかないか…

「助けないの？」

「痛いのは嫌だぜい！」

「同感、ひょっと様子見ておいつか」

ところがで路地裏に連れ込まれた青ピを近くで見守ること。

「 もうかんべんしてやー、僕の心はもう折れでんねんで？」

「 だから落し前つけたら帰ろうが何しようがいってんだろーー？」

「 僕は能力もなければ喧嘩も弱い一般人やねん。君等とは違うねんでー？」

「 仕方ねえな、じゃあ俺とタイマンしろよ。それで許してやるよ。」

「 堪忍してやー」

堪忍してやとか言いつつもう逃げられないのがわかつたのか構えをとる青ペ。

「 始まつたにやー、俺はスキルアワード三千円だぜい」

「 え？ 賭けるの？ じゃあ大穴に三千円ね」

「 隨分ギャンブラーぜよ」

いやいや、一人とも賭けたら成立しないでしょ？

なんてやつてこるとボコボコの青ペが。

「 どうだ？ 降参するか？」

「 あらー。」

「 わかねーよー？」

「 ひどいーー？」

「おお、殴られてる。負けちゃいけないよ?僕の三千円!」

そんな流れで見ていたが、スキルアウトの拳の軌道が田の上を通りが見えた。あれは危ない!下手すれば失明する!そんな切羽詰まつた状況だからか能力を発動させた。自分自身ではなく、《青ピ》といつ自分以外を対象にして《能力が発動した。

青ピも驚いているだろうがチャンスと見たらしく、右手を振り抜いたのかそんな恰好をしていた、スキルアウトはその前で倒れて気絶していた。

「は…は…僕やったねんな…」

「あいつがやられたなんて…」

スキルアウト達はやわつき気絶したやつを回収して逃げた。

青ピは

「僕は時間操作タイムマニエコレータだつたねんな!?」

と喜んでいた。まあ僕の力なんだが黙つておこう。

「青ピが勝つたこや…」

ちょっと狡い氣もするがいたくものはいただい!。僕自身こんな事でレベルが上るとは思わなかつたけど…

7月27日（後書き）

さて、原作一巻が終わりましたので！お待ちかね（？）日常編入りますよ～

レベルも上がったしね霧ヶ丘の制服だけど。

三千円も貰つたしね霧ヶ丘の制服だけど。

夏休みだしね霧ヶ丘の制服しかないけど。

そんな内容でしたが…この小説は需要はあるのだろうか…？

チヨロチヨロ評価されていてとてもうれしいですが…感想が無いといつことは内容が薄いってことなんでしょうね（需要が無いなんて信じない、男の娘は誰もが求めるもののはず／笑）…精進します。

7月28日

今日は当麻が退院する日、とこりこりとインテックスと一緒に迎えに行く。まあ僕が居ないといけないって事はないんだけど、何とも不安が残るからねえ…。

「せういえば、『ご飯ぢゃんと食べた?』と言うより美味しかった?」

インテックスは昨日、当麻の部屋で寝るといって聞かなかつたので仕方なく僕が救援物資として餌やりしていたのだ。

「とつても美味しかつたんだよ!」

ぱああつとキラキラと輝き腕を振るひ、これが後光かつ!と無駄にキラキラとしていた。

「ちやんと電子レンジは使えた?」

「ムツ、あまり見くびらないでほしいかも。一度覚えたら忘れない私を見くびりすざだと想つ

「わう?」めんね? 昨日説明しないままだつたから備え付けの生卵も一緒にやつちやつたんじやないかつて心配してたんだよ。爆発しちゃうからね

皿を向けると、ギクッといつた反応をしていた。あーあ。

「大丈夫だよ、当麻にあつたら何も説明せずに『めんつて謝つとけば

「それは謝るひと言わないかも、でもわかつたんだよー。」

「うんこい返事だ、なんて話しきしてこのひがひ当麻の病室に。部屋を見るとむかひこいつでも出れるよいだ。」

「おはよひ、当麻」

「ん？ ああかなめといインテックスか」

「うひゃ…」

「なんだよ？ 畏まつて、上條さんひがひおはよいだせり」

「いわんなさい」

しつかり頭を垂らす、当麻はつこて行けず慌ててこる

「許してあげなよ当麻、可憐そひだよ」

「許すも何も。上條さんには何がなんだかわからないんですけど…？ ええい、何がなんだかわからんねえけどよおー上條さんの広い心で許すから頭あげるよー」

「ホントこー。」

「ああー任せとカー。」

「よかつたんだよ、部屋中睨まみれになつても怒らないなんて聖人君子なんだよー。」

え?といった顔でフリーズした、まあ何となく事情を察知したんだ  
ろ?。

「ちなみに電子レンジだから相当ひどいことになってるかも」

フリーズ状態からひびが入る、まあ入院していたほうが幸福なのか  
もね?ご飯出て来るし基本ヒッキーだから不幸な田にも会わないし  
ね。

「不幸だああ…」

僕だつてそれをいいたい、まだ僕霧ヶ丘の制服だよ?服を早急に買  
わないとい。

「じゃあ帰らつか?」

「お腹も空いたし何か食べて帰るんだよー。」

「やうだね、じゃあ適当に行こうか?当麻?...いくよ?」

田の前で手を振つても見えていないのか、顔を覗き込む。

「つかあー。」

と何かすこじものを見たような顔された。ごめんね、不細工で!く  
そ、何で!つでいはもつとイケメンにしなかつた。それは我の知  
らぬところだ、と聞こえた気がした。

「む~」

と唸りながら、ギロチンインデックスが出動した、お腹が空いて立腹らしい。何ニヤニヤしてんのだよーとか、鼻の下伸びきってるんだよーとか聞こえる、なに?当麻はドM?

「えへ、姫の暴行もとい制裁も終わつたことですし何か食べにいきませう!」

「インデックスはね、お寿司が食べたいんだよー!」

「うーん、じゃあーー〇〇円寿司でも行こうか?」

「わーい」

とりあえず安いところへ、道中当麻がずっと財布を気にしてたけどまさかあの小銭しか入つてない状況?まあ今回は快気祝いとかも入つてるから僕がだすんだけどね。

といつわけでちよつとした人気店もピークを外せばほら、こんなに空いてる。といつことで特にストレスも貯まることもなく、むしろ発散していた。主に当麻とインデックスが。

「寿司うめえ… 幸福だあ…」

「がつがつがつがつ」

どうやってそんなにがつがつ行けるのか、回転寿司だし後ろの人人が可愛そうだ。と思い見ると睨まれた、もうやだ。

「あれ?かみやんだにゅー」

「マジ? 入院中やないの?」

とこり声が聞こえ振り向くとつむかーと青ペロ故が当麻に敵意丸出しだった。

「かみやん、何一人で両手に花状態なんだぜい?」

「もうわづ、何でこないにおいしい状況になつてんのか気になつただけやんな、別に妬ましいわけやないで?」

「かなめが退院祝いって連れて来てくれたんだよ! 白状な奴らとはちげえんだよ」

まあ、お隣りさんですし?

「こいつの間にかなめの好感度あげたんや~!」

「青ペ?」

「何や? かなめちゃん、かみやんやなべてやつぱつ僕やつた?」

「はここれ」

といつてマグロを渡す、まあわざびがす! こことこなつてゐやつだけど。で、何で受け取らないの?

「かなめちゃん、あ~ん」

「ハハハハハ」口を開ける、高こよ。としゃがめとこしゃがませる、

青ピがつづりと当麻に勝者の顔をしていた。まあ構わず突っ込む。

「かつ…辛い！」

わざびにやられて泣いている。

「あはははははー！お前！好感度超高えー！」

「流石かなめだぜい、笑いがわかつてゐにゃー」

「せつかくのおこしそうなのに勿体ないんだよー。」

インテックスの追撃のわざびマグロ、我ながら酷いなあ。

とまあそんなことがあつたけど快気祝いとしては成功じゃないかな？

そして気になるお会計は…僕が5皿、当麻が22皿、インテックスが46皿

をやつなら諭吉さん。こんなにちは野口さん

そして途中で捨ててきた青ピ以外の全員で寮に帰った。青ピ？知らない。

そして帰宅、ドアを開けた当麻が固まつてた。

「わ、忘れてた…ふ、ふふふせつかく楽しい時間過ごしてたのにな

あ

「インテックスは今日はかなめのところに泊まる約束なんだよー。」

といい僕の部屋に入つてくれる。まあドンマイ当麻。

「不幸だあああー！」

「近所迷惑だ」いや。

不敏だ。

7月30日（前書き）

時間軸が違つてしまふだし何がしたいの?ってなるかもしない  
気になーぜ!つて方。私けなすためだけに読むドクさんの方は  
お進みください

7月30日

さて、僕は何故こんな事をしているのだろうか？僕は常盤台の生徒でなければ女でもない。じゃあ何で常盤台のプールの清掃をしているのかなあ？

「朝からひてもひの匂過ぎだつての立派もおわづかなこいつが、  
こいつは」と一々、「

僕も掃除をさせられてこりつてどうこうことー?といつかも当た  
り前のようにやらされるのっておかしくないー?

「これ今日中に終わんのかしらねー」

僕の今日を返してください、特に用事はなかつたけれど……いや服買  
いに行きたかつたけれど。

何でこんな事になつちやつたんだろう…あれがいけなかつたのかな

7月25日

インテックス事件？が終結し当麻が入院しインテックスが僕と当麻の部屋を行き来しているころ、といつても入院したその日の夜。僕は特に大きな怪我などはなかつたので部屋の片付けをしようとしていた。まあ、あんな事の後なのでやる気はおきなかつたんだけどね。そんなこともあつてちょっと息抜きに外に出た、ちょっとした買い物をしにコンビニへ。

「あれ？白井さんに御坂さん…って…？」ビリしたの？？？じぶん傷だらけだけど…。」

「あんたか…」

「ちよつと事件に巻き込まれましたのに、急いで寮へ帰らなければならぬのでまた後日お会いしましたよ。」

足引きずつてるつて…あ、こけた。

「わかった、すいぶん急いでるのも、足が辛いのもわかつたからとりあえず家によつて怪我の治療をしようつか」

「あんたね…急いでるつて言つてるでしょー！もつ門限過ぎてるのこれ以上遅くして私たちひどくなると思つてるのよー痛ヅー！」

「はーはー治療しましょつねー

「入院らごーーーー？」

「いわゆるアーネスト・ラッセルの評判を下げるなー？

「白井さんは怪我してなさそうだね、じゃあ御坂さんの治療を手伝つてね？」

「はーはーですの」

「はーなーせーーー！」

とまあ、暴れる御坂さんを治療してもらひてゐ間に常盤台の寮に電

話をかける。

「あ、もしもし。神城と申しますが常盤台中学の寮でようじいでしょうか？」

「ええ、常盤台中学寮ですが、何かご用でしょうか？」

「ええ、ただいま御坂美琴さんと白井黒子さんが家にいるのですが、何か事件に巻き込まれたらしくて家で治療をしているのです、そちらの門限を過ぎてしまつてからの連絡で申し訳ありませんが考慮の方をしていただきたくて」

「わかりました、何があったのかはわかりませんがうちの生徒の治療をしていただき感謝しております」

「いえ、では治療が終わり次第寮の方へ送らせてもらいますので…そうですね、今から30分後くらいでしょうか、近づき次第連絡を入れますので、では失礼します」

電話を切る、いくら厳しいといつても連絡を入れたのだから大丈夫でしよう、うん。

「何をしていらしたのですか？」

「ちよつと電話をね。治療もすんだことだし行こうか?送つてくよ?」

「早く帰らないと何されるか…」

そんなに怖いのか…まあそこは僕に感謝だよね?連絡を入れてあげ

たんだし。

といつわけで、寮につぐ。御坂さんと白井さんはコソコソとスクの様にステルスしていた。その後ろで電話をかけている僕、出ないけど。

「全く、ルームメイト一人とも門限を破るとは… 時期ハズレだが部屋替えも考慮する必要があるか?」

「お、お言葉ですが」

「いい、知っている。よく無事だつたな」

「へつ？」

「おお、かつこいい、御坂さんもほつけるくらこかつこいい。まあ違う意味だと思うけび」

「電話した神城です、無理矢理治療させていただいたので遅くなってしましました。」

「君が親切にしてくれたのか、あらためて礼を言わせてもらひおつ。ありがとつ」

「どうこい」とですの?」

「ここにいる神城が君等が事件に巻き込まれて怪我の治療と遅くなるということを連絡してくれたのだ。全く、自分達で連絡してほしかったがな。」

「…申し訳あつませんでした」

「すみませんでした…」

「うん、子供とは一いつスをすることで成長するからね、これで連絡を入れることをやめようになるでしょう。」

「反省しているならよろしく」

「それじゃあ…」

「だが」

途端、白井さんの後ろを取つたと思つたら首を「キッ」と一発、「ミ」という音で放り捨てた。あれ？僕連絡とか入れて考慮してもらつたんだよね？

「規則を破るということは風紀を乱すことだ。致し方ない理由で遵守出来ぬ事もあるだろう。しかし君達は我が校を代表する能力者だ。どんな事情であれ規則破りを黙認しては他のもの達に示しがつかん、規則破りには罰が必要だ、そつは思わんか？ん？」

考覈の結果がこれだよ…って事でいいのかな？まあ多分掃除とかでしょ、そこら辺が打倒じゃない？

「やうだな…30日にプール掃除だ、忘れるなよ。あと、そここの神城もだ」

え？、僕！？何で？何も悪いことしてなくない？といつよつ僕この寮の人間でもなければ常盤台の生徒でもないんだけど…

「あの、かなめさんはいつの生徒では……」

「だが、うちの生徒を拘束し門限に遅れさせたのも事実だろ？…まあ連帯責任だと思え。」

何だらうこの理不尽な仕打ちは。僕悪いことは何もしていないとこりよ、ここにとこにしたと思つてゐるんだけど。

「かなめさん、巻き込んで申し訳ありませんの」

「じめんね、私たちの罰に巻き込んで」

あれ？逃がすつもりはないの？

「ウゥゥツヘシヘツヘ…」

なんだか思い出したら泣けてきた、なんだか今日は枕が濡れそうだ。

白井さんは白井さんで変な笑い方してゐし…御坂さんに聞かれたらいろいろ終わると思うんだけど…

「おねーさま！炎天下の作業には水分補給が必須ですよ、わたくし特製のドリンクはいかが？」

ドリンク…いいねえ…プール掃除なんて一、一時間で終わると思つてそんなの準備しないよ。そろそろ枯れ果てそうだ。

「で、でも味には自信が…っ！」

そろそろ、危ないかも…仕方なくプールサイドに登り後ろに声をかける。

「「めん、ちよつと飲み物買つてくれるね?つこでだしこっしょに買つてこようか?」

「あら、”コングなう”ぞこますわよ」

「え? もうつてもいいの?」

「うふ、へる」

何か言つてゐけどまあいいか。つてなんだこれ、物凄く飲みにくいやんだけど…よく吸収出来るつてことにしておこう。

あれ?白井さんと御坂さんが真つ青な顔してるけど…

「どうかしたの?」

「あんた、なんともないの?」

「ん?熱中症とかになつてないけど?」

「大丈夫そうね。」

何が大丈夫なのか詳しく。つて、何か頭がふらふらしてきた…

「『』めん、ちょっと熱中症掛かってるのかも… フラフラする…」

唯一の外での服、霧ヶ丘の制服が濡れるのも構わず、水槽の壁にもたれ込み座り込んでしまつ。ちょ！とかいろいろ聞こえるけどちょっと休ませて…

「お姉様のそばに…いる資格が…ありませんのオオ…」

「パートナーなんだからさ」

何だか断片的にいろいろ聞こえる…目を開けると白井さんと御坂さんが…というよりなんだ？すごくかわいい…いや、知ってるけどさ。何だかいつも以上に可愛く見える。

「はあ…はあ…んつ」

「大丈夫ですの！？もしかして本当に熱中症ならすぐに保健室に行つたほうがいいですわよ」

「白井…さん」

「ホントに大丈夫なの？」

「御坂…さん」

二人が並んで僕の顔を覗き込んで来る

「わっ！」

「なっ！」

僕は無意識のうちに一人に抱き着いていたようだ。あれ? 何で僕抱き着いてるんだ?

「うーん、めんなさい…」

冷静になり土下座をする、一人とも、いや僕も含めて三人とも顔が赤いだろう。

「あたしこそつちの氣はない…」

「わ、わたくしはお姉様一筋ですのよ…」

「いや、もう『めんなさい』。自分でも自制が聞かなくなつて…どうじゅぢやつたんだろ」

「へーるーーー…」

「あつ! お姉様! 流石にそれは身体が…あうつ! ?」「かなめさんがおかしくなつちゃつたじゃない! ?

僕がおかしく? せつか…やつぱりおかしかつたか。まあ自分でしかしいと思うくらいだしそりゃそうだよね?

「黒子、取りあえずかなめさんを家に帰してあげて」「わ、わかりましたの…」

そんなこんなでリタイアしてしまった僕、白井さんは僕をテレビポートで寮まで送つてくれるとすぐトンボ返りで帰つて行つた。

「ダメだあ…何か…おかしい…」

「かなめ～鰯節ないか…」

「あ～、とうま。つんちゅうとまつてて？」

鰯節を持つて振り返ると顔が赤かった。どうしたんだひつ、風邪？

「サンキュー…じゃ、じゃあな！」

当麻が帰ると僕もベッドに寝転がり眠ることにした。

今日は…散々だったなあ…

その頃、当麻の部屋。

「はあ…何かかなめ…顔が赤くなつてて可愛かつたなあ…」

「と～ま～？」

隣の部屋からの不幸絶叫でかなめの目が覚めたのは言ひまでもなか  
つた

8月1日

一昨日のプール掃除、あれは僕にとてもいい運動だったよつだ。このたくましき腕、惚れ惚れする様な胸板。ふ、ふふふ僕は男の中の男Men of Men、sになつたのだ！

という妄想をしていた、目の前の鏡を見てつい現実逃避をしてしまつていたようだ。ワイルドな髪型、男らしさ溢れる雑誌に載つていた服。これだけの要素を集めたのにも関わらず丸つきり似合わない、どういうことだ…僕は漢じやなかつたのか？いやそんなことがあるわけがない、この男らし過ぎる心を持っているんだ、間違いないはず。この服は僕に合わなかつた、そういうことにしておこう、うん。というわけで新品同然の服を綺麗にたたみ袋に入れ直す。誰かにく れてやるわ。

「舞夏がいつもお世話になつてゐるお礼つて言つてたぜい？中身はク ッキーみたいだからいつしょにお茶にするぜよ」

「そもそも当然のよつて話しつけないでくれる？不法侵入だよね？警察 行こつか？」

「紅茶でいいにゃー？アッサム茶が美味いって噂だぜい？持つてき たから入れてやるにゃー」

会話のドッジボール、勿論ボール一個で受け取るなんて事はしない。 なんだい。

気付くとお茶会の準備は終わつてゐる、ニャーニャーひねむれっこ、 クッキーおいしいなあ…

「インデックスはダージリンも好きなんだよ?でもアッサムでいいからのみたいかも、入れてくれるとうれしいな」

「何でいるの?何で食べるの?何でさも当然のように紅茶入れさせようとするの?…すみません今すぐ煎れます」

歯をガチンガチンと動かす、それだけで優先順位が変わってしまう。トラウマって怖いね!いや、トラウマだから怖いのは当たり前か…

「ビーゾー煎れ方なんてよくわかんないから適当だけ…」

「うん、全く容れ方ちがくて旨味が全然出てないけど気持ちは伝わったよ。」「

ひでえ、僕の精一杯を完全否定したあげく何も籠つてない気持ちだけ汲み取るなんて…

いや、気持ちを汲み取るなんて出来ないか…ってことは完全否定するだけして後は社交辞令ってこと?何だか泣けてきた。

「それにしても食い過ぎだぜい?かなめの分も残さないとダメだぜよ、それが紳士淑女の嗜みってやつだぜい?」

「む?インデックスは神の使いだからお告げのとおりもうここきてるだけかも、だから貰えるものはもらつとくんだよ?」

「ちょっとまつて?その理論はおかしい

「神のお告げなら仕方ないにゃー」

「その納得の仕方はおかしい、ってなんでイングリッシュはそんなに誇らしそうなの?え?これは僕がおかしいの?え?あれ?」

「宿命なんだよ」

ならしかたないな

「で、かなめ。さつき仕舞つてた服は誰が着るんだ?…どうみてもサイズが一回り大きかつた気がするぜよ」

「…仕方ないじゃん、僕にはM大きすぎるみたいなんだもん。S何てあまり売つてないし…」

「よしじゃあ今日はかなめの服を買いつてい行くじゃー、その大きい服は俺がかみやんに売つてきて資金作つて来るぜよ」

「イングリッシュは当麻の部屋に戻つてお風呂い飯食べて来るんだよ」

「じゅあこつしょにかみやんのとこでござい。定価の倍へりこでぼつたくつて来るから期待してるぜよ」

「嵐のよ二二一人だ、何だかどつと疲れた…寝よう、うん。

「じゅあかなめいくせよー早く準備するこやー

「わかったよ、ちゅつと顔洗つて着替えて来るから待つてて

何でそんなに元気なんだか…オッサンにはついていけないよ。精神年齢的にな?多分きっと。うん、精神年齢アラフォーのはずなんだ。

つて、着替えかあ…冒頭のあれが駄目となるとまた制服になっちゃうんだよな…いやね？霧ヶ丘のじゃがないんだよ？一応制服は頬んであるからね？だから昨日できあがったからそれを着て行くつもりなんだけど…おかしいな？同じところで作ったはずなのに…同じオジサンに頼んだはずなのに何でか知らないけれど女物の制服何だよね…死にたい。でもまあこれを着て行くしかないわけで、鬱だ。

「準備オッケー、行こうつか」

「じゃあこくせい、つてお下がりの制服じゃないこー。」

「あれ、お下がりじゃないつて言つてゐよな？巻くよ？巻こひやうよ？」

「つて巻にかかるから言つてもこじやないぜー。」

「暴れるなあーつてうわー！」

簾巻き暖房の刑にしよつとしたが返された。だけどおかしい、布団挟まずにロープでそのまま縛られてるんだナビ…

「く、変態ー！」

「変態じゃないこやーーあらぬ尊立てないでくれー！  
助けてーーむがつー。」

「ちよつと黙つていろよー。」

「かなめー、醤油ないかー？」

当麻が部屋に入つてくる、不法侵入も何のそだが救援だ、ありがたい。

「てめえ！土御門！見損なつたぞ！」

「誤解だにゃーーー！」

「ロープで縛つて口ふさぐ、どんな誤解があるつてんだよー違うだろーか弱い僕っ子を力付くで押さえ付ける？違うだろー！それはただの犯罪じゃねえかー！それでいいのか？心は捕まえられず、その身を犯罪に染める。そうじやないだろ？少しづつ少しづつ近づいていくもんだろうがー！そんなことも出来ねえのかよーならばまず、その犯罪的思考をぶち殺すーーー！」

そげふスイッチ入りましたー。」なんといひで見るとは…何て思つてゐるうちに幻想的な右フックがつっちーの顎にヒット、世界を狙えるんじやあないだろ？まあボクシングなんか見ないしわからないけどね？だつて見てるだけで痛そうじやん？

何てやつているうちにロープを解いてくれる、くそう僕にもつと力があれば…腕力だけだ。

「で？何やつてたんだ？いくら変態でも友達に手を出すと思えねえんだけど」

「反撃された？のかな、うん」

「はんげきー？」

「イラつと来たから巻いてやるつと黙つたり攻撃された、ほり残

布団を指差しため息をつく、もつと力がないと駄目か。アイードモアパウア・

「で、何で制服着てんの？ 確か補習なかつたよな？」

「私服が燃やし廻されたから…ね」

「あー…」愁傷様

「服を分けてくれてもいいよ」

「サイズあわないにゃー、M着れないかなめちゃなんだぜい？」

シャキーンと立ち上がり失礼なことを言つづり。ナメんな着れないことはない、だつて4L着てるんだし。

「何？僕が低身長で貧弱とでも言いたいの？男なんてこいつが強ければいいんだよ！」

グッと親指で自分の心臓を指差す、ふふつ決まつたね。

「かみやんより臭い」とをここまで堂々といえるのも才能だにゃー

「ちよつとまで！俺そんなに恥ずかしい」と言つてないつて

「いやいや、かみやんも結構臭い」と言つてね

「あれくらいか？そこまでいかねつて

ひ、ひでえ。何なの？僕って恥ずかしい人間だったの？……そう思つたら恥ずかしくなってきた。

書き置きしてこいつ、旅に出ます。つてね？

ちよつじあーだこーだ收まらないみたいだし、じゃあね！

「かなめ、消えた」

「かみやん、口調が崩壊してるぜい？」

「つて、そんなことはどうでもいいんだよーかなめが逃げた」

「じうせ恥ずかしくなつたからにゃー、外歩いてれば見つかるやよ

「だな、じゃあ飯でも食いに行くか

「行くにゃー」

れども、つい逃げちゃった訳だけ…

服買いに行こひ、うん。僕に合ひBest of bookを探しに。

そんなことを思いながら近くの人気のメンズショップを手指す。そ  
ういえばお腹すいたな…次見えた御飯処に入る。

そんなわけで来ました『漢定食屋』もつね、ビビッと来たよ?僕を待つてたんだよね?このお店。

『おう、遅かったなかなめ』

「あれ?おかしいな、置いてきたはずの一人が見えるなあ?疲れるのかなあ?」

「俺達の事を見えてないとか疲れてるんじゃないのか?」

「現実から田を反らしちゃ駄目じゃー

よし、違う席に座り直す。テーブル席じゃなくてカウンター席、いかにも男らしい。

「こりっしゃー

「オススメってあります?」

「お嬢ちゃんには炒飯、漢なら激烈炒飯がおすすめだよ!」

ふつ僕が食べるものなんか決まっているようなもんじゃないか。

「激烈で」

「おつ威勢がいいねーでも辛いよー?」

「望む所です」

「あこよー?」

「……大丈夫です」

「箸一本10kiloたけど重いよー?」

「炒飯で」

「あいよー炒飯ー!」

なんなの?今日のこの敗北の連続は…腕立てでもしなきゃいけないの?いや…今日がおかしいだけだよね?気にしないでおい!ハ。

「お待ちか…お嬢ちゃん可愛いし威勢がいいからおまけで杏仁豆腐付けちゃお!」

「あ、ありがとうございます」

「おひとー俺はまだお兄さんで通すからな?忘れんなよお嬢ちゃんー!」

おまけしてもらひた手前確定じゃない…僕は男なんだよう。

つてこの炒飯おこしおなあ、ちょっと量多いけど。

「(ノ)駆走さまでしたー」

「あいよー炒飯一つで480円ねー!」

ちょうど払い店を出る、並麻?つづかー?放置放置、激烈頼んだみたこで必死だったしそうとしており。ついで払う店を出る、並麻?つづかー?放置放置、激烈頼んだみ

今日このへは私服を買い直すんだから。何で決意とともに店に入らう  
としたら手を握られた。

「何だ白井さんか、ビックリさせないでよ

「ちょっと付きましたからこままでの」

「え？」

僕がこの日のメンズショップに入ることになかった。

「急で申し訳ありません、ただお姉様が」

「あつかなめさん来ててくれたのね？」

「拉致とも言ひうね」

僕が言つた瞬間高速で睨む御坂さんとそれから逃れる白井さんが。  
何て早い首ふり。

「で、どうしたの？」

「黒子がかなめさんがいま私服なくて困つてゐつていつから、一緒に  
買い物に行こうと思つて…プールのお礼もしたいしね

「ホント? じゃあオススメの服屋でも教えてもらおつかな

「任せといて」

そして歩き出す僕ら三人、これは…りり両手に花じゃないか！僕の時代来た！これで彼女いない歴＝年齢という不名誉なKIRIN状態から解放される！

期待と夢を胸に年甲斐も無くワクワクと歩き進んだ。

「お姉様〜ん！これなんていかがでしょう？」

「ん〜こいつちもいいんじやない？」

「一回着てもらわないとわかりませんの、というわけでこれ着て来てもらいますの？」

わたされる数々の女物の服、何で？どうして誰も僕がここにいることの異常性に気づかないの？おかしいよね？男の僕がこんな所にいるなんて。まあ仕方ない、軽く流してすぐに解散しよ。

「これでいい？」

もはややけくそどうにでもなれ

『かつかわいい…』

僕を見て動きを止める一人、あれ？ビ〜かおかしかったかな？

「それじゃあ次はこれよー！」

まあ…早々に解散なんて無理な話だよねー。それから一時間近く着せ替え人形と化していた。何だか女の服に抵抗を抱か…っは！僕は今何を恐ろしいことを考えていたんだ…男の精神すら浸蝕するとは…恐ろしい。まあ一番恐ろしいのは、白井さんがテレポートで家に送つてくれた私服群何だけどね。確かゴスロリとか入つてたよあれ。まあ何とかパンクな感じの服があるから…どうにかなるのか？どうしようもない気がするなあ…正直滅入る。

これでまた仕送りのお金が尽きちゃつたから私服買えないや…どうしてこうなった。

帰りは白井さんと御坂さんの三人で食べ歩きツアーを、途中で初春さんと佐天さんも合流、姦し過ぎる。ハーレムだとは思うんだけどなにか違う。何て言つか…中の良い女の子グループ的な？それに僕も食い込まれてるみたいな感じ。泣けてきた。

泣けてきたけどこのクレープおいしい。ちよつと甘いけど。

「じゃあ今日はここで解散といきますか、あたし達も門限あるしね」

「そうですねー、あー楽しかったなあ

「そうですね、久し振りにゆっくり出来ましたわ

「じゃあ白井さん私たちばっかりなんで失礼しますね

「うんまたね初春さん佐天さん、じゃあ僕はあつちだから。今日は楽しかったよありがと、またね」

「エリカ、あなたのはめましたのか？またお会いしましょ？」

「ええ、それじゃあ」

何て言ひて急に淋しくなる、やつぱり騒がしかつたからなあ。

そんなことを思いながら寮に帰る。幸いすぐ電車なので帰つてすぐに片付かる時間があるだらう、多分泣きながら。

楽しかつたけど…今日は楽しかつたけど…どうしていいなつちやつたんだらう、人生つてよく出来てるよね？全く自分の思うとおりで行かない。

あ、そういうえばつづちーからお金受け取つてないや、メールで持つて来させよう。

『件名 重要案件

本文

早く金持つて！』

これでよしと、資金調達出来た――ついでに服買える、やつた。

「忘れてたと思つたにゃー、あの服はかみやんが買つてくれなかつたから青ピニ売つてたぜよ、定価の二倍へりこじやー」

とこつて受け取る、何故か寒気がした。

8月2日

何でこの人が目の前にいるのだろうか？そして何で一緒にお茶をしているのだろうか？

「何だア？」

「いや、べつに。ベクトル操作凄いですね」

「そうでもねヒよ

何だかとてつもない有名人に絡まれた小市民みたいだ。まあ小市民だけじゃ。それにしても一方通行さんとお茶とか常軌を逸してゐる。

それもこれも僕がスキルアウトに捕まつたからいけないのか？それとも出かけようとした時点でいけなかつたの？まあ何故か一方通行さんに助けられ何だか気に入られ何だかお茶してるんだけど…今思ひ返しても理解できないね。

「そういうばなンで俺の能力知つてんだア？」

「有名じゃないですか第一位一方通行、能力はベクトル操作、こんアクセラレータなのバンクで調べれば一発ですよ？」

「ふーん、まッどうでもいいけどよオ」

「聞いといてそれはないんじゃない？まあいいけどよ。

「オマエ…時間操作なんだろうオ？」

何を言われたのか、何故それを知っているのか。わけがわからなかつた、確かに霧ヶ丘の一部の人達には知られているみたいだつたけど…だからといって一方通行さんが知っているのはおかしい。霧ヶ丘だつて情報をわざわざリークする必要がないし…もしかしたら『竜王の殺息』でツリーダイアグラムが貫かれた時に漏れた?情報が足りな過ぎる、早いところ情報の出所を確認しないと、僕自信が危ないかもしねー…

「別に警戒なンざしなくてもとつて食いやしねエよ、ただ研究者（糞）共が血眼になつて拉致しに来るかもシンねエけどなア」

そんな不吉なことを言いながら笑わないでください。やめません？人の不幸は蜜の味みたいな？

「うええ？その情報はどこから出たかわかります？」

「あア？知らねエな、研究者（糞）共がざわついてンの聞いただけだしなア。ただ、もう田を付けられてるみてエだけどなア。」

一方通行さんの向くほうをチラと見れば成る程、屈強なSPみたいな人が監視のような事をしていた。ふむう？大ピンチなんぢゃないかな？街を歩けば監視カメラ、寮は住所バレしてるだろうし…僕に安息の地はないのだろうか？いやいや、あれは僕じゃなくて一方通行さんの監視だつて、きっとそつだつて。

「モテモテじやねエか、よかつたなア？」

どうせなら可愛い子達に囲まれたかつたです、御坂妹に囲まれたら卒倒するかもしれないけどね！同じ顔でステレオ再生とかシャレにならないって。

「じつじよつ… むづ寮にも帰れないよ…」

「はア… これやるよ、後はテメエの好きにしな

そして渡された書類、それには研究所の名称が羅列されたもの。研究所の位置。内部構造。それと…時間操作量産計画。タイムマニピュレータ時間操作解明計画。タイムトリッパー時間移動計画などなど、正直どうしようもないくらい羅列されていた。まあ気持ちはわからなくもない、時間移動という理論としては不可能な事に一番近い位置に僕はいるのだから、間違いなく人類の夢の一つにして叶ってしまえば一番の禁忌。

「僕にどうじろつて言ひの？」

「気にくわなけりやあぶち壊すもよし、へラへラと媚びへつりつもテメエの勝手だ、俺の管轄外ツて奴だなア」

じゃあ俺はそろそろ帰るぜ?といつて席を立つ一方通行さん、うんどうなのは間違いない、笑ってるもん。置いていかれて店出た直後に捕まるとかシャレにならないから直ぐに追いかける。ちょうど会計していた。

「はい、僕の分」

「あア、じゃあなア?」

受け取ると直ぐに歩いてしまう、ちょっと待つてって、今置いていかれたらやばいんだって。必死においかける。

「おい、あれって一方通行じゃねえか?」

「隣は彼女か？置いていかれてるつてのに健気だなあ」

「レベル5だからって可愛い彼女自慢しやがって…」

周りがなにか言っているけど氣にしてはいられなかつた。ただ・何かを失つた気がした。

まあそんなことを氣にしているとベクトル操作している一方通行さんに追いつけないから全力で走る。向こうもこちらがギリギリ追いつけるスピードに抑えてくれているみたいだ。それなら一緒に歩いてくれればいいものを…何て考えているうちに路地裏のまで来ていたようだ、嫌がらせか！これなら人通りが多い道を歩いたほうが安全だつたかもしれない。そんなことを思いながらもう後には引けない、まだまだ時間操作は温存しておく。まあ老けるのが嫌なだけなんだけど…

「ハハツ犬つころみてエだなア オイ！散歩が好きなンですかア？」

もはや無視しかない、相手にしていられないけど離れたら僕はバッドエンド直行だ。そんなことを考え悔しさに歯を食いしばれば不意に右の路地から人が出てきて僕は避けられなかつた。

「うわつ」

「痛つてえー？んだゴラア！」

向こうは大柄な男だつたらしく僕は弾かれて転んだ。運が悪いことに足を捻つてしまつたようだ。

「痛つ……」「めんなさい大丈夫ですか？」

「テメエか！痛てえじゃねえか！」

目の前の男はスキルアウトだろう、足を捻ったこの状態じゃあ逃げられないし、周りには…SPがもう囲みを作っているようだ。

「な、何だテメエら！」

「君！早く逃げて！痛つ！」

「関係ないものは消えてもらおう。」

SPがポケットに手を入れるとスキルアウトは後ろを向き逃げようと走り出した、だけどそれは背後から銃で頭を撃たれて終わつた。僕は頭が吹き飛ぶのを見てしまい吐き気を堪えるのに精一杯だった。

「ひづり、目標の確保に成功した帰還する。」

堪えている間にさるぐつわと田隠しそれと腕と足を縛られ大きな鞆のような物に詰め込まれそこで僕の意識は途絶えた。

「確保は出来たのかよ？アア？」

「作戦は成功だ」

8月2日（後書き）

一通せん口調難しそう。漢字に横文字当てるの難しそう。

結論  
馴文

やじへ一話、と書つよつて、やあ終わらなかつた

目が覚める、辺りを見渡す。どうやらここは研究施設内みたいだ。

いかにもな作りをしているし僕の座らされている椅子も機械に繋がっていた。もちろん腕は椅子に拘束されていた。

だけどまあ、身体をいじられた様子が見えないと頭に付けられた機械から推測するに、僕が目を覚まして能力を使つたときの脳波を調べたかつたんだろう。

いきなり実験材料を使い物にならなくしても意味ないしね。とまあ現状の確認が済んだのはいいけど…これからどうしようか。拘束具は頑丈だし、現在地もわからないし…取りあえずはこのまま待機かな。と思っていたがどうにか抜け出すために拘束具を調べることにしよう。

形状は腕輪のようなかたち、材質は革、腕力さえあれば切れそうかな?まあ無い物ねだりをしてもしかたがない。革の部分をよく観察する。意外と摩耗しているようだ、所々弱そうな部分が見える。しかも根元の部分、両腕とも同じような部分が摩耗していた。ということは僕以前にもこういう目に遭つていた人がいるということ。その人達の必死の抵抗でここまで摩耗したということだろう。可哀相だけど今だけはその人達に感謝しよう。そしてその摩耗した部分をさらに擦り減らす。これでいつでも切れる位に擦り減らす。あとはタイミングかな…

また部屋を見渡す、電気はついている。部屋の隅には監視カメラ。そして部屋を見渡すような配置のガラス張りの部屋が少し上に見え

た。そこに人は3人。一人が僕を見下ろし、もう一人が機械を見てもう一人は電話をしているようだつた。

この配置には見覚えがある、一方通行さんのリークしてくれた研究施設の地図の一つ。といつても似たような配置の地図は全部で三つあつたので候補は三つだ。

確かに部屋を出てすぐ前にトイレがあれば候補の中から一番広い研究施設。

右が行けずに左だけならば小さい。

目の前に右左真っすぐどこにも行けるならば中くらいだつたはず。そして中くらいならばアンチスキルの詰め所が近い。小さければ寮は一番近いが詰め所までは意外とある。大きければ詰め所も寮も遠く一番厳しい配置の研究施設だつたはずだ。

ベストは中くらいの研究施設、  
ベターで小さい  
バッドで大きい

こればっかりはどうにもならない。僕自身の運に左右されるところだ。まあこんなめに合つてること自体運が悪いという事なんだと思うけど…

特にやれることもなさそうだし田を閉じる。そこまで神経が太いほうじゃないので眠れはしないが落ち着くことは出来る。そんなことをしているうちに目を開けガラスの向こうを見ると機械に向き合って頭をかいている人しかいなかつた。チャンスだろう、罠かもしれないけれどもしかしたらこれ以上のチャンスは無いかも知れない。拘束具を切り能力を発動し速攻で部屋を出る。

部屋を出ると能力を切つた。田の前には三つの通路が現れた、中くらいの研究施設らしい。運が回ってきた。脳内の地図を呼び起こし出口と潰しておるべき研究施設のスペコンの位置を思い出していた。

「出口と正反対か…能力をうまく使うしかないか」

ビーッビーッビーッビーッビーッ

咳くとアラート音が鳴り響く、もうばれたか。

近場に研究施設の監視カメラの端末があつたことを思い出しそのまま屋に入り込んだ。都合がいいことに誰もおらず監視カメラもなかつた。

「とりあえずこれを壊しておけば…」

手段としてはパイプ椅子をたたき付けるものだつた。手が痺れただね！

直ぐに移動しよう、壊したことでここにも人が来るだろうし。スペコンの部屋に向かい走る、途中すれ違うことになつた研究員は角で最大出力の能力発動で気づかれないように走り抜いた。

そしてたどり着いたスペコンの部屋。誰もいなかつた。不審に思つたが居ないものは仕方ない、運がよかつたと思いつの操作をする。

「なに…これ…」

そこには時間操作量産計画とその運用方法だった。  
タイムリーチルドレン

その運用方法とは量産された僕を複数使い脳波をリンクさせ演算効率の上昇。そしてその演算は時間移動の演算だった。そういうこの研究施設は僕を量産しタイムマシンとして活用しようとしていたのだろう。

「ま…さか

それだけじゃあなかった。『一方通行絶対能力移行計画』レベルシフト

これにも僕がからんでいたようだ。概要を読むと本来ならば御坂妹だけでもやる予定だったらしいが。僕とのタッグを組ませた状態で殺させることによる効率化。それを読んだ瞬間カットなり何度も何度もパイプ椅子をたたきつけついに破壊した。

「はあ…はあ」

「やつと氣付いたンですかア？案外弱いおつむしてンなア」

肩で息する僕に後ろから聞こえる声、一方通行のものだった。

「あの時…僕に接触して来たのは僕を捕まるためだつたんだね？」

「ハツ、当たり前じやねえかナンでオマエなんかを助けなきゃいけないんですけどア？」

「信じたのに…」

「チツ、さつさといけよ。そもそもねえと…殺ツちまつざオオオオ…！」

瞬間、ベクトル操作で僕に向かつて来る。僕に撃退する手段はない。逃げるしかないのだ。

能力を使い最大の力で逃げる。もちろん今回は一方通行にも遅くするようにしているためみるみるうちに距離をとることが出来た。

「チツ、これでアイツも危機感を抱くんだろつなア？世話かけやがツて」

いつの間にか僕は研究施設から脱出していた。それにしてもおかしい。ベクトル操作なら僕の進行方向のベクトルを変えてしまえば逃げなくすることは容易だつたはず…もしかして逃がしてくれた？

だつて逃げてるとき不自然なくらい人に会わなかつたし…アラートが鳴り響いていたからすれ違つてもおかしくないはずなのに…それにスパコンの部屋に誰もいなかつたのもおかしな話だ。

「…ありがと」

目の前にはいないけれど、一方通行さんにお礼をいう。これからはそれなりに気をつけた生活をしよう。

それよりも大変なのはこれからだろう。おもに僕の服装のせいでも、何で布一枚なんだろうか？首から足首まで隠れる大きさといつてもその下はなにも身につけていないのだ。今が早朝でよかつた、若干人はいるけど今ならそこまで人目につかず寮に帰ることが出来るだらう。

朝日が昇るなか、施設からの開放感と服装の尋常じやない開放感で顔を赤くしながら帰ろうとしたのは言うまでもない。

「不幸だあああ…つてアンチスキルのところに行かないと…なにこの羞恥プレイ不幸だああ」

近くの詰め所に駆け込むと知的なお姉さんが対応してくれた。はあはあ言つてたけど大丈夫なの？風邪？無理しちゃあいけないよ？

「わかりました、それでは直ちに調査に入りましょ。スパコンを壊してしまったとはいえ他にも研究資料は残っているでしょう。貴女は私が家まで送つてあげるからだいじょうぶよ？」

とにかくこの羞恥プレイからの解放が最優先。というわけで車で寮まで送つてもらつた。助手席に座つていたけどすごい視線を感じた。やっぱり車の外からでもわかつちゃうのかな？は、恥ずかしい！と身体見えないよつこもぐつこませたが。

「危ないからちゃんと座りましょうか？」

ひどい…結局我慢して大人しく座つていた。車から降りれば礼をいい走つて血室に飛び込んだのは言つまでもないよね？

8月3日（後書き）

とこう訳でオリジナルな話、危機感を抱いてもらひお話しでした。

そして気付いたら一通さん超いい人w

もはや誰だかわかりませんね

拉致事件から一日、僕はやつと外に出ようとした。昨日一日は「ごめんなさい」と飯も何も取らず鍵をしめて引きこもっていた。さすがにお腹すいたから、飯でも買いに行こうかと着替えているところ。昨日一日あの布のままだったのは内緒だ。

で、着替えているときに気付いたことがあるんだけど……携帯とか無くなってる、拉致られたときの服に入りっぱなしじゃよ……

「不幸だあ……」

歎いていても始まらないので着替えて外に出る、取りあえず当麻辺りにお金を借りよう、じゃないと何も出来ない。

「当麻ー? いるー?」

「はいはい、今出ますよーってかなめか、昨日はどうしたんだ? ずっと家に籠り切りだつたみたいじゃねえか」

「ちよっとね……。でも? 申し訳ないんだけど……2千円位貸してくれない?」

「え? 珍しいな、かなめが金欠なんて」

「やむを得ない事情があつたんだよ……」

つい遠い目をしてしまつるのは仕方ないことだと思つ、いまだに実感が沸かないけど僕の身柄が危ないということはわかつた。何で僕

なんだよ、もつと他にいるんじゃないの？

「やうひか…ほらこれでいいか？」

「やつた！ありがと当麻！」

手を握りグラッチョーと頭の中で言つておく。何故か赤い顔をしていたが気にしないでおこう。色々危ないからね、おもに僕の心が。とまあ資金の調達もすんだことだし昨日のアンチスキルの詰め所に向かう、もしかしたら僕の服とか見つかってるかもしれないからね。

「残念ながら服は見付かっていない」

「え？じゃあ財布とか携帯もですか？」

「いや、財布と携帯は君の事を調べていたと思われる部屋から見付かっているが服だけは見付かっていないんだ。」

「どうしたこと？普通貴重品から持つて行くものじゃないの？まあそんなどに入つてないんだけど…」

「取りあえず財布と携帯が見付かっただけよしますよ、ありがとうづ」やつました。お仕事頑張ってくださいね。」

対応してくれた男の人感謝を伝え、事務所の中の人にも声をかけると外に出た。何か男臭い今日の事務所はお祭り騒ぎになっていたが何か事件の手がかりでも見付かったのかな？

取りあえず財布と携帯も帰ってきたことだし、中身も無事だつたことだしよしとしよう。

「当麻ー?」「うんそうそう、でも、今日これから暇?どうか行かない?  
?あー補修だつて?わかつたごめんねー」

そつか今日補修なのか…どうしようかな。

「あれ?かなちゃん?かなちゃんだよね?」

後ろから声をかけられ一瞬びくっとしたけど聞き覚えたある声で呟つとする。

「うん?あー!鈴木さん、久しぶりだね」

霧ヶ丘時代の友人だった・

「うん、久しぶり。かなちゃんどうしたの?一人みたいだけど」

「ちょっとした用事でね?まあ終わっちゃって暇にならんんだけど

…

「あ、そうなの?私も今日暇なんだ、買い物に行こうと思つたんだけど一緒に行かない?」

「いいの?じゃあ行くよ何買つの?..」

うん、思いがけない再会だつたけど、今日は時間潰しに困まなくてすみそうだ。

「うん、下着」

前言撤回色々悩みそつだ。男として。

そんな僕の思惑とは別に既にランジェリーショップが顔を見せていいもつと遠くにあればよかつたんだ！そんな心の叫びも虚しく店に入ってしまった訳だけど。

「そついえば、かなちゃんてあまり派手なのは好きじゃないんだっけ？」

「うん、だつて僕に勝負時なんてないし。」

あつてたまるか、あつたとしてもそれは相手が女の子であつて僕の服装は男のもの何だからこんなものを履いているはずがないんだ。

「意外、かなちゃんなら共学に行つたと同時に男漁り放題だとおもつてた。」

「僕はそんなにモテないよ……」

その方向の愛はいりません、もつとガチムチの人むけてあげてください。

「かなちゃんこんなにかわいいのになー」

「うわー！」

「何でこの魅力に気づかないかなー？」

抱き着き、頭撫で、ほお擦り、何だか玩具だ。いやこんなに冷静でいる場合じやないんだけど。おそらく一周して冷静になつてるんだ

と感ひ。

「と、とつあえずト着選んじやお？」

「んー、名残惜しいけど眞面目にやめつか」

眞面目に……ねえ？ 下着なんてこれいいなーと思つたらそれでいいんじゃないかな？ 少なくとも僕はそうだし。まあ男と女じゃあ勝手が違つて、いつのまはわかるけど。

「これなんかビーナーかなちゃんの魅力が一層引き出される」と間違いないって！」

「……僕は変態じゃないんだよ？」

僕を変な方向に連れていかないで……まあこいつもつま無いけど。

「かなちゃんの魅力、なんでみんな気づかないかな？」

「やつこののは鈴木さんの目立たない大事な人に言つてあげてください」

「かなちゃんだから……だよ？…………なーんてね私にそいつの気はないし？」

「やつの疑問形は危ないって。でも？ 決まったの？」

「うそ、今買つてくるね」

たたた、とレジに向かう後ろ姿を見る。鈴木さんって悪ふざけが過ぎるんだよね、おかげで僕は振り回されっぱなしだよ…

「お待たせ、じゃあこれ」  
何やら二つ紙袋を持つていて、その中の一つを僕に渡してきた。

「ん? なに?」

「かなちゃんのも買つてきたよ、ダメだよーってまどき勝負下着の一枚や一枚持つとかないと」

え? 僕はそんなものより鈴木さんとの関係をより親密にだね…え?  
思考は明後日の方向に旅立つたようだ、身体は認めたくは無いが紙袋の中へ、一応中見て感想の一つか二つを言わないとダメだらつ。

「い、これ?」

「うそ、かなちゃんが履けばどんな男も一発だつて」

一発で逮捕ですね? わかります。意味がわからない、男の僕がヒモパンとか意味わかんない、永久封印間違い無し。捨てないのかって? 買つてもらつたのにそんなことは出来ません! 勿体ないお化けが出来るよ。

「うそ、うんありがと! 一生で履く機会があつたら履かしてもらいつね?」

「意外とすぐかもよー? とそろそろいい時間だね帰るつか?」

「うん、そうだね。霧ヶ丘の寮はあつちか…僕は向こうだから」「

でお別れだね？」

「うん、じゃあまたね。今度メールするよ」

「うん、僕もあるよ」 あ、帰つて今日あつたことを忘れるために  
も部屋片付けよ。僕、帰つたらこの下着永久封印するんだ：

ああ、当麻に一千円返さなこと。

8月7日

8月6日白井黒子

最近お姉様の様子がおかしい、急に足をバタバタし始めたり。前はこんな挙動不審な事はしていませんでしたのに…まさか！あの殿方と何かあつたんですの！？私はそんなことを考えながら隣のベッドで悶えているお姉様に田を向ける。ああ…相変わらず美しいですわ。

「お姉様？」

「ん？ 何よ」

「いえ、何でもござりませぬのよ」

「変な黒子。さて、明日にそなえて私はもう寝るわよ？」

「わかりました、おやすみなさいませお姉様」

パチッと電気が消される。それにしても明日…ですの？私とは出かける予定もありませんのに…まさかあの殿方ですの…？これは一大事ですわ、一刻も早く対策を練らなければ…

私はとあるところにメールを送りましたの。

『神城かなめ

無題

一大事ですの…明日の朝迎えにこきますの』

無骨なメールですが、一大事というのが伝わればよしとしますわ。

8月7日神城かなめ

朝起きると携帯にメールが来ていることに気がついた、差出人は白井さんらしい。迎えに来るつて…僕何も連絡入れてないんだけどねえ。まあそんなことは今に始まつたことじやないし（何だか泣けてきた）とりあえず準備をしてしまおう。

「はて？準備つて何すればいいんだろう？」

僕は何も聞いていないしメールにも何が必要とかは書いていなかつた。とりあえず着替えておけばいいかな。

クローゼットから着替えを取り出す。もちろん制服なんて事は無く、私服を…女物なんだけどね…。まあその中でも割りと中性的なものを作「コーディネート、僕の男らしさがカバーしてどうやってみても男にしか見えない」という寸法。しかし、今一度見返すと僕のクローゼットって男としてどうなの？こんなフリフリのゴスゴスしい服やワンピース、スカート、女物の制服2着、しまいにはパン…ちょっとまって？何でこれがここにあるんだ？もっと奥に隠さないと大変なことになる！具体的に僕の人間性が終わってしまう。

すぐに奥深くに隠さないと、クローゼットの足元にある収納スペースにしまう。ふう、大惨事が起きたことひだつた。まあクローゼット見られるだけで大惨事なんだけどね。

「あら、色々な服を持っていますのね」

なん…だと？まあ最重要機密を見られなかつただけ「やつせのはかなめさんの勝負下着ですの？」がつづり見られてたよ。

「白井さんは何も見なかつた」

「まあ勝負下着なんて気に入つた殿方にしか見せないもの…はつ！かなめさん、気になる殿方がいるんですわね…？」

「いないよー」

「大丈夫ですの、わかっておつますわ。で、こじだけの話誰ですの？まさか上条という殿方ですか？」

「当麻はそんなんじゃないって」

全く、あれなの？僕をおちよぐつて遊んでるの？

（さつきの言い方と、態度…全く、あの殿方はお姉様だけに飽きたらずかなめさんにまで手をだすなんて）

お互に何か考え方をしていたようだ、とりあえず朝ごはんでも作ろうか。

「白井さんは朝ごはんは食べてきたの？」

チラリと時計を見ながら、ただ今午前8時、学校はないしい時間だろう。

「いえ、食堂が空いていない時間だったのでもまだ食べていませんの」

「やつ? ジヤあ準備するから食べなよ」

「いじんですか?」

「うそ、まあおこしくないかもしれないけど。それでいいなり

「じゅあお葉にせてもうこまわ

「何かリクエストはある?」

「それならクロワッサンを」

「…やれない」とはないけど時間かかっちゃうよ?」

「[冗談ですの、でも作れるとは思つてなかつたですわよ?」

[冗談つて…それで作りはじめちゃつたらどうするんだ?…まあいいか洋風にしようかな? ああ、確か常盤台つて洋が多いって聞いたことあるなあ、和風にしておうとか。幸い色々あるし。

「じやあ適当に準備するから待つてよ」

「手伝いますわよ?」

「お姉さんだし座つててこよ」

白井さんを待たせて料理を始める。今日は豪勢にこいつ。多少は見栄を張るのは人間として仕方ないと思つんだ。

そんなことを考えながら冷蔵庫を開ける、食材を取り出していく

らえから。まあ特にやることはないんだけどね。なんて考えながらも鮭の切り身を2枚焼きはじめる。

鮭を焼いている間に味噌汁をつくる、水を鍋に入れお湯を沸かす。そしたら卵を溶く、作るのは卵焼き。

「卵焼きは塩と砂糖ビックリがいい？」

「どうでもかまいませんわよ……まあ砂糖のほうが……」

なんて聞こえた、まあ塩か砂糖かで離婚する夫婦もいるみたいだし結構重要なのかな？溶き卵に砂糖を混ぜ卵焼きを作りはじめる。焼きはじめる前に鮭の様子を見ることは忘れちゃいけない、焦げちゃうからね。一気に卵焼きを作つたら切つて皿にのせ完成。いい出来だ。

次に昨日作ったほうれん草の胡麻和えを小皿に移し見栄えをよくする。見栄えは大事。そして鮭の様子を見ながら味噌汁の具ざいを切る、今日はネギと豆腐。まあ出汁が出ないから粒状の鰹出汁を一杯入れる、後は具ざいを入れて味噌を溶かす。蓋をしめて残りの準備時間を蒸らせば完成。そしたら焼き上がった鮭の切り身を皿に移す。味噌汁を添え、あらかじめ炊いてあつたご飯を盛れば完成だ。

一汁三採、理想的な日本のバランスだって聞いたことがあるような無いよ。まあ食事は出来たしだこうか。

「料理上手ですね」

「そんなことはないよ、一人暮らしで自炊していればこれくらいなら誰にでも出来るよ?」と、いただきます、「

「いただきますわ」

チラリと様子を伺つ、多少自信があるとしてもそれはやつぱり一般人としての範囲内、プロじや無いんだからそれは心配になるつて。最初に手をつけたのは味噌汁。いいなあ、僕猫舌だから最初に味噌汁飲めないんだよね。いつも一番最後に飲むよ。

次に卵焼きに手をつけた。これは結構自信作。

「どうかな…？」

「…おいしいですわ、しつかりしているのに中が半熟でフワフワ。味付けも私好みになつていますのね」

中々の好感触、まあこの焼きかたは冷めると美味しく無くなっちゃうから一度に食べ切れるときにしか出来ないんだけどね。

「ま、安心かな？」

「なにがですか？」

「白井さんの味覚に叶つたつて事は僕の料理も捨てたもんじゃないなつて」

「あら～」の腕前でしたらすぐこでも嫁に行けますわよ?」

嫁ねー…よめ！？婿じゃなくてー…あまり気にしないようこじょつ、うん。

そんなこんなで食べ終わり片付けも終わった、時間でいうと一〇時前くらい。

さて、なににきたんだ?」の人は、僕の小説を読み始めちゃったぞ?

まあいいか、僕も宿題とか…はいいや、人前でやるみつなものじゅ無いしね。本でも読んでようか。

そんな事をしていたら一時前、やうやくお昼時だ。

「やうやくお昼だけど何か食べに行かない?」

「むうそんな時間ですの?これが面白くて時間を忘れていましたわ

「やうやくお昼してあげるよ?」

「あら?いいんですの?」

「もう読み終わってるしな、適当なときに戻してくれればいいこと

「ありがとうございます、買おつか惱んでいたんですよ?」

それはそれは、まあ借りれるならそれが一番だよね。学生つてお金持っていないしね。あ、常盤台はお嬢様学校だから違つか。

「じゃあお昼はどうしようか?何か頼んでもいいし外に行くのもいいよ?何なら御坂さんとか呼んでもいいし

「お姉様!? そうですわ、お姉様ですの!」

「あ、うんわかつたよ」

電話をかけてみる、3ホールくらいで出た。

「もしもし? 御坂さん? 今日暇かな? え? うんああ、白井さんならうちに遊びにきてるよ? 御坂さん達も来る? まあうちには何も無いけどね。ん? わかつたよ待ってるね」

「どうしたんですの?」

「御坂さんと初春さんと佐天さんが家に来るってさ、何かお昼ご飯買つてくれるって、30分かかんない位には着くってさ」

「お姉様達が?」

うーんと考へ込んでしまった、何だろ? はづられたとか思つてゐるのかな? まあ僕なら泣くね、間違いないね。

さて、人が結構来るみたいだし準備でもしておこうかな。

30分位経つてチャイムが鳴る、来たかなーと玄関を開けるとそこには当麻がいた。

「あれ? どうしたの?」

「俺の部屋が…ふこいつだあ…

何かあつたんだろうか? ちょっと様子を見に行く。

「あ、かなめ！これを見るんだよ」

それは何ともまあ『愁傷様でしたと言える。インデックスの前には積み重なつて出来た皿等の山、開け放たれた冷蔵庫は空になつており役目を果たそうにも果たせない状態になつていた。

「財布は？」

「一応まだ入つてるけど…もたねえよ…」

「わかつた、今日は食べに来なよ」

「いいのかーそれを言つてくれなかつたら上条さんの//イラが完成しちまつといふだつたぜ」

「//イラかー…みてみたいなー」

「鬼イー！？」

「あはは、ウソウソじやあ後で家に来なよ、『飯時になつたら電話で呼ぶからさ』

「おう、わりいないいつも」

「いいよ、気にしないで。じゃあね？」

そして隣に戻ると向やら賑やかになつてゐる、御坂さん達が来たのかな？玄関を開けて中に入る。思つたとおり御坂さん達が着いていたようだ。

「//さんにちまつてー何してゐのー？」

何故か全員で僕のクローゼットを漁っていた。

「んー？かなめさんの服を拝見してね？」んにちはお久しぶりです

佐天さんが答える、恐らく一番喜々としてやつていたに違いない。

「かなめさんって結構大胆何ですね」

「あれはあたしもびっくりしたわ…」

！？あれってなんだ！？僕は何を見られてしまったんだ？

「大丈夫ですわよ、勝負下着の一枚や一枚、どうないことありますわ」

それは僕がいつべき合詞何だらうけど僕はそれを口にしたくない。

「で？僕の心をえぐつたといふで何するの？」

「あ、この服カワイイー」

と、佐天さん。聞いてよ…何だらう、この無力感は。

「ほんと。あ、いつもカワイイですよ？」

「それは全部御坂さんと白井さんが選んでくれたやつだよ

「でも全然着てないんじやあつませんの？」

「僕にそんなフリフリは着れないよ…」

「似合ひやうなのになー」

そんなことあつてたまるか、じつせキモッこつに決まつてゐ。

「それなら今来てみてくださいよー?..」

「僕が?」

「それ以外に誰がいるんですか?」

君等が着ればいいじゃない、僕を巻き込むのはやめてもらいたい。  
僕はノ〇〇と言える日本人。

「いや、やめておくれよ。恥ずかしいし」

そんな感じで諦めてくれると思ったいたら後ろから白井さんが忍び寄ってきていた。羽交い締めにされ耳元で囁かれた、なにこれ? 恥ずかし過ぎるんだけど。顔真っ赤だよ絶対。

「このまま全裸にさせられて私達に着替えさせられるのと自分で着替えるの、どちらがよろしいんですの?..」

「へー! わかった、わかったからー自分で着るからー。」

なにこのイジメ、僕のまつが年上だよね? つらー。

仕方なく洗面所に渡された服を持つて入る、向こうも着替えを見て

ない状態で見たかったからか何も言つてこなかつた。

「『コスロリなんて絶対に着ない』と思っていたのに… タグつけっぱなしですよ…」

チチチチとタグを取つていぐ。そして着替え洗面所からである。

「これでいいんでしょ? これで」

もうやけくそ、どうにでもなればいい。あれ?なんかデジャヴ。

「へえ、やっぱ可愛いわねー」

御坂さん、顔赤くしてチラチラ見られるのって相当恥ずかしいんだけど…

そんなかしましい時間は過ぎるのも早い。もつ口が暮れかけている。よし、話題転換。夕御飯の準備しちゃおう。

「そろそろいい時間、だけど夕御飯食べていぐ? 作るけど

あれ? そういういえば僕お昼食べてないな… ってあれ? 明らかにファーストフードの空の包装紙が見えるなあ… 白井さんは昼は食べたって事だね? ならよかつたよかつた。お腹すいた。

「いいんですね? 私朝もいただいて夜もなんて」

「いいよいよ、たまには先輩らしいことじぶん見せないとね?」

今日なんていじられてただだからね。

「私たちもいいんですか？」

佐天さんと初春さんがそっと手を挙げて上田遣いで聞いてきた。あ  
あもう、任せといて！

「アタシも？」

「もう任せといてよ」

というわけで決定、料理担当は僕、理由は朝と同じだけど他にもキ  
ッチンが狭くて入れないというのもある。

作るものはビーフシチューとパン。パンはあらかじめ醗酵させてあ  
るものがあるのでそれをオーブンで焼くのみ。

ビーフシチューも具材を焼いて煮るのみ、後はルーをいれれば出来  
るという簡単なもの。

「準備完了ってね、後はお肉が柔らかくなるまで弱火でコトコト煮  
るだけかな。」

「相変わらず見事な手際ですわね」

「すいせいです……」

「……」

上から白井さん、初春さん、御坂さん。

「け」

「け？」

「結婚していくださいー！」

「うえーー？」

佐天さんの問題発言、それでも僕は平和です。きっと。

ちょっと時間潰してちょっと小さいうテーブルに人数分並べる。

「先に食べてて」

一言言い残し焼いたパンとビーフシチューを持つて当麻の部屋に。チャイムを鳴らすと玄関が開く、中からは当麻が出て来た、チラリと見えたインデックスは餓死寸前なのが机に俯せに倒れていた。

「当麻、これ約束の。家今ちょっと人結構きてるから持つて來たよ

「おおおーサンキューーー！」

「まあ簡単なものだけどね」

「有り難く食わせていただきます」

「うん、じゃあね

玄関を閉める、インデックス！飯が来たぞ！なんて声が聞こえる。持つて行くの遅かったかな？まあそこは僕の都合に任せもらひた

い。じゃないとどれだけ偉そななんだ?ってなるから。

渡し終えて僕の部屋に戻ろうと顔を向ければドアが慌てて閉まる音が聞こえた、待つてくれたのかな。わるいことしちゃったな。

部屋に戻ると何故かテンションの下がった御坂さんがいた。ああ、そういうえば御坂さんは当麻のハーレムの一員だつて。

「お隣りさん金欠なんだって、困ったときはお互い様だからね、ちよつと分けてきたんだよ、じゃあいただきます」

「フォローは忘れずに。ん?べつに僕は男なんだからフォローの必要は無いはず。無いんだよね?」

悶々と頭の中はじていたけど食事を終える。

「御坂さんと白井さんは門限大丈夫?そろそろじゃない?」

「えつ!ほんとだ、じゃあアタシ達は帰るわ」

「初春、私たちもかえろつか?」

「やつですね、かなめさん」駆走をまどした

初春さんの「駆走をまから次々に」駆走をまが、まあ満足してもらえたならよかつたよ。

全員帰ることなので見送りに。寮の一階まで送つた。

「じゃあね、また今度」

そして別れたのはいいけどよく考えたら当麻のところに「スロリ」としてたことに気づいて泣きたくなつた。

「ん？あれかなめだこじゃー」

「ほんまや、つか「スロリカワイイーなー」

「ホントだぜい、本人何か悶々してるけどこじゃー」

「ああーそれもカワイイやん、持つてかえつてええか？」

「かなめが」いつちに気づいたぜよ、青ピお前死ねって

「酷いー。」

8月7日（後書き）

最近更新速度が安定しない精進ですね

そんなこんなで全く気づいてなかつたのですがユニーク10000突破していました、お気に入りも100突破。

そろそろアクセスも100000突破のようで、何とも有りがたいことですね、これを励みに頑張らせていただきます。

8月13日（前書き）

お待たせしました、待つてたのか？

お察しのいい皆さんならタイトルというか日付で把握した人もいる  
でしょう。

取りあえずそのことで被害に遭った人に一言

姫神いいいい！…ごべえええん！

後書きに連絡があるので一読していただければ幸いです

それではどうぞ

8月13日

「あれ? かなめ? セイセイまで本屋にいたんじゃないのか?」

「え? 今日僕はまだ家からでないよ?」

ちゅうじ朝、寮の部屋から「アリ」を捨てて出た時に当麻とそんな話をします。

「だつてさつき土御門が本屋に居たって言つてたぜ?」

「見間違いじゃない?」

まさか、タイムリーチルドレン?あのパソコンから情報をサルベージしたのか? それとも、他にバックアップを取つていた? まあいい、ちょっと調べてみよう。

当麻と軽く話して部屋に戻る、これからどうしようか? そんなことを考えていた。いくら考へてもまとまらなかつたので取りあえず外に出た。あの施設に向かうことにする。

施設は閉鎖されていたので忍び込んだ。電気は消えていて真っ暗だ。しかし耳を澄ましていると、パソコンのファンの音が響いている、スペコンの合つた部屋辺りから聞こえていた。

音の原因と思われるところに行くと、スペコンの近くに合つたコンピュータを操作している人物がいた。僕だ。

何を言つてゐるのかわからないけど顔は僕のものだ、だから僕と表現した。

今更ながら冷静に考えると、DNAなんて簡単に手に入るものだ。

例えば、学校の僕の机周辺では僕の髪の毛が。血液検査と称して血の採取だつて。取ろうと思えばいくらでも可能なのだ。ただ、自発的にDNAマップを提供してもらえないと犯罪になつてしまふ。だから僕は今までDNAマップは提供しなかつたけど、無断使用したのだろう。人類の夢でありながら叶えてはいけない夢物語。時間移動。

人間の欲望によつて犯罪を犯しながらも、DNAの無断使用だけの犯罪だ。懲役を受けても生きて刑務所から出られる。それにもし時間移動が成功すれば、それだけのリスクで多大なリターンが見込める。そう考えたら、ツリーダイアグラムで僕の能力がばれた以上そんな人間が出てきてもおかしくなかつた。その結果が目の前のタイムリーチルドレンなんだろう。

「あんたが俺達の兄貴か？何だ何だ、女らしい顔しやがつて。そんな顔してつから研究員の阿保が性別間違えんだよ。どうしてくれんだ、ああ？」

確かに胸が少し出でていた。

「はは、DNAに性別を間違われるつてのもすげよね？」

「笑い事じやねー一つのー」

しうがないじゃないか、もう手遅れだよ。もうね？最近女に生まれたほうが幸福だったんじゃないかなって思つてきただいだよ。

「そりいえば君は何号なの？」

「あ？俺か？まだタイムリーチルドレンは俺だけだ、成功例として生かせてもらつてる」

「クローンが失敗？」

「クローン自体は成功してる、ただ能力を伴わかつたから処分されてる。俺も能力がなかつたら消されるとおもうとぞつとするぜ」  
成る程ね、じゃあまだ時間移動なんて出来ないし。絶対能力移行計画もタイムリー・チルドレンは関わつてないのか。

「君はなにをしてるの？」

「あ？みりやわかんってる？データのバックアップを取らされてんだよ」

そんなん知るか。そつは思つたけど、口にはしなかった。

「君はビビりやつて暮りじてる？」

「あ？やつをからうるせえな。研究所に決まつてんだり？」

ほんとに僕か？」「ひ、口、悪過ぎるわ。

「ふん、別にお前の住んでる部屋で保護してくれても良いんだぜ？」

「なんだ？シンデレラ？君シンデレラ？ほんと僕？」

「あ？お前頭大丈夫か？」

「酷い…口悪すや、心に刺さる。」

「わかった、家に来なよ。一応、僕の妹つてことにしておべからせ」

「一応つて何だよ…俺じや認めてくれねえのかよ…」

最後の言葉は僕には聞こえていなかつた。

寮に戻ると研究所の位置を聞いて、メモを取つた。

「しかしせめー部屋だな？おい」

「霧ヶ丘の寮は広かつたんだけどねえ…」

「よし。お前、霧ヶ丘に復学しろ」

「じゃあ僕じやなくて君が通いなよ、あそこ女学院だし」

「そりいえばお前男だつたな、なんで通えてたんだよ

はあ、なんて重い溜息をつかれた。その溜息は僕が吐くものだと思うナビ。

「取りあえず俺の名前を決めよ、名前が無いと困じまれんだろう？」

「そうだね、考えておくよ」

食べ物がなかつたので外に食べに出る。二人組の男達にナンパされまくつた。女一人しかいないつつの。

途中、一方通行が居た。回転寿司を食べていた。カウンター席で一人で。そのレーンを挟んで向かい側のテーブル席で食べているとたまにレーンが逆走していた。間違いなくベクトル操作だらう。能力の無駄遣い。

「これが寿司か、寿司って安いんだな。」

「回転しない寿司は高いよ?」

「ああ、確かに品質が…」

そこは貧乏人に会わせてるからね、期待しちゃいけない。

一通りお腹いっぱいになると帰路につく。途中またもナンパされる。モテモテでよかつたね。僕?もちろん男だし誘われるわけ『お前のほうがしつこく誘われてたじゃねえか』地の分に電波で突っ込むなといいたい。

「しかし、何て言つか…家族つて良いな

「ん?なんかいつた?」

「なんでもねえよー前向いてあるけ馬鹿!」

グイッと引つ張られると信号だった、危ない…

「ありがとう」

「ふん、腐っても兄貴だからな。死なれると寝覚がワリイからよ」

途中危なかつたけど寮についた。少し狭いベッドだったので一緒に寝るかと聞いたところ。

「ふざけんな、お前は妹に欲情する変態かよ」

「オーケーわかった、君は風呂場で寝るんだね？」

「…………ちっ、わかつたよ寝りやあいいんだろう?じゃあな俺の純潔」

「…………」

なんだか悔しいので風呂場に引きこもつて寝た。あいつの意地悪い顔が頭にハッキリと浮かんだ。鏡に写った自分を見て怒り狂つて自分を殴つて静かに泣いた。とても惨めになつた。

8月13日（後書き）

読んでいただきありがとうございました

アンケート何ですがかなめの妹の名前を募集したいと思います

今日から一週間募集してみます、良い案のあるお方に提供しても良いよという方は感想にお願いします

m ( - ) m

誰も書いてくれないなんて事はありますよ!こ...

外伝8月1-1日（前書き）

読まなくとも大丈夫です

少し薄暗い部屋、そこには様々な機械が置いてあった。種類は豊富で一般人が見てもこれはだいたいこういう使い方だろと連想させるものから、使い道不明のものまで多種多様のものが詰まっていた。

そんな何となくこれは何かを中に入れて使うと連想させるカプセルの様な機械が動いた。蓋が自動で動き中に入っている物が動いている。

それを監視カメラのモニターで見ている者達が動いた。複数人いるが大人数ではない。ほとんどが白衣を着ていたので研究員だろう。

「今度こそ成功なんだろうな、資金だつて有限なんだわかっているだろうな？」

「ええ、今まででは能力が発現しなかつた、だから『自分だけの現実』パーソナルリアリティをより認識させるために感情を付けたんですから。」

「そうか、見物だな」

クライアントだろうか？スーツを着込んだ初老の人物と研究員の中で主任とでもいう人物が話しているうちに先程監視カメラに映っていた部屋についたらしい。そこで中央に置かれていたカプセルの中で半身を起こしていた人物が居た。

彼女は神城かなめであつて神城かなめではない人物、彼のクローン体だ。今は名前が無いため妹とでも呼んで置こう。

「そつちを！」。「ああ、それでいい。じゃあ脳波を計るが」

妹は起き上がりてはいるがまだハツキリと覚醒はしていないようだ、頭に機材を付けられても腕に管を通して何の反応もなかつた。

「脳波はどうだ？ オリジナルを参照してみる」

「脳波、オリジナルとのシンクロ99%。数字で見れば成功ですね！」

「まだ喜ぶのは早い、どれだけシンクロしていようが能力を発動できるかどつかだ、出来なかつたら意味が無い」

数字を見ていた研究員を落ち着かせた後、主任と思わしき人物は妹に接触を計つた。その際に妹が全裸だったこともあって白衣を着させた。その後、会話に持ち込んだ。

「おい、じつらの言つことがわかるか？」

「あ？ 何だテメーは。いくら俺を作った親だからって嘗めてんじやねーぞ？」

「わかつていいようだ……全く誰だ？ こんな性格にしたのはそのつぶやきに答える奴はいなかつた。皆一様に作業をしているか目を逸らしていた。

「おい、俺はどうなるんだ？」

「ああ、能力を発動させるんだ。出来なければ排気処分だろつな

妹は顔を青くさせると手をつむって祈るように胸の前で手を組んだ。

瞬間、妹の世界の時間軸がズレる。見るものすべてが遅く感じ、目の前に居るはずなのにまるでそこに居るのは無機物のように感じた。怖くなり無意識に壁際によつてから能力を解いた。

一瞬、主任研究員は妹の姿を探した。それはすぐに見つかったがそれ以上に彼が気になつたのは一体どうやって移動したのか?という疑問だつた。その答えはすぐに導き出され、数字を見ていた研究員に声をかけた。

「おい、あれに取り付けた時計はどうなつている?」

「主任!時間がズレています!成功ですよ!」

妹をおいてけぼりにし、研究員達は能力持ちのクローンが成功したことを探んだ。

昼過ぎ、妹は街に繰り出していた。研究員に邪魔といわれ仕方なく適当に歩いてこらへつちに施設から出てしまつていただけなのだが。

なんともなしに歩いていると田の前に既視感を抱く顔があつた。施設から出るときのガラス張りの自動ドアで見た顔だ。

「あれがオリジナル…か」

妹は喜びとも悲しみとも取れる顔をしていた。心情を如実に表して

いた。

「俺に会つたら…気味悪がるだろ？な。同じ顔の奴なんて…」

そう呟くとオリジナル…かなめに背を向けて走り出した。

目につく人間皆が誰かしらと関わっている。そう思うと急に怖くなつた。誰でも良い、誰か俺を助けてくれ。そんな思いだつただろう。一度は振り返りかなめの方を見たが既にいなかつた。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ、頭の中は嫌だという感情で埋まつっていた。

無我夢中に走つていると誰かにぶつかつた。主任研究員だった。

「なんで外に出ている」

「え…あ」

主任研究員は妹の腕を掴むと有無を言わさず歩いて施設に向かつた。妹は何故か安心した。そしてこれが人の温もりかと気づいた。

「家族…」

妹の頭の中にはかなめの顔が思い浮かんでいた。会いたい：

「へエ？次のスライムはコイツかア？」

夜になり、白髪赤目の人アルビノの人物が施設に訪れた。一方通行である。

「おーおー、こいつしか成功例がないんだ、まだやめてくれよ?」

妹がビクッと震える。その様子は誰も見ていなかった。

「で?俺を呼んだのは何のはなししがあンだア?ふざけた用件じゃあねエだらうなア?」

「ああ、これを今日だけで良いから引き取ってくれ。明日になつたら任せせる」

「ハア?ナメてんですかア?…チッ仕方ねえな。おら、行くぞ」

一方通行が言うと妹は動いていないのに強制的に動いた。ベクトル操作だらう。そのまま連れられていくと魔ビルだった。

「好きなところで寝ろ俺はもう寝るからよオ

一方通行は毛布一枚放り投げると寝床に潜り込んだ。妹は毛布に包まり寝ることにした。

毛布は暑かった。

外伝8月1-1日（後書き）

なんで妹に感情があるのかといつ話し、レジつけですが。

一通さん、優しいなあ…ラストオーダーいらないんじやないかとい  
うくらい優しいなあ…。r\_n

妹の名前、まだまだ募集していますのでなにか案のある方は感想ま  
で。

外伝8月1-2日（前書き）

妹強化週間と言つたの繋ぎ

とある廃ビルの中、妹は目を覚ました。手には暑苦しい毛布、抱き枕として機能していたようだ。チラリと見えた時計は短針が5を指していた。暑苦しく毛布を払いのけようとするが思い止まる。妹の中では初めてのプレゼントだったからだ。なんとなく、毛布を抱きしめる。やっぱり暑苦しかった。

辺りを見渡すと昨日はすぐそこで寝ていた一方通行の姿が見えなかつた。

「まだ、名前も聞いてねーのに…」

仕方ないと割り切り、毛布をたたんで端によせておく。立ち上がると廃ビルを後にした。行き先は決まってない、捨てられたのか?そんな想いにかられるが冷静に考えたところ、唯一の成功例なのだ、一方通行が適當なだけだと思つこにした。

「皆テキトーだな…」

妹の他人の評価が下がつたところで、知らない男に前方を阻まれている事に気付いた。そもそもうこんな朝早く…向こうからしたら徹夜明けだが、路地裏に女が居れば訳ありだと思うじ、だからこそ色々とやつても大事にはならないとふんだのだろう。

「おい嬢ちゃん、金くんね?」

「は?持つてねーよタコが。他当たんな。」

妹のこの言葉にプチッと来たのか青筋を立てていた。

「あんまナメた口聞いてんじゃねーぞ? 女ってのは金なくたつて価値があるんだからよ!」

暴力で屈服させようとしたのだろうが、妹は難なく避ける。

「そんな遅セーパンチ当たると思つてんじゃねえ。ハエが止まつちまつぜ?」

「うひちが下手にでてりやあいに気になりやがつて!」

相手は下手になど出てはいないのだが……ともかく男は押し倒そうと突進を試みるが、またも難なく避ける。狭い路地裏でだ。

「なんで当たんねーんだよー! まさかてめえ、テレポーターか?」

「全然ちげえよ」

そう、妹はオリジナルと同じ時間操作をしていた。相手の時間は弄れないが、自分ならば妹でも操作は出来た。

「喰らうとけ!」

近くに落ちていた鉄パイプで腹:正確に言えば鳩尾を突く。うまく当てられたのはもちろん時間操作のおかげだった。

声もなく倒れた男を尻目にその場…路地裏を抜けた。

そこは結構広い公園だった。朝方なので誰もいないが。

妹は初めて見る遊具に興味が尽きなかつた。知識として知つていたが、体験などしたことはない、興味が沸くのは当たり前の事だつた。まず見ていたのは、ジャングルジム。感想としてはこんな物があつても何の楽しみがあるのかと思っていた。しかしそれはジャングルジムのテッペンに上がつた時に解消された。

「侮れねえな… 意外とやるじゃねーかジャングルジム」

公園の回りは基本的にビルが建ち並んでいて、多少一軒家が建つていて景色も何もなかつた。だがジャングルジムのテッペンに上がつた時、一軒家がある方向だけ景観が素晴らしく良くなつた。富士山が一望出来たのだ。これには妹もナメていたと認めざるを得なかつた。

次に目をつけたのがシーソー。これも知識としてあつたので二人いないと機能しないのもじつっていたため、眺めるだけに終わつた。

すべり台、一度滑つてみたが、何が楽しいのかわからなかつたようで一回皿は滑らなかつた。

最後にブランコに乗つた、なんとか気持ち悪くなつてきたのですぐに降りてしまつたが。

最終的にはジャングルジムのテッペンにいた。なぜだか、富士山…妹からすると遠くにある綺麗で大きな山を眺めているのは飽きなかつた。

どれ程そうしていただろうか、不意にお腹の虫が妹に文句を言い出

した。時間はわからないが朝から食べていないのだ。お腹も減る。

だがどう考へても一文無しだった。要するに空腹を満たすことが出来ない。途方に暮れていた時、どこからともなく主任研究員がやってきた。

「何をやつてゐる」

「別に… ただ腹が減つた」

主任研究員は手に持つていた紙袋を妹に投げた、それを妹が掴む。

「急に腹がいっぱいになつた、いらぬいからやひつ」

「わりいな」

それはハンバーガーだった。お気に入りの景色を見ながら食べていると主任研究員が去つていた。

「飯… もつてきててくれたのか」

また景色を眺めていよつとしたが、流石にずつといるので子供もヒソヒソと話しているのが見えていた。

だからとこつわけではなさうだが、妹はジャングルジムから降りた。

「あれ?かなめさん?」

そんな声がしていただが、妹は歩いていく。

「…人違い？」

声をかけた人物、御坂美琴は首を捻り近くのコンビニに入り雑誌売場に直行していた。

妹が目的もなく歩いている、気付けば自身が生まれた施設に着いていた。記憶を頼りに主任研究員がいた部屋に入ると主任研究員と目があつた。

「戻ってきたか、ちょうどいい。ここに行つて端末からこのデータのバックアップをとつてこい。そのデータはここに送るよ」にな

「ああ？」

「廃棄されたくねればやるんだな」

「……」

バツが悪そうに顔を背けると雑務の内容が書かれた紙を奪うようになり、バックアップをとりに部屋を出ようとした。その背中に主任研究員は声をかけた。

「今日からは好きに過ごせ、その結果野垂れ死にしようが構わない」

妹は聞こえていない振りをしていたが目からは涙が流れていた。

「なに泣いてんだ俺…だつせーな」

外伝8月1~2日（後書き）

まだまだ妹の名前案募集中ですよー

10月23日の23:59でしめよつかなーと想っています

8月15日

「名前……ねえ」

昼を食べているときにまたその話しが上がった、妹？はそんなに名前がほしいのか。それとも僕と間違われたとき何も言えないのが嫌なのか。僕的には後者だな。

「早く決めとけよ、じゃねえと俺はいつまで経ってもお前のドッペルゲンガーだ、まだ死にたくねえだろ？」

お前がドッペルゲンガーなら僕は既に死んでいるんだけどね。まあ名前なんてそう簡単に決まるわけもなく、保留だ。

「あれ？ どっか行くの？」

「ああ、忘れもんだ。大事な……な」

ふむ？ まあ僕の管轄外といつとこりだね。

「じゃあこれ、無駄遣い禁止ね？」

そういうつて僕が買って使つていなかつた黒の財布に福沢諭吉様一枚入れて渡す。使い方くらいはわかるだろ？ それと一緒に合鍵を渡しておく。

「良いのか？ もうけつまつて

「だつて……一文無しでしょ？」

「わりいな」

そういうて玄関から出ていった。夕飯は食べるのか?まいか作つておいて損はないでしょ、電子レンジと冷蔵庫、コンロに感謝。

さて、夕飯の準備だけして僕も出掛けようかな。

「かなめー僕と結婚するでー」

「うるせえー死ね馬鹿野郎!」

「ぐふふ…」

とても近くで聞こえたわけだけど…あまり行きたくないなあ…まあ誤解を解くために行かなきやいけないんだけどね。外に出るとつちーと青ピが、青ピは倒れていたけど話していた。

「どうしたの?変な声が聞こえたけど

「あれ?かなめだにゃー、いまエレベーターで下についたんじゃなかつたのか?」

「せっしきのがでびーるかなめなら今度のはエンジンかなめやんな!

ガバッと立ち上がり抱き着くとするが僕との間につちーがいて阻まれている。

「多分会ったのは僕の妹だと思つよ、双子なんだ

「姉妹井やつて！？なんでそれを早くいわへんの？」

「ああ、だから口調が違かつたんだにゃー」

「アハハハ、仲良くしてあげて」

「わかつたせい」

そして部屋の中に戻る。後ろから青ピトツッちーの「かなめ、何かつめたない？」「きのせいだにゃー」という声が聞こえた。

取りあえず部屋に戻つて…カレーでも作つておく、お腹いつぱいにこの匂いはきつい、お腹すいてもきついけど。

取りあえず作り終えて着替えるために、クローゼットを開ける、相変わらず男物がない。…これ、妹に見られたらアウト何じゃないか？もう今更な気もあるけど。

取りあえずまたも中性的な服を選ぶ。フリルとかフリルとかは妹に着せよう、向こうまちやんと女だしね。

そんなことを考えながら外を歩く。ちょうどアイス屋がいた。暑い。

「おじさん、一ツ」

「毎度、もつ少ないからおまけしてダブルだ！」

そんなことをしなくていい、甘いの得意じゃないんだから…そういう苦笑で済ます。

そんなやり取りをしているうちに、ギャーギャー喚いている二人組がいた、というか二人は一人だが、御坂美琴とその妹だ。僕の妹と同じクローン体。

「そこ」の双子、姉妹ケンカはよくねーぞ

「コイツは妹じゃない！」

「おーおい、冗談でもそんなこと言つもんじゃねーな。ほれ、これやるから仲良くなろよ」

「アイス？ 押し売り？」

「ケースを洗うんでね、よかつたら食つてくれな」

その言葉の前に御坂妹は食べ始めているわけだけど。

「濃厚でいくどくなく、後味がさっぱりした甘さ…牛乳が良いのは当然ですが、研ぎの良い和糖を使わなければこの風合いは出せません。コーンはクッキーを碎いたクラスト生地を意識したものですね。グッジョブですー」とミサカは惜しみない称賛を送ります

「流石の品評といわざるをえない。なんてやつているうちにアイス屋は走り去つていてちょいと影になつていた僕は御坂さんたちと鉢合わせた。

「かなめさんじょん、どうしたの？」

「いや、暑かつたからアイスでもと思つて食べてたんだけど。良い

妹さんじやない」

「だから…！」

「かなめ？もしかして神城かなめでしょうか？とミサカは確認をとります」

「うん、神城かなめだよ。何か用かな？」

「ZXCVBNM852QWE963 - ピバスの確認をとります」

「QWERTY…」それでいい？」

「確認しました、とミサカはバスを認証したことをお伝えます」

「なー？かなめさん！なんで！」

肩を掴みグラグラと揺すられる。ちよ…やめて。

「時間操作量産計画。タイムリーチャレンジこれが僕と御坂さんのつながり…かな」

「かなめ様、関係者以外の方への情報は…」

「大丈夫、君が御坂さんの前に出た時点ではわることだから。そう御坂さん」

「な、なによ」

「PDA…だけ？ 使えばすぐだから、今日は妹と過ごしてあげて

？」

「……～ツー、わかったわよ、今日はお姉様に任せちゃなー。」

「お姉様にお任せします、ヒトには良いもののセレクト知れぬ不安をミサカは隠します」

「全然隠してないー。？」

そんな姉妹を置いて適当に歩こうとしたが、妹に携帯でも買つてしまつと思つてショックに向かつた。

「こりゃしゃいませ」

ふむう、適当に安いので良いかな、連絡手段にしかなりなやうだし。

「これで

「わかりました、プランの方は？」

「これで」

指を指し安いのを、豪華にはいけないしね。貧乏学生だし。

買った携帯に所有者情報と僕の連絡先を書き込む、それをかばんにしました。

時間は…8時か…結構遅くなっちゃつたな。もしかしたら帰つてもかもしれないし一度帰ろつか。

8月15日（後書き）

名前案の受付終了です、案をだしていただいた皆さんありがとうございました。

8月15日後編（前書き）

遅くなりましたがここで妹の名前が出ます、名前案を頂きありがとうございました。

またアンケートですみませんが後書きを一読してもらえたと助かります

家につくと妹がもうカレーを食べていた、まあ8時なので遅いくらいかな？

「おひ、遅かったな」

「うん、手続きに時間食つてね」

「手続き？」

とりあえずカレーを取りに行く、うんカレーって気分じゃないけどしかたない。

「で？ 手続きってなんだよ？」

カレーを食べながら、皿だけを向ける。

「ん？ これこれ、携帯無いとやつてられないでしょ？」

「…………俺のか？」

「そうだよ、僕の連絡先は入れてあるから」

そういうと、カレーを食べおえた僕は妹の分まで皿を持って台所に向かう。

「個人情報は自分で確認してね？ じゃあ片付けは僕がやっておくからあなたは適当にやっててよ」

皿を洗いながら皿つと返事がなかつた。携帯弄るのこせりのかな  
?見てみると妹…かなたは静かに泣いていた。

「なッ…なんだよ…み、見てんじやねえよ…」

「田の前で泣いてる妹がいるのに訳を聞かない兄がいると思つ…どうしたの?」

「…………つたん…だよ」

「ん?」

「うれしかつたんだよ!同じ顔で同じ遺伝子でお前のクローンの俺  
が!名前を貰えて!家族つて認めてもらえて嬉しかつたんだよ!」

すると顔を赤くしたかなた良い早忙で家を出て行つた。え?ひょ  
とつこていけなかつた。とりあえず追い掛けなきや。

時間は9時まで10分前、こんな時間の女の子の独り歩きは危険だ。  
色々と。

追い掛けで外に出るとつっかちーが家に入りつとしていた。声をかけ  
られる。

「今から出掛けんのかにゃー?」

「ちゅうとね、急ぎなんだ」

「こんな時間の女の子の独り歩きは危険だぜい?」

とりあえず何故か持っていた靴べらを投げ付けておいたのは良い判断だつたはずだ。

そんなつちやーを置いて寮を出る、どこに行つたかわからん。

こうこうときこそ携帯なんだろうけどまあでない。向こうから掛かってくるのを待とうかな。とりあえず商店街の方かな？

適当に走り回るが見付からない。すると前方に御坂さんが走つているのが見えた。何をしているんだろう? とりあえずついて行つてみるが…あしはやつ! 追いつけないし。

まあ河川敷の方に向かっているのは何となくわかつた、見失つたけどそつちに行つて見よう。あれ？僕つてかなたを追い掛けていたようだ。

まあ完全に見失つた挙げ句音信不通のかなたより、何となく行き先がわかつて危機迫る感じのダッシュをしている御坂さんの方がまだ時間を有効に使えるというものだろう。

「はつ はあ はあ はあ」

何とか河川敷が見えてきた、完全にこっちで正解の様だんぱちやつてる… と言うより戦争してる。

「あまり気が進まないなあ……」

それでもとりあえず下に降りると御坂さんと一方通行が派手にやつていた。実験を田の当たりにしたのか…仕方ないよね。僕だってか

なたが実験にされたら許せない。

御坂さんはちょうどビデオゲームを撃とうとしていた。え？ 反射の餌食じゃない？

時間操作ですぐに近寄ろうとしたけどやめた。理由は隣にかなたがいたからだ。

僕の思惑通りかなたは時間操作で御坂さんを射線から外して助けていた。

「お前何なんだよ？ 何で俺と同じようなやつを殺していくんだ？」

「絶対的なチカラを手にするため、最強だとか学園都市第一位だとかそんなつまんねエもんじやねえ。俺に挑もうと思うことすら許さねえ程の絶対的なチカラ、無敵（レベル6）が欲しーンだよ」

「叶うことが無いものを求めて、向上心が強いのかな？」

「アア？」

「かなめ…」

「かなめさん…」

三人共僕の方を向く、御坂さんに至っては僕が一人いるような顔をしている。実際二人いるのだけど。

「実際、敵うと思えなくとも戦ってきたのが人間だからね。それはいつまで経っても変わらないだろうし、いつか能力を無効なんてす

る能力者が出てくるかもしない。人間といつ括りにいる以上、無敵にはなれないよ。それこそ人間をやめるくらいの事をしなくちゃね

「ね」

「おいおい、説教ですかア？」

ため息をつかれた、そして後ろを向いて一言「やる気が削がれた、俺ア帰る」と慌てて去つて行つた。なんぞ？

「何しに来たんだよ？」

「泣いた妹を追い掛けちゃいけないかな？」

「けつ、つむせー！」

「…い、妹？まさかタイムリー・チルドレン？」

「そう、唯一の成功例。最近研究所を逃げ出して僕のところに来た？」

「べつに逃げちゃいねーよ」

「そう？まあそう？うわけ名前はかなつて言つんだ、よろしくしてあげてね？」

「はあ…よろしく」

何だか、イライラしているみたいだ、御坂さんもかなとも。

かなたは先に家に帰つたが御坂さんは動く様子を見せない。

「システム  
妹達を救いたい？」

「クリと頷いた御坂さんは決意した顔をしていた。携帯にメールでも入れておく。帰りは遅くなると。すぐにメールが帰ってきた。今晩はお楽しみですか？やかましい。

これから作戦を練るため、一度落ち着けるところに移動することにした。

8月15日後編（後書き）

かなめの容姿を説明した文が無いといつ指摘を受けました。

個人的には各自の妄想で脳内保管の方が良いかな？と思つていたのですが…

どうでしょ？容姿が必要ならば序盤の方を修正いたします

この小説は素人も良いといふので皆さんの指摘で育ちますので気軽に意見を貰えれば幸いです。

もちろんほかに愚つといふがあればそこも指摘していただけると助かります

8月19日

準備は出来ている、覚悟もオッケー。そんな感じで御坂さんと研究所を潰していた、家にはあまり帰つてないが毎日電話をしているので、かなたには安心してもらつていい。安心してる？

とにかく残りは後一基といつとこりまで来た、お互に寝不足でちょっとあれかもしけないけど、気力だけは十分。そんな感じで施設の前に立つていい。

施設名は何だつたか覚えてないけど、まあ潰すんだから覚えていくても良いだろ？

まあ今日の襲撃はばれているだろ？、どつちの施設も障害が阻ると見て間違いない。と言つより本編じやあこんなイベントなかつた気がする。まあ昨日の一方通行さんと御坂さんの絡みも知らないし。……あれかな？超電磁砲とか言つ外伝？まあ今更感もあるし今を生きる僕には関係ない。

なんて考えていたら天井が降つてきた、インテイじやあ無いけど崩れ落ちてきた。欠陥住宅か？

時間操作で体感を遅くし落ちてきていたことに御坂さんと逃げ込む。

「やつぱり障害は居るわね

「まあね、向こうだつて必死何じやない？ねえ暗部の方？」

反応はなかつた、角から覗き込んでいるのはわかつてゐるけど誰なのかわからぬ。まあグループじゃあ無いでしょ。アイテムとかかんな?……あれ?原子崩し?

とりあえず向こうも自分の距離を崩されたくないからか距離をとるようだ、階段を上つてゐるのが見える。すぐに追い掛けるがあちらこちらにファンシーな人形がちらほら、なにこれ?

そんなことを思つていたらシュー音と共に床や壁に引いてある修正テープのようなものが発火しながら人形に触れた、その瞬間僕と御坂さんに爆風が襲い掛かつて来る。なるほど。

「なんでこういう奴らは人形に爆弾を……」

御坂さんが喋つてゐると思つたら止まつていた、何だらう?と思ひ見ている方を見たら粉々になつたゲコ太が…

「…許さない、絶対によ!」

えええー…階段まで距離があるにもかかわらず磁力を使いながらもうダッシュしていった。早過ぎ、ボルト疾走クラスの早さだよそれ。置いていかれてもあれなので僕も時間操作で先回り、したのは間違いだつたかもしぬ。

「うわ、すつごい形相、捕まつたら八つ裂きにされちゃうかも…なーんちゅって(はあと)

うん、多分こんな感じの事を言つてたんだと思つ。僕と御坂さんは階段を崩された。

「うわっ！たつとーつほ！」

僕は時間操作で体感を最大まで遅くし、崩れ行く瓦礫を足場に崩れていかない階段まで飛ぶ、完全にスタイリッシュ！

御坂さんは磁力で階段を作っていた。

更に逃げる相手、今更顔の確認したけど女の子だった、まあ女の子だからどうこうって訳じゃないけど気が引けるのも間違いない。

でも僕は女の子を殴つて人一人が救えるなら殴れると思う、多分、うん、きっと。

なんて考えながら、追い掛けていたけど、少し遅れた僕は御坂さんと向こうが会話していたのに気づかなかつた。そして頭上のシャッターが閉まるのにも気付くのが数瞬遅れた、もう少し遅かつたら、現世とさよならしていたと思う。

「結局つ追い詰めた方が追い詰められたつてのはよくある話な訳よー！」

頭上から複数の、かなりの数の人形が落ちてきた、回りには導火線。ピンチ！

「こんなことに余計な力を使うなんて」

御坂さんがそう呟くと、床が持ち上がり導火線が断裂した。……ただの天災じゃない。

「覚悟は良いかしら」

御坂さんが突撃しようとしたが相手が何かを落とした、爆弾?いや、それだと自爆する。そこで思考が行き着くのに「コンマ二秒。

慌てて走り御坂さんの田を無理矢理手で塞ぐ、そして僕は田を開じる。耳はしじょうがないとして、田だけでも生かそう。

スタングレードが終わると同時に向こうはまたもファンシーグッズのミサイルを飛ばしてきた。阿保かと。じゃあね僕の現世。

なんて思つたらグイッと引っ張られた、御坂さんの磁力だらう。壁超痛い。

「こやーはっはーま、結局私にかかるばこんなもんな訳よー。」

すげに喜んでいるようだ、後ろに回り込んでいるのに気づいてない。本当に暗部?

「チヨックメイトつてとこかしら

バチバチと放電している。ゲコ太恐るべき執念。何だか向こうに同情してきた。

「M i . j . u c a v i n o ~」

なに?何語?みじ?カヴィノ?

御坂さんの方を向くと向こうも知らないようだった。

「「」んな言語ねえつの」

ないんかい！と突っ込みたいけど、なにか瓶を投げてきたので掴む。

「あ…あはは」

「これなに？」

「教える訳無いっつの…」

もう一つ同じようなものを投げてきた、御坂さんが電撃を出すと空中でぶつかり爆発した。爆薬大好きだな君。

すると辺りでシュー・シュー音がしていた。ガスが漏れている…と言ふより向こうがバルブを開けたようだ。確か窒素ガスだった気がする。書いてあるしね、壁に。

「学園都市特製の気体爆薬『イグニス』この気体は人体には影響は無いけど放出後一瞬で拡散して空間を満たす。要するにこの部屋自体が巨大な爆弾て訳よ」

まあこれ…僕が持っている奴が爆発したら全員おだぶつって訳よ。  
……つづった。

なんてしていたら御坂さんに蹴り入れようとしていた。

何だかムカついたので声をかけた。

「君の命は僕が握っていると見て間違ひ無いよね？」

「はあ？ 結局それが爆発したら全員死ぬ訳よ、」つむぎは暗部で長いことやつてんのよ。死ぬのが怖くてやつてられるかつての」

「ふーん、そりゃ..」

さつきの爆発を見るかぎり全員範囲外になつてている場所に投げつけ  
て爆発させた。

「さあ、君は窒素ガスで何がしたかったのかな？」

ちょいちょいと指を指すと口をあんぐりと開けていた。気持ちはわ  
からぬでも無いけど馬鹿だね。

「そつかそつかあ.. 結局は子供だましだつたつて訳ねー。ははっ結  
局だつてつづきやつたかしり」

…………とつあえず御坂さんが怖い、なにこの威圧感。

（愁傷様）

中ボスを倒したら親玉が出てきました、そんな感じかな？

「麦野…だっけ？原子崩しさん」

「ああ？」

怖いって、まあここは御坂さんに先行してもらつて…大丈夫かな？確かに滝壺だかなんだか名前忘れたけど、追跡能力じゃなかつたっけ？

「御坂さん…僕が足止めするから先行して施設の破壊を、あともしかしたら相手が追跡能力有るかもしれないから気をつけて、向こうにとつては壁なんて見えないだけだから、盾にはならなそつだからさ」

「一つ…わかつたわ、かなめさんも氣をつけとね」

なにか言いたそうだつたけど、まあ先行してもらつ。じゃないと御坂さんが来た意味が無くなるからね、何よりも優先するのは施設の破壊だし。

僕は…まあ時間操作いっぱいいっぱい使えばどうとでもなるでしょきっと。

とにかく、御坂さんが麦野だかなんだかを突破しない事には始まらない。という訳で時間操作で御坂さんの体感を遅くした僕たちから見れば気がついたら御坂さんが居ないという状況に陥っている、現に向こうは把握できていなかつたみたいだし。

「テレポーター？」

「ああ？」

うん、イライラも溜まつていいようだ。前に戦っていた女の子がへましたからかな？とりあえず女の子3人だと誰が誰だかわからないので暫定的にリーダーツポイのが（恐らく）麦野、金髪が金、黒髪が黒としておこう。

何だろ？のもしも麦野じゃなかつたら的な恐怖…茶にしておけ、うん。

なんて脳内で名前というか呼び名が決まった頃…といつても「ああ？」といつてから数秒しか経ってないけど、茶からなんか凄いの飛んできた、ナイスビュー。

横つ飛びで避けるとその先の人形が爆発した、流石に直撃するとまずいので時間操作で何とか範囲外に…といつても爆発が広がる速さの方が速いため多少被害を被つたけど…まあ問題無い。

とりあえず僕が転がつているうちにトドメを刺しに来るかと思つたけど茶は明後日の方向に撃ちはじめた。

「対象は依然として移動中」

黒がそんなことを言つていた、ああ御坂さんね？つて撃たせちゃまづいんだつた…気をつけないと。

とりあえず足元に広がる導火線が見えたので一応退避しておぐ。

「で？君らの依頼は僕と相方の始末つて」と良いのかな？」

「そんなこと話す馬鹿いなーいつーの。話で長引かせようなんて…  
結局は戦うことになると甘ちやんて訳？」

「フレンダ、あんた黙つてな」

茶にいわれて落ち込む金、といっかフレンダって叫うんだ。

「まあ時間稼ぎがしたいのは間違つてないんだけどね、そのためには先行してもらつてるんだし」

といつ訳で僕の話術が生きる…なんて思つてたら茶はまたも明後日の方向に撃ちはじめた。とまんないって無理無理。

御坂さん死んでないよね？うん、舌打ちしてし当たんなかったんだろう。

「フレンダに滝壺、あの女追い掛けなさい私はこいつを消してから」

「結局はそつな訳ね、わかつたわ」

走つていった、黒も額ぐと行つた。何となく面白そうだから金の体感を速く…要するに僕らからみると遅くなつていた。茶の額に青筋が見える。『愁傷様。

なんて思つてたら。いきなり僕の方にビーム撃つてきた死ぬ。なんて事はなく避ける、大振りだし直線的だからわかりやすい、まあ弾速はそれなりに速いからすぐに射線から逃げないと危ないけど。その回避運動に集中をしていたため時間操作が切れる、金が普通の速

さで走つていつた。先で黒は待つていたみたいだ。

「ふうん？」

僕の仕業つて気づいたみたいだ、だからなんだつて事にもなるけど。

とにかく厄介な奴つて印象は付いたかもね。正体不明の能力に御坂さんと違つて無名だから誰が誰だかわからない。まさしくアンノウンインベーダー。正体不明の侵略者とか何処の厨二?

「一ノ瀬」

とりあえず田の前に集中しよう、じゃないと済まれる。

何故か怒つてゐし、怒らせるよいなことしてないはずなのに。

一理不尽だああ！

車の用をうこりふりて往来でんのよ、あわらぬねに

音譜つけてないで砲撃をやめろといいたい。

すると施設が揺れた、それもかなりの振動だった。恐らく御坂さんが壊したんだろう。

「あらら？ これで僕らのミッションはコンプリート何だけど…見逃してられないかな？」

田の前がビームで埋まる。咄嗟に時間操作で避けなかつたらセヨナ  
らじてた…

そんなやり取りをしてくると御坂さんがスタッフと降りてきた。忍者  
かと。

「ハッシュショノハハパート?」

「勿論、早く逃げるわよ」

「クリと頷くと時間操作を僕と御坂さんに使い入口まで走る。これ  
で逃げ切れるでしょ。」

「…………」

背中にすっと視線感じたけど今日のところお互い寮に帰るとする。

時間操作はそのままにしたから時間的にはかなり早く寮についた。

「それじゃまた明日ね?」

「やうね……」

「ぐれぐれも今日行けなんて思ひちゃダメだよ?身体が持たない  
からね。」

「…………」

何で田を反りした。

「じゃあ今日またひつが？」

「え、遠慮するわー迷惑だし、ね？」

「じゃあ行かないね？」

「はー……」

よしこ、といわんばかりに頷く僕、たまには偉いことひもね？  
そして家に入ると愛する妹からの熱烈な愛と、この家のドロップキック  
クが。

「テメエ今更帰つて来てんじゃねええええー！」

「なん……で……」

「よし、まだ帰つてこなかつた弁明を聞いてやる」

それは暴力の前にだね……まあ口に出だしたら更にやられそうだからし  
ないけど。

「なんかムカつぐ」と考えたな？

「いふあー……」

なんで僕は抓られてこむのだろうか？と嘆つより理不眞だ…

「で？家を開けた理由は？」

かなたがイライラしていますといった態度で聞いてくる。

「人助け」

「せうか、なら先ずは俺の空腹をどいつにかしる。」

「はい」

僕…兄貴だったよねえ？まあそんなことでへこたれていられないで夕飯の支度をしようと冷蔵庫を開ける。からっぽ。

「…………中身は？」

「食えるもんは食つた」

「出前こじよつか？」

「俺玉子丼な」

電話をして頼む、なんだか悔しいので僕のは上位互換の親子丼を頼んだいた。

結論から言つと玉子丼のほうが美味しかった。親子丼は鶏肉が固くておこしくなかつた。誰だよ、玉子丼の上位互換とか行つた奴は。

「じゃあ俺はもう寝るからな」

電気を強制的に消される、まあ僕も寝るところだつたから別に構わないけど…

8月20日

朝方、まだ朝日も昇つていない頃。変な物音で目が覚めた、その音は玄関から聞こえている。

「あ～もう、鬱陶しいわね。」」消し飛ばせば一発じゃないの

「それは住人に気づかれるので超オススメ出来ません」

「結局はアタシのツールの出番つて訳よ」

「頑張つてフレンダ」

何だらう嫌な予感しかしない。と言つよりもダメだこれ。

意を決してドアを全力で開けた。なんだかゴツという鈍い音が聞こえた。

「フレンダを倒すなんて…」

「勝ち田は無いかもしねないね」

「これは超マズイ状況ですね」

笑いを堪えながら3人が言う。何とか玄関の命は守れたようだ。後は僕の命なんだけどね。

「何のようですか？もう依頼は終わつたんじやないですか？」

「個人的に遊びに来たのよ」

暗部のメンバーで？冗談はやめてほしい。

「間違えません？」

何て言うと首を麦野に掘まれた。なんだか光っている。

「今から消し飛ぶのと私達を家に入れる……どうちが良い？」

「い、入れても良いですけど妹がいるので。へ、変な話は出来ないですよ？」

超吃る。まあ仕方ないよね？誰だって命掘まれたらこいつなると思つ。

「そう、じゃあ勝手に入らせてもいい訳よ」

じゃあってなんだ。僕、今、断つたじゃ無いか。  
首を掘まれたまま中に連れ込まれる。僕の家だけど。  
かなたは寝たまま、神経図太すぎでしょ。

「单刀直入に聞かせてもらいます、あなたは超何者ですか？」

「超凡人ですが何か？ちょっとタイム！」

首もとの手が光る、命はなげするもの……ではない！死んだらおしまい。

「とりあえず何やってるんですか？」

僕の見る先には黒が僕の部屋を弄っていた。

「それよつこひの質問に超素直に答えてください」

「名前は神城かなめ、能力は無し。そんな平凡な高校生です、はい」「バンクに登録されている通りね……本当のところは？妹の前で頭を弾け飛ばしたくないでしょ？」

「じゃあ飛ばすことしないでもらいたい。と講義しようものなら一睨みでだまられる……ぼくよわ。

「どうせ知ってるんでしょ？時間操作くらい」

「あ……それ知ってる、一方通行のレベルシフトの短縮に使われる能力だ」

部屋を弄っていた黒が反応する、弄っていた辺りは何だか「ゴチャゴチャだ…

「よしよし、人間素直が一番」

そつこつて首を離してくれ。良い笑顔で。

「じゃあこれからはアイテムの構成員になる訳よ。そんな訳でアタシはフレンダ」

「麦野様でいいわ

「滝壺…」

「綱旗です超よひじくお願こします」

うん、ハーレム来たとか思つなかれ。死亡フラグのオンパレード過  
ぎる……

「不幸だあ……」

聞こえないう位の声量で呟いた……その間に勝手に携帯を弄られアドレ  
スが流出していた。

「じゃあ何かあつたら連絡しますので超早く出てください」

「結局は逃げられなうって訳よ」

フレンダが肩をポンポンと叩いた。同情するなら逃がしてほしい。

すると僕を置いてゾロゾロと玄関を出みひとしていたといひ麦野が  
振り返った。

「着拒したら……殺す」

…じやなこつてー恐すすんでじょー

バタンと音を立ててドアが閉まる。ひょうひかたも田が覚めたよ  
うだ。

「つむせえー静かにしてろー」

枕が飛んできた。怒りがMAXになつたー泣いた。

今は夕方色々と切ない感じに過ぎじてきたり、部屋の片付けとかね。

でも理由はある、計画の最後の砦と思われた施設が機能していなかつたから。御坂さんは喜んでたつて、僕にはまだ早計なんじゃないかつて思うけど口にはしない。何か起こっても当麻が何とかしてくれるでしょ。

なんて無責任なことを考えながら歩いていると当麻と御坂さんが何やらやつているのが見えた。あ、自販機蹴った。

…………これはあれかな？原作の奴だよね？うん、当麻ご愁傷様、二千円札を使う君が悪い。

でも使いにくいのは認める。ATMで一万円卸した時に5枚の一円札が出てきたときは思わずあれ？って言っちゃったくらいだ。

なんで諭吉で出でこなかつたんだろう？まあ置いておこう、とりあえず僕は僕の買い物をしないと…

「いらっしゃい」

「トランクスタイルの水着のチョイスをお願いします」

この店は水着等を売っている店、方向性を言えば水着をチョイスしてくれるナイスな店らしい。一着千円お手頃な値段もナイス。

弊害として返品は受け付けてないらしい、クリーニング・オフ済目。まあ御坂さんとかに聞いたらハズレはないみたいだし期待していく

良いだね!。

「後はかなたのか…」

めんどくさいので携帯に水着を買つてきなとメールを送る。すぐに帰ってきた。

『死ね変態』

何だらう!のやるせなさ…

色々とかなたにやられでいるので一人外食をしようとした歩いていた。

前方に御坂さんが見える。

「どうしたの? って妹さんのほうか

「なんでしょう? ヒミツカは間髪を入れずに答えます」

「いや、見知った顔だったから。どうへーー飯でも食べに行かない?」

「時間は空いているのですが… よろしくのでしうか? ヒミツカは確認をとります」

「いいよ、一人で食べててもつまらないしね」

「うーー一緒にします。ヒミツカは夕飯の確保が出来て喜びます」

じゃあ笑おうよ。何て言つともなく店に入る。

「栄養バランスが崩壊しています。ヒカリは警告します」

「いつもじゃないから良いの。たまにはストレス発散しないと」

僕の目の前には肉肉肉。入った店は焼肉屋だった。まあ分かってて入つたんだけど。

「太りますよ?」ヒカリは世の女性が聞いたら動きを止める魔法の言葉を使います

ピシリと僕の動きが止まる。勿論太るという部分じゃなく女性という部分で。

そーかそーか。僕は自分から言わないとDNAにも間違われるくらいだもんね。期待はしちゃいけないんだったね、うつかりしてたよ。グスン。

「やはりこの言葉は強い。ヒカリは確信しながらも食べ頃の牛タンを掘みます」

強い子や…なんて思いつつも僕も牛タン取る。確かに食べ頃だった。

そんな自棄食い…もしくは自棄肉も終わり店を出る。

「そういうえば君は何なのかな?」

「ヒカリは10032号です、ヒカリは答えます」

妹さんは振り返ると夜道を歩いて行つた。

8月22日(前書き)

残念ながら短いです

…前話とくつつけおけばよかったです。orz

今日、恐らく当麻と一方通行さんの一騎打ちだね。

それまで僕はミサカさん・検体番号10032号と遊んだり食べに行つたり…フラグの一つでも立てておこうと思つたが…僕にはむりか…。

まあそんなことでへこたれではいられないんだけど…といつか余り関係はないんだ。

とりあえず僕が今向かっているのは病院。冥土帰しがいる病院。通称蛙医院。通称はどこから来たかって?僕しか使ってないよ。

「…」んばんわか?

「どうしたんだね?」

「今日一人怪我人が出るから」

「医者としては出ないほうが有り難いんだけどね」

「上条当麻が来ると思うから、迎えに来てくれると助かるかな」

「……また彼が、一体何をやってるんだ」

カエルは呆れていた。まあこの短期間に3回入院?するんだあきれもする。とまあ、そんな話をして病院をでる。空は夕焼け空、もう

少しで夜になるとこいつ時間だった。

早足で帰宅。第一声は…

「メシ」

『』の亭主鬱白だよ。

仕方ないにせど作る。簡単なものになつたねど又せこわせない。

「ちよつと焦げてる、おまえのよいか」

ズイツと奪われ渡される。

「何様ー!？」

「黙つて食え」

「はー…」

食べ終わつ目も洗い終わつて時間を見るの時を回つていた。

「ちよつと出掛けで来るよ」

「あー、どう行くんだ? ロンビーナり飲むヨーグルト買つてくれ。」

「

「わかったよ」

眞つものを聞くと外に出る。今日は風がない。ちよつと蒸し暑い夜

になりそうだ。

そんなことを考えながら歩く、向かう先は以前、御坂さんと一方通行さんがやり合ってた河川敷の先、実験現場だ。

少し遠く…距離にして200mくらい先でプラズマが見える。戦いもクライマックスという奴だろ？

僕は走り出す。勿論行く先は当麻たちのもと。

「歯を食いしばれよ最強さいきょう」俺の最弱さいきよはちつとばっか響くぞ「

当麻の右が一方通行の顔を貫いた。

一方通行は倒れ、当麻もその場で崩れ落ちた。僕はカエルに連絡を入れて二人の容態をみようとした。が当麻のほうはミサカさんと御坂さんが見ているから問題無いだろ？

僕は一方通行のほうを見た。気絶しているだけだろ？

そつと背負いその場を離れるとちょうど、カエルとすれ違った。  
「向こうにいるから」

「おやっこの彼は良いのかい？」

「気絶してるだけだよ。大丈夫」

「さうか、もし何かあれば連れて来なさい」

「クリと頷いて背負つたまま僕の家に向かう。飲むヨーグルトは買えそうにないなんて思いながら進む。

寮が見えてきた、またかなたがうるさいんだろうなーなんて思いながらエレベータにのり、階を移動し降りる。玄関を開くとかなたが寝ていた。

ちょうどよかつた、適当に一方通行を寝かせるとコンビニで飲むヨーグルトを買いに向かった。

8月25日（前書き）

勢いで投下してゐるから元々悪い作品の質が更に激悪に…

バッチャコイー・ナラ、ドウゾ。

8月25日

なんだかつまんない。自室での僕のそんな言葉から今日の指向性が決まったといつても過言じゃあない。

「急にどうしたんだじゃー？」

僕のつぶやきに勝手に僕の部屋に上がり勝手に雑誌を読んでいたつちーが顔を上げ反応する。

「なんでここの夏休みがそこまで面白くないか考えてたんだ」

そういうとここれまた勝手に僕の部屋に上がり込んできた当麻がゲームから顔をこっちに向ける。アクションゲームだつたがお構い無しにこっちを向いたので死んでいるのは御愛敬。

「で？ 結論は出たのか？」

「圧倒的に青春が足りないと思つんだ」

ふたりして首を傾げている。僕は何もおかしなことを言つてないはず。

この部屋を見ればわかる。ワンルームに男三人が集まって好き勝手ダラダラやっている。女の子分が圧倒的に足りてない。まあかなたが居るけど今はここに居ないし。あれは女の子とは思えない、凶暴かつわがままな獣とも思つている。

現にかなたの領域には「こ」はないけど僕とかなたの領域の境目…ギ

リギリ僕のモブアパートを追こやつしてこる。片付け、掃除くりへ皿分でしなわー。

「うん、彼女がいればきっともつと面白くなると思つんだ。どうかなつつかー？」

「間違いないぜー。ただしあみやんテメーはダメだ」

「なんでだよ！俺だつて彼女欲しこつてー！」

「ふーん……じゅあインテックス呼んで来るから楽しんでなよー。」

「ちよつと待てー！上條さんは包容力のある管理人さんタイプが好きなんですよー。インテックスをじゅあ荷が重いわけですよ」

やれやれ……といった感じで首を振る。

「じゅあ今の言葉をインテックスの田の前で…」

立ち上がるとき当麻が腰に抱き着いてきて涙田で首を横に振つていた。キモにから離してほしー。

「じゅーーかみやんがとうとうかなめに手を出すつもりだぜーーー。」

「とつあえず暑苦しいから離れよつか？」

そうここつづグイグイと引きはがす。意外とあつさつ離れた。

「ところでナンパでもしに行くべきだと想つんだ。異論は

「「ない」」

「『賣部』は？」

「「いらん」」

OK、じゃあハントの始まりだ。

夏のナンパとしては海が思い浮かべられる。でも学園都市に海はない。あつてプール。だから僕たちはプールに向かうことになった。

「学園都市のプールなんて久しぶりだぜい」

「俺はいったことねえ」

「僕もないよ」

そんな、まだ見ぬプールにて、と書いつづけた時にプールの女の子に思いを馳せた。

入場のチケットを買い更衣室に入ろうとした時にプールの女のスタッフ…おばさんに声をかけられた。

「お嬢ちゃん！女子更衣室はこいつだよー！そつぢは男子更衣室ー！」

キヨロキヨロと周りを見渡す。僕らしか居ない。どう見ても女の子は居なかった。なんてキヨロキヨロしてたらおばさんに肩を掴まれ女子更衣室に連れ込まれた。え？なんで？

「ふう、あんたみたいな可愛い子が行つたら何されるかわかんないよ？自分の体、大事にしなよ？」

え？ 行つちやうの？ 男はみんな狼なんだよ？ いいの？ … なんて事は僕には出来なかつた。誰もいなかつたからすぐに着替えて荷物をもつてプールに。水着は勿論御坂さんオススメのナイスな店のナイスなライトグリーンのトランクスにTシャツ。話しによると濡れても透けないようになつてるらしい、これはシャツを着たまま入るみたいだ。で、シャツの下に着た胸当てのようなものは何だらう？ 防弾性でもついてるのかな？

なんてキヨロキヨロとロッカーを探す中には無いよつだ。更衣室を出てすぐについた。位置的には男子と女子更衣室の間くらい。

ロッカーに荷物を置いて当麻達を探す、ちょづび向こいつも探していたらしく目が合つた。

「さあ狩りのはじまりぜよ」

「上条さんの底力見せてやる」

うん、変なスイッチ入つてる。ちなみにつちーは花柄の…と言つより紺地にハイビスカスのトランクスタイルにいつものサングラス。センスが逸脱している。

当麻は「テニムのトランクスタイルだ。絶対重い。

「じゃあどりあえず吟味してトップバッターは誰が行く？」

「……」は俺に任せとくのが吉だぜい？」

「さすが土御門便りになるな」

当麻がつっちーの肩を叩く、僕らに振り向き笑顔を向けるつっちーはいつもと違った…気がした。

三人で見ているとちょうど三人組が歩いて来た。会議の結果有りと可決。つっちーの特効が始まつた。

「…………」

「泣くなよ…」

察してくれといわんばかりにつっちーが墮ちている…まあめげていられない。

「土御門の敵は俺に任せとけ」

熱血している。

「当麻、頑張つて」

「おう

目の前に残骸が一つ。こりや使い物にならないね。ちなみに当麻は彼氏持ちに手を出して必死に逃げきつて倒れているだけ、いわゆるスタミナ切れだ。あとは僕が頑張るしかないのか。

そんなことを思いながら顔をあげるとちょうど三人組が、辺りを見渡しても彼氏持ちな雰囲気はない。逆にキヨロキヨロしているから探しているとも見える。

「ねえ、ちょっとといいかな?」

「え? なに? ナンパ? … って違つか」

いやナンパ何だけれども…

「一緒に遊ばない? 一応あそこで居るのが連れなんだけだ」

フイックと親指で指し示す。女の子達はちょっとと考えると。

「うーん… 正直このプール居なかつたしね… まだカツコイイ部類だからいいよね?」

「そうだねー」

「いいだろ?」

何とか決まったようだ。……僕って凄いんじゃないだろうか?

「セレのぼるくらー? これで良いんでしょ?」

「なにこれー? もしかして撃沈した?」

「当たり」

「キヤハハ」

全くもつて情けない連中だ。

まあ女の子の確保が出来たから街にでも繰り出そつか。 そろそろ良い時間だし。

今はフアミレスに入つて談笑している。

僕は疲れてあまり喋れてないけど。 なにがあつたかって? 着替え...いや、 察して。

「あんた... 良い身分ね... つ...」

ん?...と思ひ顔をあげると御坂さんと白井さんが居た。 御坂さんはビリビリこつてる。

「かみやん、ちよつと向ひこつてるぜよ」

ドーンと当麻を御坂さんに引かれ渡すつづー。 悪だ。

「あれはどうした?」

「かみやん常盤のレベル5に怨まれてるんだにゃー」

「へー... 上条君つて凄いんだー」

「無能力だけどねー」

「じゃああたしはそろそろ解散するわね、今日は楽しかったよ」

そして去る女の二人。あれー？

「これは当麻のせいなんじゃ…」

「かみやん…」

意見が一致して後ろを見ると電撃に襲われていた、そのまま当たれ。

「なんだか拍子抜けしちゃつた…かえろうつか？」

「やつだこやー」

僕らもフタリレスを出す。後ろから当麻の助けを呼ぶ声が聞こえる  
けど無視。

「不幸だあああああー…」

うん、すいこ音がした。僕とつづりは顎くじすぐにその場から逃  
げた。

「なんで誰も電話に出でくれないんやー…」

8月26日

ある意味では昨日のナンパは成功だ。でも失敗だ。

その理由を一人残り少ない宿題をやりながら考えていた。

何がいけなかつたんだろう？ 昨日の女の子達の言つてたことを思い出す。

『あの中ではカツコイイ部類』

『両手に花』

『可愛い子いるのにナンパしてたのー？』

これくらいかな？ まあカツコイイ部類つてのはわかる、この僕の溢れんばかりの男気がそうしたんだろう。ん？ 鏡？ 何をいつてるのかな？ かなたが写ってるだけじゃない。

まあ最初のカツコイイ部類つて言つるのは間違いなく好印象とどつて間違いない。

次の両手に花： これは多分一人もしくは三人が僕につくつていう事をいつてるんだと思う。

え？ 男2の女4に見えたつて？ 眼科医つて眼球くり抜いてもらつた方がいいよ。代わりに邪氣眼入れてもらいなよ。

「あ、間違えた。ここはこの公式か」

消しゴムで消し書き直す。えーと? 結論は僕がかっこよすぎたんだ  
つけ?え?違う?知ってるよ!-

で、最後は…可愛い子いるのにナンパしてたのー?

これは疑問が満ちた。僕とつっчиーと鷹麻しか居なかつたはずな  
に…

心なしか僕以外の二人に言つてたし僕の事をチラチラ見てた氣もす  
るし…

いやいや…きのせいいきのせい…がいいな…。

「僕はこのままで大丈夫なのかな」

「あ?どうしたいきなり」

「うん…男として生きて行けるか不安になつてさ」

「?…あ~…?ああ、そうだなそうだったな」

「まさか妹に性別を忘れられる口が来るとは」

「そりいえばお前兄貴だったよな。姉貴にしか見えないけどなー」

それはどうなんだろう…?とか人生の先行きが不安過ぎる。

「だって俺と並んでたら間違いなく俺が男って言つた方が信憑性あ  
ると思うぜ?」

「」の僕が女々しいって？どれだけ男らしく生きてると思つてるの？」

「少なくともそこいら辺の女よりも女してるんじゃないか？まあ俺よりかは女してるよ間違いないな」

「かなたもそれは女の子としてどうなの？」

「俺は元々お前のクローンだからな、性別以外は間違つちやいないんじやないか？」

「じゃあなたに？僕は性別を間違えてきたとでも？」

「違うのか？DNAに否定された男？女？」

「男だよ…」  
「…」

「ああ、ワリイな姉貴、間違えた」

「訂正する気なし！」

「かなたのくせに…男女のくせに…」

「仕方ねえな今日は俺が飯を作つてやるよ、可愛い姉貴のためにな」

「またそういうふうに言つつか…」

「怒んな怒んな、上条が口出しこそへそつてんだぞ？」

「え？ ひじき麻どのしたの？」

「いや、ちゅうとインテックスを預かってもらいたくてな」

「別に良いけど…」

「ホントか？ サンキュー。おーにインテックス！ オッケー出たぞー」

隣の玄関が開く音がする、パタパタとする足音がそづだらつ。

「じゃあかなめ、後頼むな」

「よひしくなんだよ。じゃあねとつま」

ブンブンと手を振っている。あ、壁にぶつけた。

「いや… 僕のせいじゃないから睨まれても…」

「いやなんとこに壁が有るのがいけないんだよ、もつといつにや  
るべや」

「じゃあ当麻の部屋を改築して玄関狭くしないと。ところが壁に怒  
る人なんて初めてみた」

「おい、飯は食つのか？」

「たべるー。」

即答！？ まあ別に良いんだけどさ… でもかなたが仕切ってるのって  
なんだか納得いかない。

「セツニエバ今日せビーハしたの? 珍しく來たけど」

「今日はね、当麻の食糧が無くなつたから來たんだよ。情けないよね」

情けないとかそれ以前に、そんなに食べるの…? って話なんだけど。

「おひ、家のはコイツのだから食糧難になるまで食つんじやねーぞ」

「わかつたんだよ! 今日の僕の飯は炒飯!」

何についてわかつたのかはつきりしてほしい。

結局かなり食べられた。まあ食糧に一時的な損害だから… 今月はもつ。といふか今月はもつ終わるからね。

今はインテックスはマジカル何とかんたら… 覚えられない… まあカナミンだがなんだかを見て徹底的に考察していく。原典の無駄遣い。

邪魔すると噛まれるから気をつけろ。頭がいたい。

Prrrrrr

「おい、携帯鳴つてんだ。あと僕のがきんちよ携帯へりいでビックつてすんな」

「し、してないもん」

「ほーお?・じや あお得意の神に誓えるのか?」

「当たり前かも。とこつより神に誓つへりいで」「まかせられるなら」  
「よしによ」

本音駄々漏れ、なんてほのぼの見ていて電話に出るのが遅れた。

「殺すわよ?」

携帯を全力で投げそうになつた。鉄の精神で何とか落とすに堪えた  
けど。

「今から来なさい。場所は第8学区の」

「ふつん、とこつ音とともに電話が切れる。え! ? 僕切つてないよね  
! ? 電話のマーク出てるよね! ?

といつか第8学区のどこに行けば良いの!?

完全にプチパニックになつているがすぐに準備して行かないとまず  
いことになる。宿題を中断しクローゼットを開けたは良いものの奇  
跡的にスカートとかしかなかつた。意味わかんない。洗濯を怠つた  
からか!

確かどつかのヨーロッパではスカートが基本の国が合つたはず。だ  
から大丈夫、と自分に言い聞かせて仕方なく服を選ぶ。青いスカー  
トに白いブラウス。アルエー。

「ちょっと出掛けた来るね

「ん？ああ」

「わかつたんだよ」

まあ女の子同士ゆっくりしゃべってください。

奇跡的に麦野を見つけた、神っているんだなって思った瞬間でもある。ちなみに麦野しかいなかつた、絹旗しかアドレス知らないはずなのになぜしつてる。

「ようやく来たわね」

「場所の詳細ぐらー…」

「それは置いといて。かなめ、ここ制圧してきなさい

意味がわからない。

そして良い笑顔のはなんぞよ。そして建物を見上げる普通のビルだった。

「制圧するのは地下

あらさうですか、といひことで階段を見る。うん、これスキルアウト的な奴らがいっぱいいるつて。

「僕には無理ですって。攻撃能力は皆無ですし」

「ウハセニ、ウハセニとこせなセ」

瞬間、感じる浮遊感。階段を蹴り落とされたと氣付くのこやんなに時間要しなかった。

「ん~? ぶげえ! ?」

ちょうど階段下のドアから出てきたらしい人物と接觸。奇跡的に無傷…いや打撲くらい有るかな?まあ殆ど怪我はなかった。

「いたたた…」

腰をさすつているといきなりの拘束…とこづよりハグ。顔を埋めるな息できない。

「神様ありがとよ、彼女がほしつていう願を叶えてくれて」

「むーーむーー」

「はつはつは、喜ぶのは早いんじゃないか?」

「全く…世話が焼ける」

いきなりの開放感。ハグしていた奴は気絶していた。

「いきなり蹴り落とさなくとも…」

「じゃあ私も手伝ひから殲滅するわよ」

仕方なくついていき時間操作で麦野を助ける。原子崩しでの殺人は

してなかつたけど時間操作の恩恵と元から持つてゐる麦野の格闘能力で無双。

「なかなか便利な能力じゃない。これからも私のために頼べしなさい」

なんで?まあ首押せえて手を光らせてゐから従つしかないんだけど。

「私とかなめと滝壺がいれば勝てない奴はいない……っ」

一通さんには勝てないと想づ。

8月28日

海。それは男と女の青春を過ごすために必要不可欠な場所。

そんな青春を送りたいものだよね。ちなみに僕は今海に来ている。

それは問題ない。家族で来ているのも別に不自然じゃがない。たまには遊びに行こうとか言われて言われるがままに外出許可証を貰つた。何故かかなたがついて来たけど、というよりなんでゲスト認証されたのか。まあ謎は説き明かされることはないでしょう、うん。そして両親にかなたの事情を話したらあっさり僕の妹と認めたのも100歩譲つて認めよう。特殊な人だしね両親。

「プールのときより成長してる? いやいや待て、あまりじろじろ見るのも失礼だ… と言つよりかなめは親友だそんな目で見ちゃダメだ。見ちゃダメですよ上条さんんんんん」

なんだか苦惱しているけど当麻、今何て言つた? 小声だつたけどはつきり聞こえたんだけど…?

で、なんで当麻のお母さんがインデックスになつてゐるの? といいつつりなんでインデックスがかなたになつてるの?

で? この御坂さんもどきは何者? 演技? 助演女優賞狙いなの?

なんでかなたがつづちーになつてるの? というか僕は? 僕はかなたにでもなつてるの? 見た目変わんないから良いけどさ。というかあれ? もしかしてこれって僕がかなたでインデックスが僕で… いかん、なんだか混乱してきた。

この混乱は見たかぎり僕と当麻だけでほかの人達は特に混乱してなかつた。

認識がおかしいのは僕たちだけなんだろうか？いや、でも僕も姿が変わつてゐるつてことは魔術にかかるように思ひます。なんだけど。

「あらあら、当麻さんは欲張りなんですね」

チラと見る、インデックス（見た目僕）と当麻のお母さん（見た目インデックス）を何故か父親から守るようになつていていた。マザコンに独占欲が強い、と。それは欲張りだよ当麻。

まずは落ち着こい。落ち着いてどこかに座ろう、いつまでも部屋に入つた状態で立つていたらおかしいからね。赤いキャミソールを着た子の隣に座る。僕が青いキャミソールだから隣にインデックス（見た目僕）が座ればどこの国旗になるだろう。本当にどいつもことだけね。

「おはよっ」

「あ、おはよっおねーちゃん」

ビシッとした音が自分から聞こえたのがわかる。恐る恐る隣に座つていた子を見るとどこからどいつも見ても御坂美琴だった。

「お、おねーちゃん……ね

「ん？ どうしたの？」

「うひん、なんでもないよ」

「ふと、思ひ。自分の両親はどうなつたんだろう? 誰になつたんだろう? 気になるけど昨日。

『あれ? かなめの御学友かい? なら家族でいるより一緒にの方が楽しいだろ? お金を渡すから行つてきなさい。父さん達は父さん達で楽しんで来るから。かなたもかなめの言つことを聞くんだぞ?』

なんて言い残して失踪して行つた。家族の団欒のためじゃなかつたのかといいたいが消えたものは仕方ない。

はあ? と溜息をつき気が付いたら隣にいた子が居なくなつてゐる。あれ? と思つたけど気が付いたら当麻が降りてきていてショート...まあいわゆる知恵熱とか発症していた。

「神城さん、君も着替えてきなさい。海に行こひ

いつの間にか当麻のお父さん、刀夜さんが隣に来ていた。

「あ、はいわかりました」

「当麻も連れていくってくれるかい? 多分当麻の方が準備早いだろ? から場所とりするよ? おまつしててくれるかな?」

「クリと頷くと当麻を治しにいく、治し方は...正義のヘッドバッド。

「いじえ! ?」

おそらく僕の方が重傷だろ? 声すらあげられない。なんて石頭。

頑張つてさつき刀夜さんと言われたことを伝える。

「じゃあ着替えにいりやせ」

そして手を差し延べられる。それを掴み前屈みになり立ち上がった。

「だから親友だつていつてもしようがああああ！？そこに目を向けちゃダメなんですよ上条さんんんんん」

壊れた。まあすぐに立ち直ると思い先に行く。案の定当麻は後ろからついて来ていた。下着が…下着が…って呟きが聞こえた。ビリッと破けた？ご愁傷様。

水着はプールのときと一緒にだ。身体は僕のものじゃなかつたけど。僕の…僕の男としての尊厳、象徴が！？

それを着て外に向かつた。当麻は早かつた。

まあ座つているところの邪魔をするのも悪い、ということで？チラチラと見えている。人物を見ていた。アイドル『――』（ひとつはじめ）とスタイル＝マグヌスだ。何の関連性が有る一人組か知らないけど確か神裂とつちーだつたはずだ。まあ僕には関係ないだろう。海を見ていると当麻の両親とかインデックス（見た目僕）とかかな（見た目つちー）とかが遊んでいた。と言つよりかなた。何その水着、僕もほしいくらいかつこいいぞ。

ハーフパンツタイプにTシャツ。つちーが着てもおかしくない

感じに仕上がつていい。というか下が「ニムタイプなら外出歩けるよそれ。

まあ僕は関係ないし混ざりにいこうとしたら肩を捕まれた。ステイル＝マグヌス（神裂）だった。

「ビ」に行こうのですか？」

「僕の日常に……」

「なら『御使墮し』（エンゼルフォール）を解除してからにしてもらいましょう」

ギリッという音が肩から聞こえる。背中は冷や汗で一杯だ。

「何を言つてるかわからないんだけど……やめてもらえます？警察が見たら捕まっちゃいますよ？週刊誌には大男海岸で暴行未遂ってところかな？」

「大……男？」

「あれ？たしかスタイル＝マグヌスだよね？」

沈黙する、その後ろではアイドルが安堵していた。

「では……何故あなたは入れ替わっていない？」

「入れ替わる？もしかしてこのちぐはぐな状況は君が作りだしたのかな？」

またも沈黙する。

「やはり、貴女が犯人ですね？御使堕しの状況下で影響を全く受けていません。」

「多分受けているはずなんだけどね…これのおかげじゃないかな？」

シャツの下に入れていたネックレスを取り出す。それは銀の細工もない無骨なロザリオ。お近づきの印しに昨日刀夜さんから貰つたものだった。

「クロス…………信じましょ！」

田を見開いてたところを見ると何かすこしものだつたらしく。

尋問も終わつたらしく関係ないよね？とこいつひとで田常に戻る。遠めに見ると田常がセクハラされていた。

頑張れ田常、君の分の幸せ（田常）は僕が堪能しておくから。

8月28日（後書き）

ついに男をやめてしまった

まあヒンゼルフォール中だけですけどね

8月29日（前書き）

よーし！久々に時間が作れた！更新ですよー

そしてですがこの拙い作品を読みグダグダ、駄文といつことで気分を害された方、申し訳ありませんでした。感想の返信も遅れましたが同時にこの場を借りて謝罪させていただきます。本当に申し訳ありませんでした。

そしてこれから改善できるよう書いていければと思います。指摘ありがとうございました。これからもアドバイス、よろしくお願いします。

8月29日

「ちへ、つるりせーな…」

かなたのけだるけな声が聞こえる、隣の部屋はドタバタと喧しい。もう朝のようだ、隣人…当麻の日常（不幸）は今日も絶好調のようだ。

「おー、うめせえから黙らせてこい」

つっちー…土御門の姿をしたかなたが無茶振りをしてくる。口調、顔、双方ともつっちーには出せない迫力があった。つか怖い。

「自分で行つた方が早いって」

「めんべくせえ」

ごもつとも。かなたは一度寝するつもりなのか布団に潜り込んでいた、それとは真逆に寝転がっていた僕は起き上がりつて伸びを一つ、欠伸も忘れずに。

「さて…今何時かな」壁に掛けられた時計を見る、朝7時健康的な時間だろつ。休みの学生にはまだ早い時間だとは思うけど田が覚めたのだから仕方ない。

鞄を漁り着替えを取り出す、今日は下に水着を着て下はデニム、上はパークーというラフな格好でいこうかと思う海行くだろつしね。

着替えは手早くがモットー…てわけでもないけど早く着替え「神城

「…」声がする方を見ると刀夜さんが立ち去っていた。

上半身裸の僕（前は着替えて隠れている）、立ち去る刀夜さん。

「す…すまな」「てめえこりあああああああ…？」インテックスだけじゃ飽きたらずかなめにも手を出さうとしてんのかこの野郎おおお！？」

目の前で当麻が現れて消えて行った。簡単に言つと飛び蹴りで一人とも視界からフェードアウトしていった。

「ひぬせえこりあああ…？」

煩わしかつたのかそのフェードアウトしていった一人に追撃を加えにいつたかな。その一連の出来事に呆然としながら残りの着替えを済ませドアの先をみた。

「何やつてるの？…」

思わず溜息を吐いた、刀夜さんを一番下に当麻、かなた（見た目つちー）の順に折り重なつていた。全員寝ているようだ。

「あらあら、仲良しなのね」

「ハニコと笑う詩菜さん（見た目インテックス）はその横を通り過ぎると階下に降りて行つた。強い人だ。そんなことを思いながら詩菜さんについて下に降りた。

階下に行くとスタイル（親父さん）がイカを焼いていた。

「朝からこつちやうんですか？」

クイッと呑む仕草をすればがははと笑いながら「嬢ちゃんはもひ少し経つてからだな」といい朝何を食べるのかを聞いてきた。

「親父さんのオススメでお願いします」

嬢ちゃんと言われても気にしなくなってきた、そりゃああなたの身体なら仕方ないからね？かなたのせい、かなたのせい。と思いつつ朝ご飯が出来るまで先に座っていた詩菜さんの隣に座る。

「あらあら、当麻さんたらあのまま起きて来ないのかしり…」「めんなさいね、あんな子で」

どんな子だ、と思つたけど様々な奇行を思い浮かべると苦笑が漏れる。間違いなく昨日今日のせいでの当麻はマザロンに認定されると。

「お待ちこ…」

親父さんが御膳を2つ持つてやって来る、朝ご飯らしく納豆、味噌汁等の定番でまとめられていた。

「いただきまーす」

「やうね、いただきまーす」

僕と詩菜さんは一緒に手を合わせ食べはじめる。傍らではテレビを見ながら焼きイカと日本酒で一杯やつてる親父さんの姿が。

詩菜さんと他愛のないことで談笑しながら飯を食べていると当麻の従妹さん、確か乙姫つて言つたかな？が降りてきた、見た目は御坂さんだけど。

「おはよー」

「おはよう、乙姫ちゃん」

あつてたらしく。僕もおはよう、と声を掛け、飯を食べるのを再開する、それを見て乙姫ちゃん（見た目御坂さん）も注文しに行く。親父さんは仕事とけといつて作りにいった。

「1」馳走様

そういうと周りを見渡す、ちょうど当麻、刀夜さん、かなたが降りてきたところだった。詩菜さんと乙姫ちゃんはまだ食べていた、乙姫ちゃんはまだ食べ始めたばつがだつたけど。

「あれ？ インテックスは？」

「あ？ まだ寝てるんじゃねえか？」

僕の間にかなたが答えると3人とも欠伸をして親父さんに飯を頼んでいた、ついでにインテックスの分も頼んでもらつと僕は起こしに2階に向かつた。

ふと、これは当麻の仕事ナシじゃないかって思つたけどまあこじまで来たら今更戻るわけにもいかないので部屋をノックする、返事はない。

「インデックスへ入るよ?」

一応聞いてから開ける、布団でスヤスヤと僕が寝ていた。なんだかなあ…僕死ぬんじゃないかな、ドッペルゲンガー的な意味で。まあかなたのせいで毎日死んでるようなもんだけど。

「どうしたものか…」

起きるーーと言つながら搔うす、まあ定番だね。

「はわあ!な、なになに何事!つてかなめか、驚いて損したかも」

「起」して損したよ、せつかぐ飯頬んでおいたのに

「わーい」

なにもきかず、僕など居なかつたかのように下に降りて行った。せつない。

正午、当麻は夏バテらしくダウンしていた。僕の見解では寝不足とかいろいろ祟つてなつたんじゃないかと。そんな当麻が海の家で休憩しているので僕等（当麻を除いた上条ファミリーと僕とかなた）は海に出でていた。ああ…今間違いなく青春してるんだろうな。主にお守りな気がしないでもないけど。

「かなめ君、ちょっと当麻の様子を見てきてもうつてもいいかな」

「あ、はい見てきます」

心配ならば自分で見に行けば良いのに…と思つたけど、思春期の高校生だ何か思うところでもあるんだろう、きっとね？

そんなことを思いつつ泊まつていた海の家に戻る、看板をたまたま見上げたところ「わだつみ」というらしい。海神または綿津見、海を統べる神の名前が付いていた、まあだからなんだつていわれたら元も子もないんだけど。でもオカルト（魔術）的には名前って重要なじやなかつたかな？靈的なうんぬんかんぬん…まあよくわからないので中に入る。

「あれ？ どつかいくの？」

居間を見るとちょうど当麻と会つた。後ろにはアイドル、巨漢の外国人、赤いシスターさんの3人が控えていた。どこのお笑い集団かと。

「ああ、タクシーでちょっと俺ん家に行つてくる。インデックス頼むわ！」

そういうや否や外に出て行つた、子守を僕に任して。当麻に続くようになつて、外国人、シスターが出て行つた。

「…かなめ、何か気付いてるぜよ？」

口調はいつもと変わらないが顔は良いので何故か凜々しく見える。まあ色々駄目だけね。そんな印象を持ちつつ、どこか鋭い？つづりの質問に答える。

「…本職じゃないからわからないけど、刀夜さんが怪しいんじゃないの？だって当麻は詩菜さんの姿がインデックスになつててテンパつていたのに刀夜さんにはその反応はなかつたし。」

何処かほつけているつづちー、何故氣づかなかつたのかという顔をしている。

「でも、確定じゃないよ？火野だつて姿変わつてないみたいだし…君等の知り合いなら赤いシスターだつてもしかしたら姿が変わつてないんじゃないの？」

「かなめの洞察力には脱帽だぜい、情報感謝するにやー」

実は知つてたんです、なんてことは言えるはずもなく、口を閉ざし手を振つて出ていくつづちーを見送つた。

当麻達が火野を追い掛けている頃、といつかタクシーに乗つたであります頃、僕は海に戻つて当麻が出掛けたことを伝えた。

「知り合ひ…かい？」

「はい、学園都市の友人に偶然出会つたみたいですね、ちょっと出掛けてくるつて言つてましたよ」

まあ間違つてはいない…と思つ。友人だらう、つづちーは。偶然じゃないけど。そんなことを刀夜さんに伝えると困つた奴だな…といつて苦笑していた。

「えー、お兄ちゃんどこか行っちゃったのー?」

「すぐ戻つて来ると思つよ?」

「ふーふーとブーリングしている姫ちゃんを宥めていると、僕の顔  
がふて腐れていた、インテックスか。

「むひ、なんで当麻は私を連れていかなかつたの、最近ちょっと冷  
たいかも」

「僕に言われてもねえ…何だつたら抗議のために部屋のレンジに卵  
でも仕掛けで脅しかければ良いんじやないかな?」

「それは良い案なんだよー帰つたりやつてみる」

「そうこうつと皿をキラキラさせていた、ああこれは…」めん当麻。

そんな年下一人の子守を延々としていた。刀夜さんと詩菜さん…微  
笑ましいものを見る皿をしてないで手伝つてください。

夕方、インテックスと乙姫ちゃんとかなたは詩菜さんと共に買い物に出掛けた。最後くらいはバーべキューでもしようという刀夜さんの粋な計らいによるものだった。タクシーを呼び女だけで行つたみたい。若干男みたいなのがいるけど。

そして、当麻を待つといって残つたのは刀夜さんと僕。それで、今この海の家『わだつみ』にいるのは僕と経営している親父さん達だけ。刀夜さんは散歩に行つてくるといって出て行つてしまつた。

人も居ない、時間を潰す手段もない。暇だつた。暇を持て余していたからか、僕に何か予感めいたものがあつたのか…外を見上げた瞬間、黄昏れは消え去り宵闇が広がつた。

「え？」

不可思議な現象を目の当たりにし、パニックになりかけたけど、ふと思いついた。

「ああ、神の力…だつけ」

ボソリと呟く。じつやら、この異変も佳境の様だ。そんなことを考えていると不意に両手を後ろ手に抑えられ口を抑えられた。感触的に男の手だろう。というかつちーしか居ない。

犯人の目星を付けると耳元に囁くような声が聞こえた。

「貴様、何者だ？なんでこの現象が神の力と知つていい？」

僕の口を抑えていた手を離すと両手で腕を抑えられた。

「…信じてもらえたとも、納得してもらえたとも思わないけど。その質問の答えは知っているから。としかいえないよ」

「全く、かなめは謎ばかりだぜい…」

やれやれといった風に溜息をつく。

「つっちーほど謎だらけな人に言われたくないけどね…」

負けじと? こちらも溜息をついてやる。

「で? なんで僕は拘束されてるの? 僕が術者じゃ無いのは明らかにしたよね?」

「人質にやー」

意味がわからなかつた。何だか知らないけど人質になるの一回目だよ? 僕つて呪われてるんじゃないの?

つっちーはそんなことを考へている僕を肩に担ぎ外に向かつた。

「ねえつっちー?」

「どーかしたか? 寅土の土産に教えてやつてもいいぜい?」

「エン、ゼルフォールだけ? 止め方解つた、の?」

肩に担がれたまま喋るためちょっと揺れるだけで声が途切れる。でもまあ言いたいことはわかるでしょ、日本語だし。

「かみやん家を吹っ飛ばす」

「惜しいなあ、僕が警官、学園都市ならアンチスキルか。そのどつちかだつたらつっちーを現行犯で捕まえられるのに」

今現在捕まってる僕が言つのも何だかおかしな話だけど、まあいいや。

「かなめがアンチスキルだつたら学園都市は無法地帯だにゃー」

そんなことを言いながら笑われる、僕も一緒になつて笑つた。

「あははは、天誅！！」

肩に担がれている状態から膝と肘を思い切りつっちーの身体にたたき付ける。

「甘いにゃーかなめ、バレバレだぜいですよ？」

振りかぶった膝と肘はつっちーが僕の身体を肩から持ち上げることによつて空を切つた。

「うう～…」

「はつはつは、かなめが睨んでも怖くないにゃー。可愛いだけですたい」

その言葉を聞き急にやる気が萎えた、と言つよつもつ諦めた、全部このかなたの身体が悪いんだ。

「やうだよ、肘膝が当たんなかったのも色々間違われると全部かなたがいけないんだ！？」

僕の咆哮。それに答えるのは思にもしない声だった。

「いや、それはかなめのせいじゃねーのか？一卵性だし同じ遺伝子だろ？」

何故か当麻の声が、後ろ向きに抱がれてるので見えないが。

「さて、かみやん俺はまつお手上げだにゃー

ばくざー」と手を挙げて僕を抱きあげた。正直降ろしてほしこ。

「は？…じつじつだよ？原因がわからなかつたのか？」

「いや、原因はわかつたんだけどにゃー……」

言い淀むつちー、流石に当麻の肉親を殺すところのは言つこいくいのかな？いや、つちーに限つてそんな」とはなれうだけじ。

「かなめが犯人だにゃー

途端、当麻の目が見開かれる。つちーに親父じゃないのか？みたいに刀夜さんと僕を見比べていた。

「まあ嘘なんだけどにゃー

「阿保かあ！？」

当麻の右は華麗に避けられていた。その反動でつっちーが僕を落とす。頭から砂に落ちた。打ち所が悪かったのか目の前がぼやけ意識が揺らぐ。それを何とかつなぎ止め立ち上がった。

「こひて…うあ一体中砂だらけだよ」

風呂に入りたい気持ち悪い。まあそんな状況でもないので黙つている。

「じゅあつつかー、やつひゅえば？ハッペーハンドの道筋、出来てるんでしょ？」

「まあ、出来てるひひひ出来てるが…」

「え？じゅあ早く解決しようば？神裂があぶねえ

「じゅあかみやんとかみやんの親父さんとかなめはわだつみに行つててくれ。俺はちゅうと準備することがあるにやー」

そう促されわだつみに入る、取りあえず一階でわだつみの親父さん達と会話でもしてこのことにした。

親父さん達と会話していく、つっかーが遅いとか適当に理由をつけて外に出た。そこには頭から血を流していくつっかーの姿があった。

「かなめ？待つていろつていつたぜい？」

「それが遺言？そんなことより遺言なら上条家に家を吹っ飛ばして  
『めんなさい』って言つたほうが良いんじやないの？」

つっちーは苦虫をかみつぶしたようなよくな顔をした。

「かなめもなかなか冷たいぜい。死に行く土御門さんに何か御褒美  
的なのはないのかにゃー？」

笑うつちー、多分身体は辛いはず。

「どうせ死なないよ、僕が死なせない。」

「邪魔だけはしないでほしににゃー」

「大丈夫、全部終わつたら何とかするから。」

「そつか、じゃああとは任せたぜい？」

そういうと術式が完成したのかつちーの身体が白光に包まれると  
同時にとてもない轟音が鳴り響いた。そして倒れるつちー。音  
に気付き慌てて外に出てくる当麻。ちょうど帰ってきたのかタクシ  
ーが少し離れた車道に泊まりインデックスがてきた。僕の姿じや  
ない。

僕はつちーを時間操作で出来るかぎりの速さで時間をはやくした。  
あとはちよつと帰ってきたタクシーに乗せて学園都市に向かつても  
らつた。

「色々な説明は当麻がしてくれるのでしょ……」

そんな独り言を呟き海をあとにした。

8月31日かなめ

深夜、物音で目が覚めた。泥棒かとも思つたけれど、どうやら僕の部屋からじやないようだつた。

部屋に異常がなかつたからだ。まあ、かなたがタオルケットに包まつて寝てゐるくらいだろう。寒いなら冷房切れれば良いのに。勝手に切ると何故か怒られるから切らないでおくけど。

となると物音は隣人の部屋からだらう。ビリせ当麻と決めつけ一度寝しようと寝転がる。

「…………喉が渴いた」

面倒臭がる身体に渴を入れて何とか起き上がる。冷たい麦茶が入つてゐるであろう冷蔵庫に向かつ。

「天にましわす…」

隣から何か聞こえるけど、まあ気にせずに冷蔵庫を開けた。何に祈りを捧げてるのやら。

「おかしいなあ、昨日の朝に沸かして一度も飲んでないはずなんだけどなあ…」

冷蔵庫には空っぽの容器がしまつてあつた、洗えよ。

仕方が無いので水道水を飲む。カルキ100%美味しいくない。学園都市の技術で外のよりかはずいぶんマシになつてゐらしげけど、美

味しくないんだからしょーがない。

水を飲んでいると隣から声が聞こえてくる、防音対策万全過ぎて泣けてくるね。

「うふふ、うふふふふふ

当麻、何がどうしたの？不幸メーターが振り切った？まあこの時間、この日付、でいくと宿題を何もやってなかつたってところかな？ああ、かわいそーかわいそー

こまめにやらないからこいつなるんだよね？僕は前世で何度もやつて学んできたから宿題は終わってるけど。全部夏休み序盤に。タイムマニアピューレーは偉大だね、どうにかして手に入れたい科学者の気持ちもわからなくなっちゃうからね。

夏休みの宿題が数日で終わる快感。当時はインデックスの事件のただ中だつたけど嬉しかつたもんだ。小萌先生の家だったから学生としての印象は抜群のはずだ。まあ当麻の前でもちよこちよこちよつたんだけど…記憶全部消えてるからねえ、忘れてるのもしようがないかな？

欠伸を一つ漏らすと布団に入る。最終口へりこゆつくつしょー。

明日から9月、学生はほとんどが明日を思い憂鬱になりやる気を無くすか必死に宿題をやっている日。私は宿題もなければ特に憂鬱といつわけでも無く、ただ街に繰り出していた。誰かに会えないかと心待ちにしながら。

「暑いなあ……」

茹だるような厚さに嫌気を指しながらただ通りを「ふらふら」と歩いて、たまに店を覗いては涼みながら冷やかしたりして過ごしていく。

そんなことを一、二繰り返していると見覚えのある、少し待ち侘びた後ろ姿を見つけた、私は小走りで追い掛け肩を叩く。

「かなちゃん、夏休みも最後だつていうのに一人なのかな~？」

振り向いたのは神城かなめ、私の友達。その友達は、何故かメイド服を着ていた。メイド服なのは突っ込まないほうが良いの？

「あ、鈴木さん。まあね僕にいい人なんて居ないし困ったよにはにかみながら連れが居ないことを言つ、成る程かなちゃんもヒマと。」

「かなちゃん今日一人なんだよね？じゃあ私に仕えない？」

「ん……何だか不穏な単語な気がしたけど……今日暇だから付き合つよ？」

言質は貰つたよかなちゃん。そんなことを考え脳内で高笑い、これから何しようかなあ？

まあメイドさんが居るんだからどこに行つても幸せよね？

「じゃあ行こう?私のメイドさん」

そういうと「はうっ」といい落ち込みはじめた、やつぱり自分の意志じゃないんだね？

「ほ、僕は好きでこんな着てるわけじゃ……」

「でも私に仕えてくれるんだよね？」

「不幸だあ……」

失礼な、私はとても幸せよ？

ビリヒリになつた？それが今の僕を表している。

右には佐天さん、左には鈴木さん。何故か睨み合っている。街を歩く人の注目を集めていた。ふふ、僕がハーレムの主になつているからね。…………ごめんなさいわかつてます、女の子が一人メイドさんを取り合つてるんだよね？

「かなめさんをメイドに仕立てあげたのは私ですよ？私のメイドになるべきです」

「あら？かなめさんに逃げられた娘が何を言つてゐるの？それにかなめさんは私に仕えてくれるって言つたの」そんなことは言つてないし僕はメイドじゃない。いや、服はメイドだけれども……だいたい佐天さんは何で僕に着させたのか？……普通に似合つやうだからですけど？つて言われそうだ。

「聞いてるんですか？かなめさん！」

佐天さんの声を聞いてじんわり逃避しかけていた思考を戻す。

「う、うん聞いてるよ?」

「じゃあかなちゃんは私との子、どちらに仕える?」

仕えないから。やつこいつと同時に一畠散に逃げ出す。

「いらっしゃん待ちなわー!」

「かなめさん!逃がしませんよー!」

一人して追い掛けてくる。うわーい、女の子が一人も僕を追い切てるよ?…辛い。何でこいつなってるんだろ?一人して僕をこき使いたいだけじゃない。捕まつてたまるか。全力で走り路地裏を通り抜け小道に入りどうにか撤こうとするが一切距離は開かない。佐天さんは居なくなつたみたいだけど。

「かなめさんストップですよー!」

ドドーンという効果音が似合いそうな感じに佐天さんが僕の目の前に「立ちはだかっていた。

前門の佐天さん後門の鈴木さん、万事休す?

「先程、さやかさんと話しあつたんですよ?争わずに共有財産にしようつてねえ?」

「ええ、やうなのがかなちゃん

「ハニコと笑う佐天さんと鈴木さん。といふか鈴木さんの下の名前初めて知ったよ。

何て余裕ぶつてる暇は無くジリジリとにじり寄る一人。僕の負けは明らかだった。

「お嬢様、何で僕の家何でしそうか？」

二人に負けたあと、何故か僕の家に来ていた。おかしい。

「そりやー決まってるじゃない、ねーさやかさん」

「ねー」

仲良いのか一人ナイスコンビで僕をおちょくつてるのか、まあ後者だろうけど。とにかく二人の相性は抜群のようだ。

その二人は僕のクローゼットの服（自費は無し）を取り出しては分け取り出しては分けを繰り返し服の組み合わせを作りまくっていた。なんとか見覚えのない服が見えているけど気にしちゃいけないんだろ？

ピンポーン。家のチャイムが鳴り響いた。

「かなめ~いるかにやー？」

「おぬこや？ ただ出でないのは僕に余つのが恥ずかしいからやんな？」

ドアに付いているレンズで外を見ると前でたむりじていたのはつちーと青ピだつた。何だろ？ とても出たくなくなつた。

「出ないんですか？」

佐天さんが後から声をかけた。仕方ない。

「はいはーい、只今多忙につき」

「か、かかかかかなめーとつとつ僕にあんなことやこんなことを奉仕してくれ」「気持ち悪つー！」

バタンとこう音とともに田の前から青ピの姿が消えた、佐天さんが辛辣な一言と共にドアを閉めたからだ。

ピンポーン、もう一度なるチャイム。またレンズを覗くとつちーだけが写っていた。

ドアを開ける、青ピが不法侵入、佐天さんが反射的にビンタしていった。

「あーーー、『めんなさい』つい」

「しうがないにやー、今のはヒセ関西人が悪いぜよ。かなめ、お邪魔するにやー」

「やうやう、あまり気にしないでいいよ佐天さん。いらっしゃつ

「つちー。バイバイ青ピ

「なになに？何の騒ぎつてん」の青いの向つ？・気持ち悪つ

佐天さんの物理的なダメージから始まりつちーの軽いジャブ、僕のジャブときて奥から姿を見せた鈴木さんの強烈な一撃の元青ピは玄関で泣き崩れていた。

泣き崩れている青ピを放置、部屋に入り各自好きなところに座った。

「もういえぱビーハしたの？何か用でもあつた？」

女の子が居ることが多少嬉しいのか浮ついているつちーに聞く。

「んー？かみやんが俺達を裏切つたからかなめのどこの押しかけにきただけだぜい？」

「裏切つた？なに？女の子と遊びにでも行つたの？」  
つちーは「クリと頷くとため息をついた。

「常盤台の超電磁砲だにゃー…かみやん絶対に許さ」「え！？超電磁砲？レベル5じゃない、かなちゃんの友達つです」このね

鈴木さんがつちーに割り込んで何故か僕に抱き着きながら言った。  
抱き着いた意味はわかんないけど。でも女の子空のハグとか初めてだ、やわら…いや何でもない。

「そうだね、友達は凄いよいろんな意味で」

何たつて最強に勝つんだから、凄いに決まつている。あとフラグ

男としても。…………妬ましい。

「その、かみやんって人は前に見た隣の髪がツンツンの人ですか？」  
首を傾げながら思い出すように佐天さんが聞いてきた、そりいえば一度見てたね。

「そうそう。ねえ鈴木さん？そろそろ離れない？暑いって」

今だにハグを続ける鈴木さんに離れてもううよう言つと次々離れて行つた。僕が言うのも何だけど、メイドさんは愛でるものとしてほしい。いや鈴木さんとか佐天さんからしたら愛でてるのかもしれないけどさ。

「かみやんさん…凄い、私とは大違ひだあ」

佐天さんが自嘲氣味に呟いた、僕以外には聞こえないくらいの声量で。またまた隣にいたから聞こえただけだし、もし鈴木さんがまだ僕に張り付いてたら鈴木さんにも聞こえてたはず。

「佐天さん、当麻は…かみやんって言つた方がわかりやすいかな？かみやんは無能力者、不良、駄目人間だから別に凄くはないよ？ただ御坂さんと縁が合つただけじゃないかな？僕だつて御坂さんとは知り合いだし、佐天さんだつて友達でしょ？」

「あはは…でも、ありがとうございます何だか自信が出ました」

僕が頷いて一安心とため息をつくと鈴木さんがニヤニヤしていた。

「かみちゃん？さすがメイドね、お嬢様の変化にすぐに気づいて

なおかつ対応するなんて。メイドの鏡とこいつても過言じやないわ」「過言だよ、それに男にメイドが務まつたまるか。といえたらどれだけ楽なのか、言つたら言つたで鈴木さんと佐天さんから冷たい目で見られることが濃厚だけど。

そんなことをやつてこいるうちに佐天さんと鈴木さんが帰つて行つた、これでやつとメイドから解放される。そう思つてこいると不意に携帯が鳴つた、発信者は…かなただつた。

「もしもし」

8月31日かなた

30日の夜、俺は外から帰ってきた。部屋の電気は消えていて姉のかなめは寝ているか出かけているんだろう。あ？兄貴だつたか？まあいい、とりあえず今この部屋で動いてるのは俺だけ。なんてかなりどうでもいいことを頭から追いやる。外から帰ってきた俺は冷蔵庫を開ける、あまり自由に使える金がないから飯は極力家で食うようにしている。

「何を食おつかねえ」

そう呟き適当に食材を出していく。が冷蔵庫の隣の棚に良いものを見つけそれを手にとった。それはレトルトのカレー。

「たまにはレトルトも良いやな」

呟きながら皿に保温してあった白米を盛る、その上から冷たいカレーをかけラップもせずにレンジにほうり込んだ。温めている間に出した食材をしまづ、そのついでに残り7割くらいになっていた麦茶を出した。これを見るに俺が飲んだ皿からかなめは飲んでいないんだろう。

麦茶を「ツップ」に注ぎ一杯飲む、もう一度注ぐ。そうしているとチーンと言う音がレンジから聞こえた。スプーンを持ち皿を取り出すと移動するのも面倒なので台所のシンク棚を背に座りカレーを食べはじめた。

「おお以外と……」

うまいと思い箱を見る。『ザ・カレー』激烈な辛さを君に』それを認識した瞬間猛烈な辛さが俺に襲い掛かってきた。良い度胸だ、ぜってえ完食してやるよ。麦茶を飲みながら格闘していた。

15分ほど食事をしていただろうつか？俺はカレーに勝つた、相棒のリッター容器に入った約700mlの麦茶とともに。その戦友は俺に癒しを与えたづけた結果、無き者となつた、だから忘れないためにもそのままの状態で冷蔵庫にぶち込んでおいてやつた、洗わずに。明日の朝、かなめが麦茶を沸かす姿が容易に想像できた。使いやすい冗談だ。

満腹感と達成感に満たされた俺は台所から部屋に移動した。勿論皿は洗つてやつた。自分で使つた食器ぐらいは洗つてやらないとな。そして自分の宛てがわれた寝床に転がる、暑い。どうしてこいつはこんな暑いところで寝られるんだ？かなめの顔を見ると暑そうにしていなかつた。こいつは何かおかしい。本当に冗談なのだろうか？姉と言わた方がまだ信用できるくらいには女顔だつた。

俺も同じ顔だが、間違われるので髪型は違う。かなめは腰まである長い髪だが俺はショート、違いは一目瞭然だつた。まあ俺が髪を伸ばすとかウイッグを被るとかすればわかんねえかもしないが、する予定はない。いろいろ脱線したがこいつは訳がわからぬ奴ということだ。辛いものが好きだつたり暑さに負けなかつたり。同じDNAか怪しくなつてきたが間違いなく同じもの。でも性別は違う。  
……じつは他人だろこいつ。

まあいい、とりあえず冷房を強めに設定しタオルケットに包まる。冷房を効かせて布団に包まるのつて良いよな。そんなことを思いつつ眠りについた。

朝、麦茶の香で田が覚めた。やっぱつ、と懶て起き上がる。

「かなた、飲んだら洗えとは言わないから冷蔵庫から出しておこへよ」

苦笑しながらやかんから田を俺に向けた。それに「わらい」と返すとタオルケットを置んで置いた。

「朝は？ 何か作ろうか？」

「ああ、適当に頼むわ」

欠伸をしぐれをつけるが面白やつな番組がなかつたので消した。するとピンポンpongという音が聞こえた、家のインターホンだろつ。かなめが料理中とこいつとで俺が出ることにした。

「あ、あのーんにちは。かなめさんいますか？」

黒髪で花の髪飾りを付けた女が立っていた。こいつも髪が長い。かなめほじりやないが、背中にかかるている。

「ああ、かなめなら今料理中だ。まあ何だ、上がれよ」

「あ、お邪魔しまーす」

とりあえずかなめの知り合になら良いだらうと思ふ家にあげる。

台所を通る際にかなめが驚いていたが知らん。

そして調度出来ていた朝食を取ると俺は家を出た。その際に女の名前を聞いた、佐天涙子か。

家を出た俺は日課になつたジャングルジムに向かつた。理由はわからないが一日一回行かないといライライする。まるで麻薬の様だが、散歩にもなるし健康にいいのは間違いなかつたから続けていた。

30分、それだけの時間を景色を眺めることに使う。今日は天氣がいいので富士山が見えた。

「おい、ねーちゃん今日はなにやるんだ？」

「ああ？ んだよてめーら俺は忙しいんだよ」

声をかけられジャングルジムから見下ろすとガキンチョが5人いた。ここに住むだいたい毎日会う顔だった。

「忙しい奴はジャングルジムに何か乗つてボーッとしないぜ？ なあみんな」

ウンウンと頷くガキども。良い度胸だ。

「よしでめーら今から追い掛けでやるからにげりよ。捕まえた奴から飛びぼりにしてやるぜー！」

言つと同時に逃げはじめるガキども。俺はジャングルジムから飛び降りるにせりと笑い追い掛けはじめた。

「はつはつは、全員ズタボロだなあこのやろー」

今、俺の目の前には疲れたのかガキども5人が息を切らせて転がっていた。だがその顔は全員笑っていた。

「もう3時か…てめーら遊びすぎなんだよ。俺は疲れたし飯食つてねーからもう行くぞ、てめーらはかーちゃんからおやつもらつてろ」

じゃあなといい大通りに向かつて歩きだした。後ろからは「待たなねーちゃん」という声が聞こえたので後ろ向きに手を挙げて返した。

3時過ぎくらいだろうか?ピークを過ぎたファミレスに見覚えのある顔を見つけて今日くらいは良いかとファミレスに入つて行つた。

「おい、一方通行。おまえ口リコンだつたのか?」

「あア?」

「ひえつまさかの自殺志願者にミサカはミサカは戦々恐々

声をかけると一方通行は睨みを効かせ、もう一人のぼろ布を纏つた女のガキは言つていることと顔が一致していなかつた、何で自殺志願者が現れると顔をキラキラさせるのかわからねえ。なんて考えながらとりあえず空いていたガキンチョの隣に座つた。ガキンチョの前には既に料理が並んでいた。ちょい冷めてそうだが何故か食つていなかつた。なるほど、一方通行のがくるのを待つてゐるんだろう。

「……日本じゃあ人身売買は違法じゃなかつたか？ああ、ここのは学園都市か？」

「どうちにしても違法だうがア。それにこいつはかつてこいつで来やがつたンだよ」

「ガーン！？ミサカはミサカはこの人とまともに話せる人がいることに驚愕してみたり」

こいつらのせえな、よく話してられるもんだなと一方通行の顔を見た。一方通行はちょうど料理を持ってきていた店員に顔を向けてそれ俺ンだといって目の前に置かせていた。

「店員、俺はこれだ」

そういうてハンバーグのセットを頼んだ。セットで600円は安いのか？定価がわからねえから何とも言えないと。

「まあ先に食えよ、冷めてんぞ？食わねえなら俺が手を伸ばすとガキンチョは慌てたようだ。

「わーーこれはミサカのあなたのは後から来るつて既にレタスが一枚減つてるーーつてミサカはミサカは涙目になつてみたり」

「その隙にフライドポテトも減つてたり」

「つづ、酷いと!!ミサカはミサカは妬にいびられる嫁を演じてみたり

何を言つたか、主菜を取らないやせしさを見せつけてやつたのによ。

「うぜえ」

一方通行のドスの聞いた声と睨みそれをみた俺とガキンチョは。

『「Jめんなさいー!』

二人が仕種と声を同じに一方通行に謝つていた。

いつまで経つても俺の料理が来ないので店員に文句とトイレに行っている間に不思議なことが起きた。一方通行とガキンチョが居なかつたのだ。

「置いてかれたか?」

食べかけの一方通行の料理とガキンチョの料理を見て首を傾げた。途中で出て行つたのか?

まあせつかく料理を頼んでるので食べてから出た。伝票が無いことから一方通行が払つてくれたんだろう、そこだけは感謝だな。

午後6時半過ぎに俺の携帯がなつた、その発信者は珍しいことに一方通行だった。あいつから連絡があるなんて奇跡の一つだろう。そんなことを思いながら電話に出た。

「なんだ?」

『オマエ、あのガキを知らねエか?』

「ああ? 知らねえな、つーかおまえと一緒に飯と俺を残して出てつたんじやなかつたのか? 御蔭で一人淋しく食つてたんだぜ?」

『そオかよ、オマエもガキを探せイイな? 見つけたら連絡しろそれ以外で連絡していくンじゃねエぞ』

ブツツと電話が切れる、一方的過ぎるだらう、まあアイツの珍しい頼み事だ探してやるとするか。

探すとなると人手は多い方がいいだらう、姉もとい兄貴に電話をかけた。

『もしもし?』

「御坂美琴つているだろ?」

『うん』

「そいつを小さくしたようなガキを探せ、すぐにな」

『わかつた着替えたら「すぐにだ」うう…わかつた』

とりあえず人手は増えた訳だ。

『つつちー、青ピ、今日は解散ね。じゃあねかなた、見つけたら電話するよ』

「ああ」

電話を切ると少し能力を使い走り出した。体感時間は通常の半分になっていた。

8時頃一方通行から連絡があった。何でもガキンチョーが見つかったらしい。場所を聞いて最高速度で向かうとそこには兄貴も居た。連絡もしていないのによく見つけたものだと感心した。

だが様子がおかしい、一方通行は汗でびっしょりになつてガキンチヨの頭に手を置いているし兄貴はメイド服で…まあそれはいい、どうやら時間操作をしているようだつた。だが双方とも集中していて俺に気づいていなかつた。

その時、がさりという音が聞こえた、スポーツカーから這い出して黒光りした銃を持って一人に歩み寄る存在を認知した。アイツが何をするのかわかつた瞬間、俺は能力を全開にして銃を蹴り飛ばした。そのまま顔を蹴り、腹を蹴りボコボコにしていると不意に肩に手を置かれた。兄貴だつた。

「もう充分だよ」

そう聞くと俺は能力を解除した兄貴は青い顔をしていた。自分と一方通行、両方の時間操作をしたからだろう。兄貴はまた集中を始めた。それを俺は只見ているだけしか出来なかつた。

でも、間違いないこのガキンチョーは救えるだろう。だから俺は安心してボコボコにしたオッサンの車で寝ることにした、勿論オッサンはトランクにほうり込んであるし武器もマガジンを引き抜きマガジ

ンはテキトーに全力で投げ捨ててやった。

運転席に座りリクライニングを寝かせ目を閉じた。

8月31日かなた（後書き）

うーん、一通さんの頭を破壊しない方向だけど大丈夫何だろうか？

8月31日

かなかから連絡があつたのは6時30分過ぎだつた、何故か知らないけど打ち止め（ラストオーダー）を探してくれつていう電話だつた。……打ち止めで良いんだよねかなた、名前とか全く聞いてないけど。何だか先行きが不安だけど仕方ない。

「それじゃ、俺達は帰るぜい。といつても俺はすぐそこなんだけどな」

「まあつづけーはねー、青ピはパン屋に下宿してんだけ？」

「覚えててくれたんやね、そりなんよそこの子がめっちゃかわええんやで～。あ、もちろんかなめも最高にかわええから嫉妬せんといてなー」

青ピに話しを振つたのが間違いだつたかもしれない、誰が可愛いとか聞いたのさ。まあ青ピが話してるうちに財布とか携帯をポケットに入れる、これでいつでも出れるメイド服なのがやだけど。

「それで外、出るのか…？」

つづけーが呆れたふうに聞いてきたけど「察して」と一言つひと句とも言えない顔になつていたので察してくれたんだろう。

とつあえずまじめにしているとかなたに怒られそうなので外に出る。

「じゃあね」

その一言で一人と別れた。青ピはまだつちーの所で遊んでいくようだった。

打ち止め探しということで打ち止めの場所は大体わかつてた。超能力者『超電磁砲』の量産型能力者の開発を行つていた施設跡地。

その施設跡地の場所も、僕が知らずのうちに関わつてた計画を調べているうちに知つてたのでそれほど急いでなかつた。早く着いた所で僕じゃあ何も出来ないし、だから時間操作はせずにゆっくりと目的地にむかつて歩いた。

途中、影が物凄いスピードで僕の進む方向とは真逆に走つて行つた。僕に気づかなかつたみたいだけどかなただろう、ご苦労様と心の中で呟く。焦つたかなたを見てものんびり歩いていた。

僕が施設跡地に着いた時にはスポーツカーは止まつてたけど誰も居なかつた、僕が一番乗りらしい。何だかなあと思いながらスポーツカーに寄つて行つた。

「すみませんけよつと良いですか？」

コンコンと運転席をノックするビビッたような動きを見せた天井亜雄がいた。精神的に追い詰められてるんだろう。

「な、なんだ！ わ、わたしは忙しいんだ」

「あ、すみません。少し場所を教えてもらいたくて」

すると天井は安堵したようで何だ?と聞いてきた。

チラリと横目で自分が歩ってきた方を見る、一方通行が歩いて来るのが見えたのでそれを『ごまかす』ようにポケットを探る振りをした。

「あれ? すみませんメモ無くしてしまったみたいで……打ち止めつてどこにいますか?」

間を置いて後半部分を言った直後、能力を使い開いた窓に手を入れ鍵を開ける、ドアを開けると引きずり降ろした。その間0・2秒。正直少しでも抵抗されてたら降ろせなかつた、貧弱な自分が嫌になる。

「へH」

僕の行動を見ていたであろう一方通行が感嘆の意を示していた。その一方通行が延髓を思い切り蹴つっていた。天井、ご愁傷様。

「で、見つけたは良いけど何するの? 僕何も聞いてないんだけど」

「つるせH」

理不尽だ。

一方通行は電話しているので僕はその電話を聞いていた、説明が面

倒だつたらしく僕にも聞かせる様にしていた。

その途中で打ち止めが意味不明な言語を話し出したりしててんやわんや。まあ事情は全部知ってるんだけどね。簡単に要約すると。

打ち止めにはウイルスコードなるものがインストールされていて、それが発動するとミサカシスターZが暴走して猛威を振るうという物。

それを除去するには打ち止めを殺すかウイルスコード自体を改竄し正常な状態に戻す、とか。正直わからないといふことがわかつたくないだつたけど、まあ僕自身何も手伝える事は無いしね。

それで今、一方通行が打ち止めの頭に手を当て改竄し始めた。

僕は打ち止めに時間操作を行い起動までの時間を遅くし、一方通行にも早く改竄し終えるように操作した。

初めて多数を目標に時間操作をしたけどこれが辛い。動く気にならないし汗も勝手に出てくる。

そんな作業を始めてすぐ、物音が聞こえると打撃音が続いた。その方向に顔を向けると天井がボコボコにされていた。一瞬迷つたけど、ボコボコにしてるのはおそらくかなただろう、人殺しさせたくないため無理矢理自分に時間操作をかけた。頭がパンクしそうだ。

フラフラと歩きかたの肩に手を載せてこちらに振り向いた、ずいぶんキレイているようだ。

「もう充分だよ」

そういうと黙が悪そうな顔をして「ボコボコ」するのをやめたので自分の時間操作だけをやめまた一方通行の傍らにもどった。チラチラとかなたの方を見てるとかなたは天井をトランクにほうり込んで転がっていた銃からマガジンを抜き投げ捨てていた。普通逆だらう。

マガジンを投げ終えると小憎らしげことに車のリクリエーニングで寝はじめた、何かやろうよ。どっちらかの時間操作を肩代わりしてくれてもいいんだよ?ああ、出来ないつけ?

なんて思つていると作業が終わつたらしい、打ち止めの口が動き始めた。

「コード0000001からコード357081までは不正な処理により中断されました。現在通常記述に従い再覚醒中です。くりかえします」

止められたらしい、止まるわかつていても安心出来ないのは僕にとってこの世界がリアルだからかもしれない。なんて思つていると後ろから叫び声が聞こえ振り返つた。天井だつた。

「あ、はは、う、あああああああああああああああああああああああ!?」

その手には銃が握られていたが別に怖くはない、さつきかなたがマガジンを抜いていたから。

しかし、ダアンという音が鳴り響いた。そのとき、衝槍弾頭ショックランサーが僕の左胸辺りを食い破つた。その弾は射線上にいた一方通行にも向かっ

ていた。当たる事はないと思っていたが、弾は額に飲み込まれて行つた。

「な、んで…」この時の僕には知ることはなかつたけど、一方通行にはまだ僕の時間操作がかかつてた、だからこそ反射すると銃弾が僕に当たるのがわかつていただろう、慌てて演算をしたらしいが間に合わなかつたということらしい。ちなみに銃に弾が残っていたのは仕様らしい、マガジン抜いただけじゃダメだつたんだね。

ともかく、僕は崩れ落ちる寸前にかなたが走つて寄つてきていたのを他人事のように見ていることしか出来なかつた。まったく、なんて夏休みだよ。

ダーンという音に驚き急いで運転席から出ると、そこには銃を持つ俺がボコボコにしたオッサンと、崩れ落ちる兄貴と一方通行の姿があつた。何が何だかわからなかつた、ただ兄貴と一方通行が危ないということはわかつた。すぐに駆け寄る。兄貴は左胸、一方通行は額が撃たれていた。

「あ、ははははあは？ 反射されてない？ あはははは…？」

狂つた声が聞こえる、その声は不愉快だ。睨み、いつでも「コイツを殺る準備だけをしていた。いつでも、いける。

そんなときまた発砲音が響いた、撃たれた？いや、あいつからじやない。誰だ…？そう、辺りを警戒していると、目の前のオッサンが崩れ落ちた、さつきの発砲音はオッサンの腹部を撃つた音らしい。崩れ落ちたさきに白衣を着た女が立つていた。コイツも知らない奴

だ。

「テメエは…？」

「そんなことより早く医者を呼びましょ」

その女は手早く電話を取り出すと一度電源ボタンを押していた、もしかしたら一方通行と電話してた奴かもしない、GPSでここまで来たんだろう。そのまま通話していくすぐに救急車が来るらしい。

安心したらへたり込んじました。

そのあとの一ことはあまり覚えてねえけど、途中オッサンが起き上がりうとしたのを見て思い切り蹴り入れて黙らせた。後は救急車が来ていつしょに乗って病院に向かったらしい。救急車で寝たらしくいつ着いたかわからなかつた。

9月1日（前書き）

遅くなりまして申し訳ありませんでした。久々の更新一ヶ月以上あ  
いたかな？やつてしまつた感癖になんないといいけど…

言い訳やらなにやらは後書きで

9月1日

結局、兄貴は治らずに入院した。一緒に撃たれた一方通行と一緒に蛙みたいな顔をした医者のところに居る。

兄貴は命に別状はない。意識は無いけどそれは失血からくる貧血が原因らしい。

一方通行も一命は取り留めたけど着弾が頭だからまだ予断は許されない状態だといっていた。

それ以上の事は聞けなかった。

そんな中一人無事だった俺は何をしているかというと…

「え？ かなた居ないのか？… 参つたなあ」

目の前で頭をガシガシと掻いて悩んでいるのは上条当麻、あろう事か俺にシスターの子守しろとか言つて来やがった。

「うん、かなた友人が出来たみたい何だ、そこに行くって」

そろそろ氣づいてる奴もいると思うが今俺、神城かなたは兄貴、神城かなめの振りをしている。俺のせいで怪我をしたんだ、出席日数くらい稼いでやらないと。

「そつか、悪いな朝から変なこと聞いて」

「いや、大丈夫だけど… 時間大丈夫？」

上条はやべえ！と、いつと家の玄関から飛び出していった。俺は既に着替えも準備も出来ているから外に出で上条を待つてやった。

「…悪い！待つてくれたのか」

「まあ、隣だし」

実は待つてたのこは理由がある。俺、学校の場所知らないんだよ。

「じゃあ行くか」

当麻のそれにつんと答えると隣に並んで歩きはじめた。

（何か不幸続きな学校生活を覚悟してたけど、幸先いいんじゃねえか？）

「ん？顔になにかついてる？」

さつきからちらりちらりと見てくる、一応兄貴と同じにならひにカヤシグ被つて来たんだけどな、ズレたか？

「い、いや何でもねえ」

そんな焦つて首振られてもなにがあるって言つてるとしか思えねえよ。

駅に着いたらトイレスの鏡で確認するか。

「はあつはあつ」

何でこうなった。朝からマラソンとかふざけてやがる。あのカラス焼鳥にしてやる。あ？何が起きたかって？カラスが線路上に石を置いていつたらしい、そのおかげで電車が止まって上条と俺は走っているわけだ、ふざけんなこのやう。

時間操作でもいいけど上条を置いていくのが心苦しい、だから使わずに付き合っているんだけどよ…しんどい。

「ぜえっはあつ。か、かなめ、先に行つてていいぞ」

「ふうつふつ。い、いいよ。つきあつうつて

そんなことより疲れたもういいんじゃねえかな？兄貴、俺じゃあ力不足だつたみてえだ。何て思つていると少し前を走つている上条のポケットからなにか落ちたのが見えて止まつた、財布だつた。あいつは…何を落としてんだよ…。と呆れながらも拾い自分のポケットにしまうと前を向いた。

「朝からおせかんですねー」

50メートル前方位で御坂美琴と騒ぎながら走つていた。…むかつく。何がむかつくって人が財布というライフラインを拾つてやつてるうちに楽しそうにしているのがむかつく。というわけで時間操作を使い一人に追いつく。

「おはよう御坂さん」

「あ、おはようかなめさん。かなめさんも『トイツの不幸に巻き込まれたんですか？」

「セツセツ、だからこれで美味しい物でも食べてもいいんだ。

隣で走りながらポケットをまさぐつてえつあれ？不幸だーー…?とか叫んでる奴がいるけど気にしない。むしろ拾つてやつたんだから感謝されるべきだ。

「へへ、じゃああたしもそれ良いですか？」

「ヤーヤしながら俺に聞いてくる、それに勿論と答へるとまた隣で不幸だーー…?とこつ声が。

「当麻朝からひるせい、近隣の人々に迷惑だよ?」

ず〜んといつ効果音を発しながら俺と御坂と上条は学校に向かつた。正直疲れてヤバい。

「え〜であるからして…」

やべえ、超眠い。始業式の校長の話しがこんなに長くて辛いものだつた何て知らねえよ。隣にいるはずの上条もいねえし…これ見越して始業式ぶつちしたんじやねえだろ?」

そういえばさつきのホームルームはなんだつたんだ?・転入生の影が

薄すぎる。といつよりその前のインテックスに全部食われた感じだな。まあ俺が気にすることじゃねえんだけどな。まあかなめに伝えといった方がいいか転入生姫神だけか？

学校が終わりさて帰るかといつとき上条が声をかけて來た。

「かなめ、このあと遊びに行かないか？」

「あ、『めん当麻』のあと用事があつても。またこんど誘つて？」

「あ～わかつたまた明日な」

とまあこんなやり取りがあった。遊びに行くのはすげえ魅力的だけど兄貴に成り切つてる状態だと疲れるしな、それに兄貴の様子を見て起きたからな。

「うん、じゃあね当麻」

そして学校をでる、後ろがなんか騒がしいが気にしねえ。当麻の声とか聞こえねえからな！ちょっと心が揺れてたのは秘密だからな！？

駅に着き電車に乗り込む。他の学校も始業式だから昼までなんどう、結構人が乗っていた。

「あれ？かなめさんだ、初春～」

ん？名前呼ばれたか？と思い振り返ると佐天と花満開な奴が居た。初春っていうらしい。

「ん? どうかした?」

「いえいえ、ちょうど見かけたので」

「Jのあと一緒に出かけませんか? もう少し非番なんですよ」

またが、すげえ引かれるのにいけないジレンマ。兄貴何なんだよ。  
「んー、じめんちょっと今日は用事が…また今度で良いかな?」

「あつーわかりました今度白井さん達もよんで行きましょう」

「おつ初春にしては良い」と囁く

「それひどいことですか!」

青春青春。俺は兄貴が復帰するまで青春を堪能できるのか…正直ジ  
ヤングルジムにいつてないから落ち着かなくなつてきた。

「ん、駅に着いたね、じゃあ僕は行くね?」

「あ、はい」

電車のドア越しに手を振る、ドアの向こうの一人も手を振っていた  
電車が見えなくなると改札を抜け家に向かう。

「暑い…やつと家についたか…」

家に入ると冷房の電源を入れウィッグを外す。蒸れて辛かった。  
汗が酷いな…風呂でも入るか…

9月1日（後書き）

言い訳タイム！

予定

プロット作成する 話しがある程度まとまって余裕ができる アクセスも増えて名前が売れる 彼女ができる

現実

プロットを携帯のデータに入れて作成する 携帯をなくす 話しが更新されないのでアクセスが増えない いくえ不明

しかもプロット三回作って三回消えるという不幸属性を持ち合わせ最強に見えた俺に隙はなかった。

もうプロット作成するのは諦めました。フラグとしかおもえなくて嫌になった。

もう携帯ロストしたくないです。

そんな自分は9級ブロンティスト。なんかブロントさん関係で書いて見ようかな…

9月1日

風田の描写？変態がふざけたこと言ひてんなよな！？

とりあえず家でゆつくり昼飯を食つた後、冷房の聞いた幸せな空間を後ろ髪引かれる思いで泣く泣く後にした。冷房つけっぱだけどな！電気代？兄貴が払つてるからいいだろ、うん。

ブラブラと歩きながら病院を目指す。行く前にジャンブルジムにゅつて行く。公園には誰もいなかつた。

「誰も居ねえ何て珍しいな…まあゆつくり出来ていいか

今日は短めに景色を眺め病院に向かつた。やっぱあそこ落ち着くな。病院につくと受付に声をかけて病室に向かつ。病室に入ると兄貴は起きていでこつちを見ていた。

「ん、かなた。お見舞いでも来てくれたの？」

「一応…俺のせいだしな…」

「うん、ありがとう」

sideかなめ

どうやら僕は一日入院するだけで出れるよう、もう退院できた。さすが冥土帰しといわざるをえな。

かなたが今日学校に行つてくれたらじっくり報告ついでの雑談となつて居たけど出るよつて言われたので病院を出た。なんだかんだで夕方になつていた。

「ん~ご飯でも食べに行こうか?」

「お、いいなそれ。じゃあ学食食ってみ。あるんだ? 学食レストラン」

無いこともないナビ…あれ? 今日はなぜかで当麻がドンパチやつてなかつたつけ? やつひた気がする。

「…………ちよつとまつてね」

携帯を取り出して学園都市のマコースを見る。残念かなた学食は諦めた方がいい。

「はいかなた」

携帯を見せる。そこにはこう書いてあるはず。『地下街で謎の爆発? 地下街はアンチスキルが封鎖中』みたいな感じのことが。

「んだよ、朝からホントついてねえな… 飯も思つたとおりに食えねえのかよ…」

「まあまあ、今度にして今日は他のところに行こう!」

そういうとかなたは舌打ちしながら歩き出した。それにつづくと大通りの方に向かう。そこで適当にご飯を済ませてしまおうという魂

胆だ。

「おこ、あれ食おつせ?」

そしてかなたが指差したのは『巨大ピザ食べ切ったら賞金あり』といつものだった

「さて何食べよっかー」

「おこ、無視してんじゃねえよーあれだつてー今なら行ける気がすんだよ」

「絶対氣のせいだつて!僕より食べないのに何書つてんのー。」

何とかかなたを説得するとその隣の店に入る。ラーメン屋だ。

「ラーメンーつと」

「チャレンジラーメン」

ギュンとこう擬音が聞こえそうな位の速度でメニューを見直す。何で右下にひつそり書いてるの?田玉なんだからもつと田立つといつに書いておひつよ。それと外にもや。

首をあげると店員はオーダーを取り終わったからか去つて行った後だつた。

「かなた…」

「任しだつて、今ならホントに行ける氣がすんだつて!」

絶対無理な気がする。取りあえず僕のラーメンが先に来た、当たり前か普通のだし。先に食べているとかなたのも来た。麺2kgありますいけど…

「かなた？」

「…正直悪かつたと思つてゐる。まあ物はためしだいくぜー。」

その後、かなたの姿を見た者はいなかつた。

「1／4位しか減つてないんだけど」

「食いきれるわけないだろ常識的に考えて」

「じゃあ頼まなきやいいじゃん…」

なんでこんなに無鉄砲なんだ…絶対僕とDNA違うだろ…

「男にはな…やらなきゃならねえ時があんだよ」

「それ絶対今じゃないし、それにかなたは女でしょ…」

チラリとメニューを見直す。さようなら2000円。高いなあ…

会計を済まし外に出る。計2650円になりました。経済事情的に大打撃。

「いや～食べた食べた、もう当分麺類はこらねえな

「ナリコのは食べきつてから言つてね

横を歩いてるかなたを睨みながらため息を一つ。当の本人は満足そうに笑っている、反省はしていないようだ。今度はかなたに会計させよ。

「よつしゃ、じゃあどうか遊びにこりやー。」

「一応僕今日退院した身なんだけビ…」

「ゲーセンにいりやがーセン」

話しを聞いてほしい、切実に。まあかなただしそうがないか…。いやいや、しうがないって何？僕が兄でかなたが妹僕の方が偉いはずなんだ！…と思つたけど世の中兄貴が偉いなんて事はあまりないし…ああ、辛い。

「ゲーセンつて行つたつて地下街閉鎖つて言つてたじょん。他のところは遠いから嫌だよ」

「んだよ、ノリが悪いな。モテねえぞ？」

「ぐつ、余計なお世話だよ」

なんでもいつも心をえぐる事を言つのだろつか？もう少し僕に優しくは…ならないね、諦めよう。何だか諦めてばかりな気がする。

「あ？あそこにあるの転校生じゃねえか？」

「ああ、姫神さんだね。そりいえば転校生何だつた」

「まあインテックスが乱入してきたせいで影は薄くなつたけどな  
そつこつのは言わなくていい。つてなんかキヨロキヨロしてゐるじゃ  
ん、どれだけ地獄耳なの？」

「御学友と会話しねえのか？」

「忙しそうだからいこよ」

「どう見ても手ぶら何だが」

「気のせいだよ」

「お前絶対姫神嫌いだろ……」

「何その言い掛けり……」

「何てやつているつちに姫神さんを見失つていたり。まあいんだけ  
どね、彼女不遇だし。いや、良くはないんだろうけどまあいいや。や。

「じゃあ、『』飯も食べたし帰る?」

「だからゲーセン行くんだつて、話し聞けよ」

それは僕の台詞だ。

「行くにしたつて警戒出でるじやつてないんじやないの?」

「なら飯屋もやつてねえだら」

「うううときに鋭いんだから… というかどれだけ家の生活費を浪費したいの? 嫌がらせ? 嫌がらせなの?」

「実はもうお金がないんだ…」

「名門校に通つてたんだし金が無いとか言つ嘘はいいから、預金かなりあるの知つてんだぜ?」

「勝手に人の預金通帳見ないでくれるかな?」

「まあ気にすんなって。それより行くぞ」

「あ…もういいや、帰ろ。うん、それがいい。

とこうわけでかなたと反対方向に歩きだす、まだ向こうは氣づいてないようだった。

「つてーおここらー?」

どうやら氣づいたようだ、時間操作を使い走り出す。まあ当然向こうも使つてるわけだけど… こうなつたら単純に体力勝負、まあ負けるつもりはないね。

「逃がさねえぞこの野郎!」

「逃げ切るよ!」

かなめは 車道に 飛び出した 横切る 成功

かなめは 反対側の 歩道に たどり着いた ロマンド 逃げる

( 時間操作で遅くしてこるので車も遅い遲い。 )

「 てめえ、 車道に飛び出してんじゃねえ！ 危ねえだろー。 」

かなたは まだおいかけてくる

「 それじゃあその言葉そのまま返すよー。 」

泣き声が聞こえきた ロマンド ふと後ろを振り向いた  
( 時間操作中に聞こえるなんて…… )。

「 なーなに泣いてるのー。 」

泣き声の主はかなただつた ロマンド 急いでせばに駆け寄った。

「 かかったなー馬鹿野郎ー。 」

デーティーン なんと かなたの 演技だった

「 し、しまつた！ 」

かなめは 捕まつてしまつた YOLO MODE

「かなた……そこ家なんだしあつ歸れ?」

「チツ仕方ねえな……」

「何だか良くながるらしく、疲れたのかな? 僕も疲れたしね。」

「あれ? かなめが一人? なんや? 僕は夢でも見てるんか? ええ夢やもつとやべれやせや……」

「おこ、何だこの変態は」

「ダメだよ? 見ちや、ダメ」

かなの言葉が辛辣だけど、まあ……つか青ピだし。

「そんなこと言わんとこでな、僕泣いてまつで?..」

「…なあ、今日の晩飯はなんだ?」

話題転換、まあその話題は直ぐに終わる。残念だけど。

「せつを食べたでしょ?」

「話しへりご合せのよ……」

いやまあ分かつてたけど。

「「」めん…」

「 もう帰つて風呂入るひづぜ?」

「 風呂…やど?」

青ピが何かブツブツ言つてゐるけど聞き取れない。…まあ聞き取れないほうが幸福かもしれないから気にならないけど。

(今の言葉から察するに風呂には一人で入つてゐることやんな?  
ふたり…一人で(ズギューン)(ピー)(更に中略)やなあ…はあ  
はあ…これが現代の桃源郷や!)

「 おい、何かキモいから早く離れようぜ?」

「 同感、幸い氣づいて無いみたいだし早く行こつ」

ちょうど降りて来ていたエレベーターに乗り込む、青ピにはまだブツ  
ブツ言つていた。扉を閉め、上へ。何だか疲れた、病院での寝疲れ  
だけじゃないねこの疲れかた。もう眠い、早く風呂入つて寝よつ。

「 おお、涼しいな。」

部屋に先に入つたかなた、何故か涼しいと言つてゐる。

「 え?」

涼しい？今夏なんだけど、まさか冷房…いやいや、流石にそんな阿保な真似を…うん、涼しい。

「かなた、何時からつけてる？」

「あ？ 嘘過ぎじゃねえか？」

「今月お小遣なしね

当然の処置だと思つけど、どうだらうか？ こうかこんな奴がいるから地球温暖化が止まらないんだ！

「んだとお？ めえ喧嘩売つてんのかー？ おー？」

なんでこんなにガラが悪いんだ、と血のようぢじで覚えて来るの？ こんな。

……一方通行かな？ といつより一方通行に突つ掛かつて来るチンピラ共かな？ 何だか納得。

「喧嘩はしないナビお小遣は無し。決定」

「よし、腹を割って話さうか。」

「だから決まつたんだって」

その後取つ組み合いの喧嘩になつてお小遣が復活したのは秘密。

「あたた、いろこの痛い…」

昨日、痛めた場所をさすりながら窓の外を眺める。外は薄暗くどんよりとした雲に覆われていて今にも雨が降りそうだ。はあ、ため息つき部屋の時計に目を向けた、朝6時前学校があるとは言えずいぶん早起きだ。

「さて、お弁当つくれる」

のらつくりとキッチンに向かつ、炊飯器を見るともう炊けるみたいだ、炊飯器の予約ができるいるのを確認し冷蔵庫を開けた。

「ん~どうしようかな、面倒くさいし炒飯でいいかな?」

適当に材料を選ぶ、賞味期限を見てはあれもこれもと引つ張り出し具材が決まっていく。

ネギ、かまぼこ、豚肉、卵、ニラ、鮭フレーク、キムチ。もう炒飯じゃなくて漢炒めな気がしないでもない。いや真の漢としては仕方なく行き着いてしまう料理だよね、仕方ない、行き着くんじゃなくて行き着いてしまうのが真の漢。

フンフンと鼻歌を歌いながら材料を切り刻む、キムチの匂いが朝からそそる。

豚肉を炒め…等考えて順番を決めて炒めようとしたけど却下、一度に炒める。

ジューージューといい音と匂いをかもし出し豚肉が焼けたら、卵、続いてご飯投入、ぱらぱらにはならないなぜなら漢の料理だから。

「朝からこんな重いの食えねえよ…頭おかしいんじゃねえの？」

後ろからフライパンの中を覗き込んできたかながごみを見る目で言つてきた。

「いいんだよ僕のお弁当なんだから、かなたの朝ごはんは別にあるから」

「そうか、まあ当然だよな」

こいつは何を言つているのか？まだ自分の立場がわかつてないのかな？嫌、ごめんやめてさわやかな朝ごはんありますから、やめてやめてフライパン触れたら熱いから。

ふうかなため僕に恐れをなしてリビングに逃げたな？ちょろい奴。  
とりあえず漢炒めは皿に盛つて冷めるのを待つ、あつたかいまま入れたら食べるころには痛んじやうからね。冷めるのを待つ間に僕と仕方なくあなたの朝ご飯をつくる。目玉焼きにベーコン、ウインナー、トースト一枚の洋風ブレックファスト。

「朝は米だろ、お前日本人じゃねえな？」

「日本人だよ、というより僕が日本人じゃなかつたらかなたも日本人ではないでしょ…」

まったく、朝から疲れるよ…

そんなこんなで、朝食を食べて片付けてお弁当を包み着替えて（女子制服）7時半過ぎ、今出れば遅刻は無い、まあ早すぎるんだけど。

とこりわけでいやに静かなお隣さん宅へ侵入。鍵?ノブ回したらあ  
いてたから閉め忘れだと思う、無用心  
。

部屋を見渡すとどう見てもインテックス（爆睡）しかいない。確か  
風呂場で寝てるんだつけ?そーっと風呂の扉を開けるとまだ寝てい  
た、中は「じちや」「じちや」している。携帯のアラームは機能してないら  
しく完全に遅刻コースだねこれは。

仕方ない、学校でぐしひ言われるよつはいいでしょつ起ひそわ。

そして風呂場に踏み入るうとした瞬間、足元から何がが飛びだした。

「うわっー！」

猫だ、たしかスフィンクスつて名前だったかな?風呂場からインテ  
ックスの方に走り寄りこっちを見ていた。  
ふう、びっくりさせないで欲しい。

いざ、起こそうと思いつ風呂場に踏み入る。その「じちや」「じちや」した足  
元に石鹼があつたらしく滑つた。

「うーあーー！」

「「」はつー?なななんですかーインテックスを…ん?」

風呂桶に向かつて転ぶとか…「ソントじやないんだから、何やつてる  
んだ僕は。取りあえず顔を起こし当麻の様子を伺う、あれ?顔が無  
い? そう思い下を見るとスカートの中に当麻の顔が収納されていた。

「お、おはよウ!」「そこますかなめさん」

スカートがモゴモゴと動く。

「うわあああああー！」

「ぱっと飛びのく、まあ狭いから足の方に行つただけなんだけど。

「お、おはよう当麻」

やばい、やばい、なんで朝から濃厚なホモスレが立ちそなことをしなきゃいけないんだ。

【濃厚な】朝からお盛んですね【ホモスレ】

…うわああああああ。こんなスレがたつたら間違いなく発狂する、それに巻き込まれた当麻もついでに発狂する。そしてインテックスが怒り狂…あれ?いやな予感とともに当麻と風呂の入り口を見る。

「イ、インテックスさん?」

引きつった当麻の顔、笑顔のインテックス

「朝から騒がしいんだよ?それに朝はんは?」

「い、今作らせていただきます」

そもそも僕を置いて風呂場から退出して行く、当麻がインテックスの横を通りうとした瞬間、インテックスは当麻に噛み付いていた。なんという早業、当麻の叫びとインテックスのわめきが朝の寮内に響き渡った。

なんだか申し訳なくなつたのと遅刻したくないのとインデックスのご機嫌取りのために当麻が犠牲になつてゐる中、朝ごはんを作る。そのおかげか機嫌も戻り遅刻前に学校に向かうことが出来た。よかつた。

「僕は当麻を絶対に許さない」

「なぜ！？上条さんがいきなり許されない理由がわからないっ！」

理由なんて簡単だ、当麻のアンラッキーが発動したおかげで遅刻間違いなしになつた。

「電車が遅れたのは当麻のせいじゃないの！」

「そんな！知らない能力者が勝手に止めたのは上条さんのせいじゃないと思うんですがねえ！」

街角で当麻とキーキー言い合つ、正直歩いてる人のこの一言が無ければもうとヒートアップしていたと思う『なんだ痴話喧嘩か？リア充は死ね』と吐き捨てたメガネの顔は忘れない、というより僕は男だ、そこを間違えないでもらいたい。

「はあ……もう、不幸だ……」

「それに巻き込まれる身にもなつてもらいたいよ。そうだね、今日はこのままどつか遊びに行こつか？」

もせ学校に行く気をなくした、いよいよ今日へりこは、夏休み延長ってことだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1460n/>

とある学生の時間操作

2012年1月12日20時53分発行